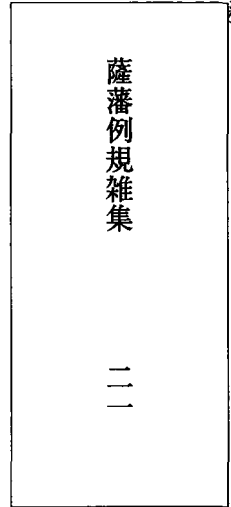


(表紙)



薩藩例規雜集二一

目錄

全国戸口数 (官中秘策鈔)

宗門改 (巡見使応答心得条目鈔)

札改条目

(以下五行、本文なし)
御家中分限

御領國中惣人数宗旨

牛馬数

七島高并人数

忌服令

虚無僧ノ本則

寺院社家格式

門首順之次第

僧官成御礼物

寺院諸法度

寺院社家取扱

靈符祭

薩藩例規雜集二一

一三四〇

全国戸口数 (官中秘策鈔)

安永三年甲午調

一大日本国数合七拾ヶ国之惣人数一国一男一女ヲ、有志并分チ其数ヲ記ス

領主之事

付、人別御改メノ御規足之事并惣大名石高之部類ヲ

分ル事、

一大日本国七拾ヶ国之人数

都合式千五百八拾六万七千八百三拾人

内、千三百八拾壹万八千六百五拾四人 男

千貳百九万九千七百七拾六人 女

一大日本七拾ヶ国石高 松前・対馬除之、

都合貳千五百七拾八万六千八百九拾五石余

人別改御規足之事

一諸国人数之儀、御料之御代官、私領ハ領主ヨリ去子年

（領主）明和五年
戊子國安永三年甲午 当年年相改、春中ヨリ十一月迄書付差出シ、相残日十

一月集之、一冊ニ成候事、

一男女人数十五歳迄之内、領主ニテ相改候格別例ヲ以改

出候ニ付、年齢不同有之候事、

一御朱印地・除地之寺社領人数モ諸国人数之内籠リ候事、

一江戸・駿府・京・大坂・奈良・堺・伏見・大津・長崎

等ナリ町屋地子免許之場所并諸国城下町地子免許之地

之人モ勿論惣人数ニ不偏事、

一石高ハ元禄年中中国所ヨリ差出御帳ヲ以相記候之事、

一向後二相記候不及、子年午年二前々之通相改差出ス積

リ之事、

一武家方奉公人并又モノ、諸国人数之内除候事、

右ハ、寛延三年午十二月御改書付ノ写ナリ、

一寛延三年午人別帳卜延享元年子人別帳突キ合（之カ）ノ

ノ人数貳拾万八千五百貳拾式人 国々ニテ増候分

右之内増分ヲ引、残ル減候分

貳拾参万五千六百貳拾人

宝曆六年子之人別帳卜寛延三年之人別帳ニ突キ合セ

シテ

諸国人数都合

貳千六百六万八千八百三拾人

内、千三百八拾三万三百拾壹人 男

千貳百貳拾貳万八千五百拾九人 女

国々ニテ増候分

人数四拾五万三千貳百人

国々ニテ減候分

三十万九千貳百人

右増分之内減候分ヲ引、残ル増候分

十四万四千人

七十ヶ国大名数

都合貳百六拾式人 石高郡類ヲ分

内、

但、余流之數ハ除之、

一 壹万石 八拾壹人

一 貳万石 四十三人

一 三万石 三拾壹人

一 四万石 六人

一 五万石 二十四人

一 六万石 拾四人

一 七万石 拾壹人

一 八万石 壹人

一 九万石 壹人

一 十万石 二十六人

一 二十万石 五人

一 三十万石 八人

一 四十万石 壹人

一 五十万石 三人

一 六十万石 二人

一 七十万石 壹人

一 百万石 壹人

右ノ内無高ノ人三人相除、貳百五十人、
一七十ヶ国諸大名知行

都合千七百六十二万六千六百六十五石

内、無高ノ内宗对馬守於肥前田代領壹万石、

五山城国昔山背下号シ、
畿州山州城州ト云

乙訓 葛野 愛宕 紀伊

宇治 久世 相樂 綴喜

一人數五十二万二千六百二十六人

内、二十七万六千九百四十人 男

二十四万五千六百八十六人 女

一 右高二十二万四千二百五十七石余

一 領重

一 禁裏御料

一 撰家・親王方・諸公家・諸門跡衆合百七十三人

一 大名壹人 (貳百石欠カ)

一 禁裏御料 (小堀カ)
山城国中ニ於テ、右支配御代官堀數馬ニ御藏手代ヲ付

置相納、御料ノ堤川除等之御入用モ右ノ内ヨリ相弁ス、

一新院御料五千石

支配人并納方右同斷、

但、御入用多分ノ時ハ公儀ヨリ御合力有之事モ有、

一 本院御料五千石

右、五ツ物成ノ積ニテ、現米二千五百石毎年藤村長兵衛御代官成ヨリ相納、不足時ハ外ノ御代官、京、摂州・

河州両国ノ内ヨリ相納、

一 女中衆切米九百石余

右、渡シ方同前、

一金貳千兩

右ハ、小堀數馬ヨリ毎年相入之、

右、合三万九百石、金貳千兩

一 凡八万二百二十九石九斗

右ハ、摂家・親王方・諸公家・諸門跡衆之知行成ハ、

地方或ハ御藏米ハ品多、京都ハ草創并諸所之名前卷ニ記之、

一 十万貳千石

右ハ、紀伊郡淀ノ城主、当城ハ元和九年亥 御上意ヲ

以築立、享保八年ヨリ稻葉氏領之、江戸江百二十五里

七町半、

大和国

添上 添下 平群 広瀬 葛上 葛下

拾五郡

忍海 宇智 吉野 宇陀 城上 城下
商市^{高力} 十市 山辺

一 奈良御奉行壹人

千石高御役料千七百俵、与力七騎、同心三十人、当御

役古来ハ兩人ナリ、元禄十六年ヨリ壹人、

一人數三千七万四千四十壹人

内、十八万九千二百五十八人 男

十八万四千七百八十三人 女

一 右高五十万四千九十七石余

領主 大名七人

一 十五万石

松平美濃守

右ハ、添下郡郡山城主ハ大和納言秀長・同中納言秀

俊之居、慶長以後御番城トナリ、享保九年ヨリ領之、

江戸へ百三十四里、

一 一万千石余

片桐石見守

右ハ、同郡小泉城主、当城ハ元和年中ヨリ代々領之、

百三十六里七丁、

一 壹万石

榊原能登守

右ハ、同郡柳生城主、寛永年中ヨリ代々領之、百十三

里、

一 壹万石

永井信濃守

右ハ、葛下郡新庄城主、延宝八年ヨリ代々領之、百三

十六里七丁、

一 壹万石

高木主水正

右ハ、丹南郡丹南城主、元和九年ヨリ領之、江戸ハ百

三十五里、

一 壹万石

北条覺吉

一 貳万五千石

植村新六郎

右ハ、高市郡高取城主、寛永十八年ヨリ領之、

和泉国

三郡

一 壹万石

織田丹後守

右ハ、城上郡芝村城主、慶長五年ヨリ領之、

一 人数二十万七千九百五十二人

大鳥 和泉 日根

一 壹万石

織田留十郎

右ハ、同郡柳下城主、慶長五年ヨリ領之、百二十里、

内、十万四千七百二十一人 男
十万三千二百二十九人 女

河内国

拾四郡

一 右高十六万六千九百九十二石余

錦部 石川 古市 安宿 大懸 高安

領主 大名二人

河内 讚良 茨田 交野 若江 渋川

一 五万三千石

岡部美濃守

志紀 丹比丹南トモ云、

一 人数二十三万五千五百六十六人

ハ百四十一里、

内、十壹万四千九百五十一人 男

一 壹万三千五百二十石

渡辺豊前守

十一万六千三百十五人 女

右ハ、和泉郡伯太城主、百三十四里、

一 右高二十七万六千三百二十九石余

撰津国

拾三郡

領主 大名式人

住吉 百濟 東成 西成 八部 島上 島下

豊島 河辺 武庫 (鬼力) 原 有馬 能勢

一人數八十万三千五百九十五人

内、四十二万六千七百五十六人 男

三十七万六千八百三十九人 女

一右高三十九万二千七百七石余

領主 大名四人

一四万石

松平遠江守

右ハ、河辺郡左崎城主、宝永八年ヨリ領之、江戸へ百

三十五里、

一三万六千石

永井飛驒守

右ハ、島上郡高硯城主、(概力)慶長五年ヨリ領之、百三十二

里、

一三万六千石

九鬼長門守

右ハ、有馬郡三田城主、寛永十一年ヨリ領之、百三十三

七里、

一壘万石余

青木美濃守

右ハ、豊島郡麻田城主、寛永年中ヨリ領之、百三十三

里、

日向国

五郡

白杵 児湯 那珂 宮崎 諸県

一人數二十二万五千四百二十一人

内、十二万六千四百九人 男

九万九千九百人 女

一右高三十万九千九百三十四石余

領主 大名四人

一貳万七千七十石

島津但馬守

右者、那珂郡佐土原城主、二百九十二里、

一七万石

内藤能登守

右者、白杵郡延岡城主、延享四年ヨリ領之、二百九十

五里、

一五万千八百石余

伊東大和守

右者、那珂郡飢肥城主、三百四十二里、

一三万石

秋月山城守

右者、児陽郡高鍋城主、(湯力)慶長五年ヨリ領之、三百八十

二里、

大隅国

八郡

大隅 菱刈 桑原 曾於 始良 肝属

馭謨 熊毛

一人數十三万千六百二十三入

内、七万四千五十四人 男

五万七千五百十六人 女

一右高十七万八百三十三石余

薩摩國 拾四郡

出水 高城 薩摩 日置 伊作 阿多

河辺 穎娃 指宿 給黎 谷山 奥小島

鹿兒島 飩島

一人數十九万四千三百十二入

内、十万六千九百六十人 男

八万七千三百五十三人 女

一右高三十一万五千石余

領主 大名一人

一七十七万八百石 松平薩摩守

右者、鹿兒島郡鹿兒島城主、此家ノ先祖兵庫頭、(義弘)関ケ

原御陣之時西国方へ一味セリ、西国方敗北之後帰国シ

ケル処、兄之入道(義心)神君ノ怒ヲ恐レテ対面ヲ不許、福

島左衛門大夫へ使者被遣之、神君へ御免ヲ願ケル事

再三ニ及テ御赦免アリ、其後継豊ノ簾中ノ竹姫君トテ

(綱吉)常憲院様之御養女、実ハ清閑寺大納言照実卿ノ息女ナ

リ、享保十四年ニ御入興アリ、供奉ノ事、引戸腰網代

乗物、三本道具、茶弁当、供道具有之、年始御規式ノ

節ハ道具持麻上下ヲ着シ、并馬口取大小ヲ帯セリ、江

戸へ四百十一里、

一三四一 (卷之四十) 二八八七号文書に同じ、本文略

一三四二 (卷之四十) 二八八八号文書に同じ、本文略

一三四三 (卷之四十) 二八八九号文書に同じ、本文略

一三四四 (卷之四十) 二八九〇号文書に同じ、本文略

一三四五 (卷之四十) 二八九一号文書に同じ、本文略

一三四六 (卷之四十) 二八九二号文書に同じ、本文略

一三四七 (卷之四十) 二八九三号文書に同じ、本文略

一三四八 (卷之四十) 二八九四号文書に同じ、本文略

一三四九 (卷之四十) 二八九五号文書に同じ、本文略

一三五〇 (卷之四十) 二八九六号文書に同じ、本文略

一三五一 (卷之四十) 二八九七号文書に同じ、本文略

一三五二 (卷之四十) 二八九八号文書に同じ、本文略

一三五三 (卷之四十) 二八九九号文書に同じ、本文略

一三五四	(卷之四十)	二九〇〇号文書に同じ、本文略	一三七三	(卷之四十)	二九一九号文書に同じ、本文略
一三五五	(卷之四十)	二九〇一号文書に同じ、本文略	一三七四	(卷之四十)	二九二〇号文書に同じ、本文略
一三五六	(卷之四十)	二九〇二号文書に同じ、本文略	一三七五	(卷之四十)	二九二一号文書に同じ、本文略
一三五七	(卷之四十)	二九〇三号文書に同じ、本文略	一三七六	(卷之四十)	二九二二号文書に同じ、本文略
一三五八	(卷之四十)	二九〇四号文書に同じ、本文略	一三七七	(卷之四十)	二九二三号文書に同じ、本文略
一三五九	(卷之四十)	二九〇五号文書に同じ、本文略	一三七八	(卷之四十)	二九二四号文書に同じ、本文略
一三六〇	(卷之四十)	二九〇六号文書に同じ、本文略	一三七九	(卷之四十)	二九二五号文書に同じ、本文略
一三六一	(卷之四十)	二九〇七号文書に同じ、本文略	一三八〇	(卷之四十)	二九二六号文書に同じ、本文略
一三六二	(卷之四十)	二九〇八号文書に同じ、本文略	一三八一	(卷之四十)	二九二七号文書に同じ、本文略
一三六三	(卷之四十)	二九〇九号文書に同じ、本文略	一三八二	(卷之四十)	二九二八号文書に同じ、本文略
一三六四	(卷之四十)	二九一〇号文書に同じ、本文略	一三八三	(卷之四十)	二九二九号文書に同じ、本文略
一三六五	(卷之四十)	二九一一号文書に同じ、本文略	一三八四	(卷之四十)	二九三〇号文書に同じ、本文略
一三六六	(卷之四十)	二九一二号文書に同じ、本文略	一三八五	(卷之四十)	二九三一号文書に同じ、本文略
一三六七	(卷之四十)	二九一三号文書に同じ、本文略	一三八六	(卷之四十)	二九三二号文書に同じ、本文略
一三六八	(卷之四十)	二九一四号文書に同じ、本文略	一三八七	(卷之四十)	二九三三号文書に同じ、本文略
一三六九	(卷之四十)	二九一五号文書に同じ、本文略	一三八八	(卷之四十)	二九三四号文書に同じ、本文略
一三七〇	(卷之四十)	二九一六号文書に同じ、本文略			
一三七一	(卷之四十)	二九一七号文書に同じ、本文略	一三八九		
一三七二	(卷之四十)	二九一八号文書に同じ、本文略			

虚無僧ノ本則トヤランイフ物ニ彼普化和尚カ錫杖振廻シ、天ヨリ打ハ地ヘ潜ル、地ヨリ打ハ天ヘ飛フ、右ヨリ打ハ左ヘ開ク、前ヨリ打ハ後ヘシサル、アケ戸ノシサリ鴨ノ入首、縦横無碍ニ遁ルトイフヲ抱駐メ、ノカレノナラヌ時ハイカニト問ヘハ、悲田院ニ法事ノ有ユヘ齋食ニツクト答ヘシ、誠ニ禅機ニ妙ナルモノニテ、劔術者・軍法者ノ称美スルモ理ナリ、イカニ劔術ノ達人・弓馬ノ名人ニテモ、腹ノ中カラヒダライトイフ大敵ニ切懸ラレテハ防キモ遁レモナラハコソ、昔ノ名将勇士達名モナキ雑兵ノ手ニ懸リ、アヘナク討レ賜ヒシモ大カタハ数日食事ノ暇ナク空腹ニナリシ故成ヘシ、ソレヲ軍書ニ軍ニハシツカレ賜ヒシナト、記セルハ、遺餓シクナリシカラトハイヒニクケレハ飾リ詞トイフ物ナリ、一人ノ身ノミナラス、一隊ノ人数亦爾リ、タトヘハ一千ノ兵ヲ三手ニ分ケ、一手カ戦ヘハ一手ハ横ヲ入レントカマヘ、又一手ハ兵糧ツカヒツ、休足ヲスル、斯ククリ返シ々々シテ兵糧サスレハ人数勞ル、事ナクト老将ノ云シ由ヲ朱子ノ申サレキ、是ハ膚浅ノ言ニシテ三才ノ小兒モ知レル事ナカラ、八十ノ老将モシカヌル事ナラント覚シ、一隊ノ人数ノミナラ

ス一城一國亦爾リ、イカニ軍卒多ク集リ兵具事足リトモ、民饑エ兵糧ツキナハヤカテチリノ、ニ成ヌヘシ、此ヲ孔子ノ兵ヲ足シ食ヲ足シ民之ヲ信スト仰ラレキ、戦具事足リ兵糧多ク畜フトモ、上下心和セス将卒互ヒニ疑ヒ発ラハ陣モ固マルマシ、城モマタ崩レナン、孫・呉・司馬皆是ヲ敷衍シタルモノナリ、是ヲ思ヘハ、論語ハ大将秘伝ノ卷上々ノ兵術無上ノ軍法ナラスヤ又論語ニ既ニ庶アリ、之宣ヒシヲ或人庶トハ軍兵ノ多キ事、富ハトハ兵糧ノ事、教トハカケ引操練ノ事ナリト解キシハ活タルイヒヤウナリ、因ニ曰、薦僧ノ本則一二通見タルニ、文言ニ詳略有テ一様ナラス、其時ノ和尚ノ意ノマコト見ヘタリ、シカシナカラ彼普化街市揺レ鈴曰明頭来明頭打、暗頭来暗頭打、四方八面来旋風打、虚空来連架打、一日臨濟令僧把住曰総恁麼来ザル時如何上、師托開曰来日大悲院裡有齋僧回拳似臨濟、臨濟曰、我從來疑着這漢ト云段ノ本文ニモ異同アリ、イカナル事ニヤアラン、又昔ノ普化ハ鈴ヲ振シユヘ普大寺ヲ鈴鐸山ト称スルヨシナレト、今ハ尺八ヲ吹ク、其弁ヲ偈ニ鈴鐸ト尺八ト是同乎是別、汝道々云何、答別々見別ナト、述タルモ見ユレト定カニハ解シ難シ、又古書閑田耕筆ニモ図アリニハ薦ニ物ヲ包ミ背負ヒシ人ノ像ニ薦僧ト題セ

シト、今ハ虚無僧ト書ルハ本則ノ秘參トヤランイフモノ
 二、虚無禪究竟那、一曲者默然座吹、収用者一息截断、
 畢竟普化虚無本分性者日午打三更、ナト、アルニヨリテ
 ナランカ、

一三九〇	(卷之二十三)	二二八五号文書に同じ、本文略)	一四〇四	(卷之二十三)	一三〇〇号文書に同じ、本文略)
一三九一	(卷之二十三)	二二八六号文書に同じ、本文略)	一四〇五	(卷之二十三)	一三〇一号文書に同じ、本文略)
一三九二	(卷之二十三)	二二八七号文書に同じ、本文略)	一四〇六	(卷之二十三)	一三〇二号文書に同じ、本文略)
一三九三	(卷之二十三)	二二八八号文書に同じ、本文略)	一四〇七	(卷之二十三)	一三〇三号文書に同じ、本文略)
一三九四	(卷之二十三)	二二八九号文書に同じ、本文略)	一四〇八	(卷之二十三)	一三〇四号文書に同じ、本文略)
一三九五	(卷之二十三)	二二九〇号文書に同じ、本文略)	一四〇九	(卷之二十三)	一三〇五号文書に同じ、本文略)
一三九六	(卷之二十三)	二二九一号文書に同じ、本文略)	一四一〇	(卷之二十三)	一三〇六号文書に同じ、本文略)
一三九七	(卷之二十三)	二二九二号文書に同じ、本文略)	一四一一	(卷之二十三)	一三〇七号文書に同じ、本文略)
一三九八	(卷之二十三)	二二九三号文書に同じ、本文略)	一四一二	(卷之二十三)	一三〇八号文書に同じ、本文略)
一三九九	(卷之二十三)	二二九五号文書に同じ、本文略)	一四一三	(卷之二十三)	一三〇九号文書に同じ、本文略)
一四〇〇	(卷之二十三)	二二九六号文書に同じ、本文略)	一四一四	(卷之二十三)	一三一〇号文書に同じ、本文略)
一四〇一	(卷之二十三)	二二九七号文書に同じ、本文略)	一四一五	(卷之二十三)	一三一一号文書に同じ、本文略)
一四〇二	(卷之二十三)	二二九八号文書に同じ、本文略)	一四一六	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
一四〇三	(卷之二十三)	二二九九号文書に同じ、本文略)	一四一七	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四一八	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四一九	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四二〇	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四二一	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四二二	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)
			一四二三	(卷之二十三)	一三一二号文書に同じ、本文略)

一四二三	（卷之二十三）	一三一九号文書に同じ、本文略
一四二四	（卷之二十三）	一三二〇号文書に同じ、本文略
一四二五	（卷之二十三）	一三二一号文書に同じ、本文略
一四二六	（卷之二十三）	一三二二号文書に同じ、本文略

薩藩例規雜集

一一一

薩藩例規雜集一一一

目錄

- 文武官等及ヒ職制
- 赤穂家臣復讐略記
- 禁裏炎上及ヒ内獻品
- 享保記鈔
- 鹿兒島ヨリ近国道程
- 各島數
- 山嶽之數
- 牧場之數
- 温泉之數
- 湊港之數

薩隅日名所

薩隅日產物獻上品

藥種

鉾山

山林

竹木

金鉾山

酒屋

親族

本村枝村之數

永野金鉾發見概略

古來上使人名

諸国巡見使者覺

宿繼郵書

幕役廻浦二就テ

公儀役人廻浦

貞享改元達書

盜賊人之穿鑿条々

御礼日大廊下伺公之声高成ヲ制ス

(次行、本文より補)
振舞膳部之覺

魚鳥献上之御触

御老中ニ進物之覺

(次行、本文より補)
献上物台并進物台ノ御触

捨子并生類御触

諸大名於江戸可召連供之事

就御移徙大名從者覺

奥坊主衆条目

御供番役

御代替誓詞

辻札

鹿兒島城中御座間画図之説

孟宗竹舶来ノ説

鑄錢御目論見ニ就テ加治木郷由来調査

鑄錢御目論見ニ就テ古金銀錢価格ノ概略

琉球国在留外国人処分ニ就テ調査

同上

軍事改正ニ就テ調査

農工業奨励ニ就テ調査

琉球奇石

(以下四行、本文より補)
狛犬考

麝香鼠

天ノ逆針

山汐及火山考

日本国中寺数ノ事(梵鐘鑄換調査ニノ丸贖写方)

薩藩例規雜集二二

一四二七

文武官等及ヒ職制(江戸邸糺合方贖写)

本朝当今諸侯ノ制、祿万石以上ヲ大名ト称ス、即諸侯ナリ、又分割有リ、万石以上・五万石以上・十万石以上・

三十万石以上凡テ四等ナリ、品第ヲ云ハハ国主・城主・

領主ナリ、凡テ三等、其爵位ハ大・中納言、参議、中将、

少将、侍從、四位・五位凡テ八等、諸侯ノ制是ニ止マル、

官位相当

正一位 從一位 太政大臣

正二位 從二位 左大臣 右大臣

正三位 大納言
從三位 中納言 彈正尹 太宰師 大將

以上公卿

正四位上 中務卿 東宮傅
正四位下 參議 式部卿 治部卿 民部卿

兵部卿 刑部卿 大藏卿 宮内卿
三太守

從四位上 左大弁 右大弁
從四位下 中務權太夫 彈正大弼 神祇伯

女典侍 大膳大夫 左京大夫
春宮大夫 修理大夫 勘ヶ由長官

按察使 左兵衛督 右兵衛門督
中將 太宰大弼

正五位上 右中弁 中務大輔
正五位下 左少弁 彈正少弼 式部大輔

治部大輔 民部大輔 兵部大輔
刑部大輔 大判事 大藏大輔

宮内大輔 少將

從五位上

中務少輔 大舍人頭 圖書頭
内藏頭 縫殿頭 内匠頭
右馬頭 大學頭 兵庫頭

雅樂頭 玄蕃頭 諸陵頭
主計頭 李頭 鎮守府將軍
女掌侍 大國守 左衛門佐

少納言 中宮權佐 陰陽頭
右兵衛佐 上總介 常陸介

神祇大輔 侍從 式部大輔
上野介 文章博士 治部少輔 民部少輔

兵部少輔 刑部少輔 囚獄正
大藏少輔 宮内少輔 大膳亮

大炊頭 主殿頭 典樂頭
掃部頭 左京亮 勘ヶ由次官

東宮博士 春宮亮 春宮大進
修理亮 齋宮頭 齋宮長官

上國守 太宰少弼
神祇少輔 大外記

正六位上

神祇少輔 大外記 左大史

彈正大忠

中務大丞

大内記

正七位上

彈正大疏

少外記

左少史

内匠助

大学助

玄蕃助

中務大録

少内記

式部大録

正親正

内膳正

造酒正

治部大録

大膳少進

右兵衛少尉

東市正

主膳正

圖書權助

正七位下

大宰大典

左衛門少尉

舍人大允

正六位下

彈正少忠

大舍人助

圖書權助

正七位下

少監物

大主鈴

舍人大允

縫殿助

左馬助

兵庫助

圖書大允

陰陽博士

天文博士

式部大丞

明經博士

治部大丞

軍監

助教

直講

雅樂助

主計助

隼人正

明法博士

医博士

左京少進

織部正

左助

采女正

從七位上

大國大掾

舍人少允

圖書少允

齋宮助

大國介

中國守

從七位上

主典

舍人少允

圖書少允

太宰大監

中宮大進

陰陽權助

從七位上

陰陽大允

曆博士

音博士

從六位上

中務少丞

中宮大進

陰陽權助

從七位上

書博士

以下博士

大國少掾

式部少丞

治部少丞

掃部助

從七位下

上國掾

漏刻博士

囚獄佐

主水正

將監

上國介

從七位下

大典鑰

醫師

正親佐

大宰少監

右衛門大尉

少判事

從七位下

針博士

造酒佐

東市佐

從六位下

大監物

中宮少進

少判事

從七位下

典膳

將曹

正親佐

典藥助

大膳大進

下国守

從七位下

勘ヶ由小路(主典力)

將曹

東市佐

左京大進

左兵衛大尉

春宮少進

正八位上

少主鈴

彈正少疏

式部少録

主水頭

勘ヶ由判官

春宮少進

正八位上

治部少録

隼人佐

織部佐

諸寮	諸職并坊	八省	太政官	神祇官	
頭	大夫	卿	大臣	伯	長官
助	亮	輔少大	納言	副少大	次官
允無大少或	進少大	丞少大	右左弁官大中少	右左納言大中少	判官 <small>マツリカヒト</small>
屬大少或	屬少大	録少大	右左大史大少	外記大少	主典 <small>マツリカヒト</small>

正八位下 采女佐 太宰少典
 中務少録 中宮大属 大膳大属
 主水佐 左京大属 中国掾
 中国少属(官カ) 軍曹 大膳少属
 左京少属 大国大目
 從八位下 舍人大属 内藏大属
 少典鑰 舍人大属 内藏大属
 算師 大国少目 上国目
 下国掾
 大初位上 舍人少属 内藏少属
 大初位下 隼人令史 中国目
 少初位上
 少初位下 下国目
 無相当官 参議 内舍人

諸司	正	佑	令史大少或
彈正台	君 <small>(伊カ)</small>	彌少令無大少	疏少大
東宮	首正	佑	令史
令外 加茂齋院司 勸修寺司 鑄錢司 造幣司 同皆官	長官	次官	判官 主典
令外 修理宮卜城司 防鴨河使 施藥院使	使		判官 主典
令外 檢非違使	別当	尉	志
諸国守大上二 有權官	介中上下国無權官	尉 大上 大中国 大少 有權官 無權官	目大国有 大少
太宰府帥有權官 近衛府右左大將	式大有權官 將少中	監少大 將監	典少大 將曹
四府督	佐	尉少大 軍監	志少大 軍曹
鎮守府將軍	副將軍	軍監	志少大 軍曹
官人十二尚侍	典侍	掌侍或無掌	女嬪取女嬪兼任 者云々 木司采女 月司
家親王職專令 三位以上	家司也 扶二三家ハ 無扶	從一品一位家 三品家ハ無從 大少	書家ハ有 大少

一公卿ハ三公九卿ナリ、是則大・中納言ヲイフ、月卿ト云フモ同シ、雲客トハ殿上人ヲ云フ、四位・五位・六位(マ)位ヲ云フ、専ラ中將・少將・侍從ヲ云フナリ、

一 公方号ハ元來院ノ尊号ナリ、足利義詮將軍マテハ公武相交テ天下ノ政道ヲ沙汰セシニ、室町將軍義滿ニ至テ初テ武家一統ノ世トナリ、官太政大臣ニ任シ、勅宣ヲ受テ公方ト称セシヨリ、已來世々大樹ノ任ニ当レル人ヲ公方ト云フ、御当家將軍宣下無之ハ上様ト称シ、宣下ノ後公方ト称スルナリ、

一四二八

赤穂家臣復讐略記(留守居役所日記抄)

元禄十五壬午十二月十四日夜八ツ時淺野内匠頭殿家來四十七人、本所吉良上野介殿討取、芝牛町泉岳寺へ除取、十五日ノ夜四家諸侯へ御預ケ、

一四二九

禁裏炎上及ヒ内獻品(旧記鈔江戸邸札合方写)

宝永五年戊子三月十八日

禁裏炎上、(東山天皇) 主上・春宮近衛閑白家熙卿御宅へ被成御

座、(吉野) 太守様御内々ニテ琉球製青貝料紙箱・唐人製青

貝大硯屏一脚・唐紙五卷・純子二卷・金欄一卷ヲ 主

上二、瑪瑙石硯屏一脚唐人製・琉球青貝料紙箱・唐繪五

卷 春宮ニ御献上有之度ト 平松中納言時方卿迄被遣、

時方卿ヨリ近衛様へ被達、八月廿五日御献上、

一 花尾平等王院御舟興、

一 四月十日 太守様鹿兒島御発駕、十一日花尾御參詣、

一四三〇

享保記鈔(同上)

享保八年癸卯

一 緞紳全書・中樞全書・輔政要覽御献上、

一 正月三日太守様(吉貴公) 鹿兒島御立、三月四日御出

府、同六日上使、

一 三月十二日御參勤ノ御礼、御太刀一腰・白銀五十枚・

白縮緬廿卷御献上、島津内膳久兵・名越右膳恒渡御目

見、御太刀・馬代・紗綾二卷ツ、献上、

一 三月十七日御奉書ヲ以、増上寺火ノ御番有馬(前維)玄蕃頭様

御代被仰付、

一 四月廿一日巳刻御前様松平民部大輔吉元女、宝永五年御輿入、子六月四日於江戸誕生、十五才

一 四月廿三日三ツ目御夫婦様民部大輔様へ御入、民部大

輔様御腰物大小被進、御供之御家老島津内膳殿・伊集院藏人殿刀一腰ツ、拝領、

一四月廿五日五ツ目民部大輔様・御夫婦様御出、

一四月廿八日太守様御登城、御婚禮之御礼、

一五月九日島津淡路守殿(惟久)(佐土原藩主)御隠居願、此御

方様御添書ヲ以テ被差出、

一五月廿五日島津(忠義)但馬守殿(佐土原世子)御家督被仰出、

一五月十九日御馬二疋公方様へ御献上、一疋ツ、御老中

へ被遣、

一六月暑氣御機嫌伺、吉貴公鏗節御献上、

一七月十七日太守様上野御參詣、

一七月二十日上使ニテヒハリ五十御給、

一九月十二日上使ニテ御暇御給、白銀百枚・白チリメン

三十卷御拝領、

一九月十三日御暇ノ御礼、

一九月十六日太守様江戸御立、

一金三十兩鎌倉白旗大明神へ御寄付、

一島津但馬守殿家督、先例之通鹿兒島へ参度旨被伺、伺

之通御免許、

一十一月廿七日北郷(久喜)作左衛門卒去、

一十二月朔日朝五ツ時 太守様蒲生御立、纒之御手廻二

テ吉野追分ヨリ磯へ御參、惣御供ハ大乘院門ニ相控、

八時御着城、

一十二月十一日島津左中殿御家老、

一平岡八郎太夫若御年寄、島津主計(久名)・新納左京太夫御目

付、

一寒中御機嫌伺、吉貴公錫御献上、

一御前様御拝領物、

一宿次御鷹ノ鶴御拝領御礼使島津筑後、

享保九年甲辰

一正月年頭御祝儀、吉貴公御太刀御献上、

一吉岡右京(義岡久守)、御隠居様御家老被仰付、

一正月十三日 吉貴公御快良、御參勤可被伺旨、御願之

通御奉書ヲ以被仰渡、

一二月朔日島津左仲殿大藏卜改名、

一三月廿五日祢寢仙十郎殿卒去、

一閏四月十一日広御庭ニテ相撲、御家老以下月次御礼罷

出候諸役人へ拜見被仰付、

一 六月十五日鳥津周防殿一所之地(久慈)(通唱重富) 拝領、大

始良木谷村一所被仰付、木谷村小高故、差添(野里村力)二野添村

高之内八百石方限ヲ以持高二クリ替被仰付、

一 七月朔日周防殿一所拝領之御礼、御太刀銀馬代三種二

荷進上於御座之間被仰付、

一 八月六日(吉貴女)ヲヒ口殿御誕生、

一 磯御飯屋ヲ磯御屋敷ト被改、

一 樺山主計(久初)・平田(位充)平太左衛門大御目付、

一 十二月十五日(家重)長福様ヲ若君様ト可奉唱旨 公儀ヨリ被

仰渡、

一 十二月廿六日為御參勤 太守様御発駕、御供(島津久次)内膳殿・

(名禮屋巻)右膳殿、

一 御前様御拝領物、

一 吉宗(將軍) 重疊之字、実名用候儀不留、同唱ハ心次

第遠慮、

一 年頭御座配ヲ年頭御礼着座ト被改、

一 御帰国御礼使鳥津仁十郎殿、

一 鳥津主計殿帯刀ト改名、

一 御家督御祝付鳥津左衛門・鳥津筑後・鳥津將監・鳥津

圖書御家老中へ御光儀、

一 若君様御弘メ付 太守様ヨリ御使者、

一 右二付、諸大名御礼、

一 右御礼被為受候付、 太守様ヨリ御使者ニテ御太刀馬

代御献上、

一 若君様へ(吉宗)從 公方様御実名被進、 家重公ト奉称、

右四件、享保八年ヨリ、

一四三一

鹿兒島ヨリ近国道程 (二ノ丸調所膳本)

肥後国熊本へ四十二里半 境迄廿六里廿三町

肥後国求麻へ二十二里 境迄十八里八町

日向国飢肥へ二十六里 境迄九里廿八町

日向国延岡へ四十五里

高鍋領福島境迄廿里十八町 船路四十五里

飢肥外之浦へ船路五十二里

日向国細島へ船路八十七里

硫黄島へ三十一里

竹島へ三十一里

桜島へ一里

口之永良部島へ卅八里

屋久島へ四十八里

黒島へ四十一里

種子島へ三十九里

(ヨコアテカ、横道)
ヨコアトへ二十里

口之島へ七十里

中之島へ七十五里

諏訪瀬島へ八十二里

臥蛇島へ八十三里

平島へ九十一里

悪石島へ八十九里

宝島へ百七里

琉球国那覇湊迄二百四十九里

琉球国ハテルマ迄四百五里那覇ヨリハテルマ迄海上百五十六里

一四三二

各島数

上甌島廻十四里十
三町六間

高千二百十九石余

薩州甌島郡

下甌島廻十二里二十町

高千五百七十一石余

右同郡

長島

高三千三百卅八石余

薩州出水郡

硫黄島廻二里五町

高千三百石

薩州川辺郡

桜島

高千六百九十八石余

隅州大隅郡

屋久島廻廿里卅町

高千八十石余

隅州馭謨郡

種子島

高五千二百五石余

隅州熊毛郡

竹島

薩州河辺郡

黒島廻三里十三町

右同郡

口永良部島廻六里十八町

右同郡

口之島廻二里二十五町

右同郡

中之島廻四里十八町

右同郡

臥蛇島廻一里十八町

右同郡

諏訪瀬島廻三里二十町

右同郡

平島廻三十二町

右同郡

悪石島廻二里二町

右同郡

宝島廻三里二十町

右同郡

(ヨコアテカ、横道)
ヨテアテ廻一里十町里ニアリ

右同郡

一四三三

山嶽ノ数

開閑嶽娘娃 野間嶽加世田 金峯山田布施 矢筈嶽出水
 上宮嶽鶴田 冠嶽申木野 高隈嶽高隈 霧島嶽
 白鳥山飯野 法花嶽高岡

一四三四

牧場ノ数

吉野鹿兒島 廻五里廿九町廿一間宝曆五年 馬四百八十三疋
 比志島野同 廻二里十五町三十間 馬二百四十五疋
 馬十九疋

笠山野東郷

廻五里十九町六間

馬百七十五疋
馬百四十八疋

寄田野高江

廻六里十九町四十間

馬三百三十六疋
馬二百四十八疋

顯娃娃

廻二里卅四町四十間

馬二百六十一疋
馬三百二十九疋

唐松野顯娃

廻三里二十一間

馬二百四疋
馬百三十三疋

野間野田加世

廻四里

馬百六十七疋
馬百二十八疋

下飯野

廻一里三十三町

馬百三十一疋
馬百二十二疋

市野山市山野之上飯

廻二里四町四十七間

馬八十六疋
馬七十五疋

瀬崎野出水

廻五里十六町五十二間

馬四百二十五疋
馬二百八十五疋

長島野

廻七里三町二十間

馬七百九十二疋
馬五百五十六疋

市来野

廻六里廿六町廿五間

馬三百十五疋
馬二百五十六疋

伊作野

廻五里十八町

馬百九十二疋
馬二百四十四疋

青色野蒲生

廻三里一町三十九間

馬四十疋
馬三十九疋

春山野曾於

廻二里十八町

馬四百五十六疋
馬二百十三疋

末吉野

廻三里廿三町十一間

馬五百疋
馬三百八十三疋

福山野

廻十里廿四町廿二間

馬二千二百六疋
馬千七百九十七疋
(八百八十九疋)

高牧野鹿屋

廻四里五町十間

馬八十五疋
馬三百十五疋

佐多野

廻三里七町三十六間

馬八十九疋

惣合廻八十五里三十四町四間宝曆五年生馬合四百九十四疋

一四三五

温泉ノ数

蘭牟田

湯田村宮城

紫尾村鶴田

湯田村市来

湯浦村伊佐

鯖淵村出水

武元村出水

添田村入来

市比野村樋脇西方村二所

西方村指宿

東方村同上

十町村同上

十二町同上

成川村山川二所

栗野村栗野

内村因分

東郷村日当

嘉例村同上

万膳村踊

三体堂村同上

中津川村同上五ヶ所

宿窪田村同上二所

上中津川村同上

有村桜島

古里村同上

田口村曾於郡

末永村飯野

昌明寺村吉田

一四三六

港ノ数

山川 坊津 片浦加世田 京泊水引
 倉津阿久根 脇元出水 米津出水 内之浦
 大泊佐多

以上、般改番所有、

角之浦知覽 久志 秋日 鰐之浦長島

倉戸長島 カセトウ同上 セキナン浦同 火之浦同

スソ黒同上 フク浦 大和田同 脇崎同

塩追同 カラ島

以上九ヶ所、大船出入無之、依日和大船掛ル、

一四三七

薩隅日名所

隼人ノ瀬戸 薩州出水

沖ノ小島 薩州硫黄島

唐ノ湊 薩州坊津

奈気木ノ森 隅州国分

気色ノ森 隅州国分

一四三八

薩隅日産物献上品

砂糖漬鹿兒島 鯉節七島 赤貝塩辛指宿
 小熬海鼠飯島 蜜柑桜島 炙鮎綾
 右、毎年御献上、

野駒 茶入 茶碗(皿カ)類 硫黄

樟脳 生蠟 檜子 米 粟

黍 稗 麦 蕎麦 大豆 大角豆

八重成 小豆 蕎麦 胡椒 唐芋

酒 菜種 麻 芋(芋カ) 塩国用不足

桑少 漆少 茶 柿 紙

木綿ワタ国用不足 煮取七島セシユ

一四三九

薬種

桂心 縮砂 海人草 楊梅枝以上 紅花指宿

枳殼 枳実以上 硫黄硫黄島 莪朮 山梔子

桔梗以上 天童子 葛根以上 苦参 益母草

牛膝 天門冬 車前子 草決明子 青木香

蔓荊子 瓜樓仁

瓜樓根

天瓜粉

芍藥

風藤

木通

茵陳

薏苡仁

薄荷

天南星

山藥

(枸杞方)
杓把子

地骨皮

蘼木

菊花

黃精

香薷

牽牛子

沙參

商陸

青箱子

草薢

川棟子

川骨

麥門冬

苦楝根皮

鬱金

五味子以上
鹿屋

蜜

蜜蠟

忍冬

五倍子

枇杷葉

山椒

金銀花

陳皮

釣藤鈎以上
檜島

蘇子

紫蘇(補方)

防風

白茯苓

赤茯苓

何首烏以上

白篇豆

牛蒡子

柴胡

前胡以上
國分

厚朴

黃柏以上
都城出口

羌活ウツ

羌活

独活

草根

人參以上
都城

白朮

蒼朮

樟腦出口

薩州四十六ヶ所、隅州四十三ヶ所、日州二十一ヶ所、

一四四〇

鉞山

錫鉞山

谷山之内有之、明曆元年之頃ヨリ堀初、近年衰山ニテ
年中出錫四千五百斤位有之、

明礬山

金鉞山

一四四三

薩州五十八ヶ所、隅州四十二ヶ所、日州二十一ヶ所、

一四四二

竹木

山林

一四四一

各定場所無之、海辺へ寄来ル鉄砂ヲ取り、土居吹水之
便付キ所へ一往木屋栖屋ニテ吹調、

鉄鉞

有之、堀候へトモ山不宜被差留、
御領内ニ無之、銅山ハ加世田野間山・阿久根・甌島ニ

雲母・砥石山・銀山・鉛山・銅山

湯平山栗野 山之城山躰ニ所 内木場山躰 湯地山同
硫黄ヶ谷躰 熊柳山同 嶽山曾於郡 霧島山同

山ヶ野隅州桑原郡 山町中人数六百二十四人、内男女三百七十二人他国者、二百五十二人御国者、

鹿籠藤州川辺郡 山町中人数二百四人、内三十五人他国者、二百五人御国者、

永野町藤州伊佐郡 二町家二十六軒、人数百六人、内男女六十一人他国者、四十五人御国者、

山ヶ野町四町家四十五軒、人数百四十二人、内男女八十二人他国者、六十人御国者、

右山之盛衰次第家居人数増減有之、

鍵山中家数百三軒、人数三百七十六人、内男女二百二十九人他国者、百四十七人御国者、

山ヶ野垣廻三里、西東少シ長シ、永野ヨリ山ヶ野へ一里、山中奉公人士二十一人、足輕十六人、

神社、永野・山ヶ野山神一社ツ、寺院、山ヶ野三ヶ寺、涯念寺浄土宗・久昌寺禅宗・遠帖

寺法華宗、永野一ヶ寺、安養院禅宗、寺領高無之、飯米被下之、

永野金山、寛永十七年三月廿二日稼御免、同廿年之春迄稼被差留、御沙汰之上明暦二年六月廿六日国中罷在候へ

トモ稼御免被仰渡、寛文二年地下へ他国者被合セ為堀旨被仰渡、

他国者金山へ入来候事、境目番所ニテ往来証文等見届、番人証文相添金山口屋へ差越、口屋檢丈見届之、金山礼所へ引合、何国者何某何歳ト記シ、手札ヲ相渡シ、証文ハ取揚置、

山中惣切数廿七口有之、十五口ハ金氣少々有之、十二口ハ未金氣無之、

出金高、万治二年金高トシテ十万兩余、元禄十一年五十貫目余、宝永元年百貫目余、同七年四十四貫程、宝曆五年山ヶ野十四貫目、鹿籠七百位出ル、

兩替、吹溜置金、京都へ差登セ小判引替、小判ハ銀子ニ引替差下ス、

金子位、吹金ニテ段々位ヲ定、八当五五部ヨリ以下位次第買入出京都、引替代銀八二三当位程相渡ル、

部銀切山ハ師堀取ニ付、兩替之節二部半之納方江口屋ヨリ持入候、諸物十部一相掛、取合一ヶ月百七八十目御藏

へ納ル、山ヨリ出テ賑ヲ金ニ成候事、城出シ鍵石ヲ唐臼ニテ細碎、

ユリ鉢ニテユリ調、川ヲ仕懸砂ヲ洗、砂金ヲ取、

金山役目 横山

山先キ山仕者之事配イタシ、詮議事等有之節ハ山先所ニテ致沙汰、役人へ取次、御扶持米二十一石余

山廻切出見廻山ニ引渡、山堀様子又者山付見分口事等致取扱シ、御扶持米九石余

主所一谷一人ツ、合七人、其谷々出入触ライタシ候テ無扶持

年行司長野一人、御扶持十二石余、山ヶ野山ヨリ兼役故無扶持

一四四四

酒屋

山中ニ一軒、年中御礼銀五百目余、

山中博奕者之事、追放被仰付、

一四四五

親族

屋久島栗生村一人・永田村一人、顛娃郡村一人、マ

一四四六

本村枝村之数

薩州 本村二百五十八ヶ村、枝村七十六ヶ村、

隅州 本村二百三十ヶ村、枝村六十八ヶ村、

日州 本村百六十四ヶ村、枝村百一ヶ村、

一四四七

永野金鉱発見概略

寛永十七年庚辰三月廿三日(廿二日カ)薩州那答院永野郷砂金三五兩(石カ)

ヲ得ル者アリト云、

(内山カ)内田与右衛門ト云、宮城ノ地中砂金ノ流ル、ヲ見ル、宮

城主島津図書久通人ヲシテ是ヲ探サシム、廻ル五里、長

野山中完焼口ニ至リ、石葛蒲ノ根ニ金許多ヲ得タリ、今(矢カ)

ニ至リ此日山神ヲ祭ル、(萬カ)

同年六月廿五日老中阿部对馬守重次、国老伊勢貞昌ヲ召

シ、台命ヲ伝テ金ノ有無ヲ探ラシム、日逐テ許多ヲ得タ

リ、砂金九百八十九兩ヲ献ス、

同十九年春、台命ヲ以テ金山ヲ止ラル、又明曆二年ヨリ

大ニ金ヲ得タリ、於茲本朝初メテ金ニ乏シカラスト云、

寛永四年又免許ヲ得テ国中諸所ヲ穿チ試ム、申木野郷芹マ、万治三年カ)

ヶ野ニ発見シ、天和三年鹿籠ニ開キ、芹ヶ野ノ人ヲ移シ

テ穿ツ、

元禄十一年金銀銅山ヲ数ケ所ニ試ム(鉾山由来記参考)、

- 一四四八 (卷之四十 二九四三号文書に同じ、本文略)
- 一四四九 (卷之四十 二九四四号文書に同じ、本文略)
- 一四五〇 (卷之四十 二九四五号文書に同じ、本文略)
- 一四五一 (卷之四十 二九四六号文書に同じ、本文略)
- 一四五二 (卷之四十 二九四七号文書に同じ、本文略)
- 一四五三 (卷之四十 二九四八号文書に同じ、本文略)
- 一四五四 (卷之四十 二九四九号文書に同じ、本文略)
- 一四五五 (卷之四十 二九五〇号文書に同じ、本文略)
- 一四五六 (卷之四十 二九五一号文書に同じ、本文略)
- 一四五七 (卷之四十 二九五二号文書に同じ、本文略)
- 一四五八 (卷之四十 二九五三号文書に同じ、本文略)
- 一四五九 (卷之四十 二九五四号文書に同じ、本文略)
- 一四六〇 (卷之四十 二九五五号文書に同じ、本文略)
- 一四六一 (卷之四十 二九五六号文書に同じ、本文略)
- 一四六二 (卷之四十 二九五七号文書に同じ、本文略)
- 一四六三 (卷之四十 二九五八号文書に同じ、本文略)
- 一四六四 (卷之四十 二九五九号文書に同じ、本文略)
- 一四六五 (卷之五十五 四三七四号文書に同じ、本文略)
- 一四六六 (卷之五十五 四三七五号文書に同じ、本文略)
- 一四六七 (卷之五十五 四三七六号文書に同じ、本文略)
- 一四六八 (卷之五十五 四三七七号文書に同じ、本文略)
- 一四六九 (卷之五十五 四三七八号文書に同じ、本文略)
- 一四七〇 (卷之五十五 四三七九号文書に同じ、本文略)
- 一四七一 (卷之五十五 四三八〇号文書に同じ、本文略)
- 一四七二 (卷之五十五 四三八一号文書に同じ、本文略)
- 一四七三 (卷之五十五 四三八二号文書に同じ、本文略)
- 一四七四 (卷之五十五 四三八三号文書に同じ、本文略)
- 一四七五 (卷之五十五 四三八四号文書に同じ、本文略)
- 一四七六 (卷之四十 二九六一号文書に同じ、本文略)
- 一四七七 (卷之四十 二九六二号文書に同じ、本文略)
- 一四七八 (卷之四十 二九六三号文書に同じ、本文略)
- 一四七九 (卷之五十六 四三三九号文書に同じ、本文略)
- 一四八〇 (卷之五 二六一号文書に同じ、本文略)
- 一四八一

御礼日大廊下伺公之声高成ヲ制ス(同上)

一 御成ノ時、御先へ參、所ノ御番所見分仕候事、

一 上野増上寺・紅葉山御成ノ時、前日御番所引渡候事、

但、御引渡候テ右ノ御番所書付・繪図共ニ当番ノ御

目付中御小人ニ持セ遣事、

御番所引渡乘へ廻状ノ案文

明十七日何々所へ御參詣付御番所被仰付候間、何時彼

地へ御出可有之候、御番所引渡可申候、以上、

或ハ只今可被罷出候、

月日 御目付中

誰殿

月払之案紙

一 殿中所々御番所、御沙汰相替儀無御座候事、

一 如例月御徒目付町廻リ仕候処、侍小路町方別条無御座

候事、

一四八二 (卷之三十二 二二五五号文書に同じ、本文略)

一四八三 (令条記卷三十三 四八一号)

魚鳥献上之御触

一 献上物、領分ヨリ參ル魚鳥類、一年ニ一度程ハ数少可

被差上之、其節仲間へモ一通リハ可被遣之、献上無之

時ハ無用事、

一 イキ魚類献上無用ノ事、

但、仲間へモ無用候、

年月日同上

一四八四

御老中ニ進物ノ覚

一 鯛 鱸 石カレイ ヒラメ アマタイ モウラク 鮎

ハタシロ

此外輕物

右三件、貞享四年十二月廿六日阿部豊後守殿へ諸家留

主居名寄被仰渡、

一四八五 (卷之三十二 二二六六号文書に同じ、本文略)

一四八六 (令条記卷三十三 四八五号)

捨子并生類御触 (元禄令条集、江戸邸糺合方贖写本)

一捨子有之候ハ、早速不及届、其所之者イタワリ置、主直二

養ヒ候願カ又ハ届望之者有之候ハ、可遣候之、急度相届付二不

及候事、

一鳥類・畜類人ニ疵付候様成ハ、只今迄之通り可相届候、其

外友ヲクヒ又ハヲノレト痛煩候計ニテハ不及届申、随分

養育イタシ候ケシテ主在之候ハ、返シ可申候事、

一無主犬頃日ハ食物給サセ不申候様、相聞候、畢竟食物

給サセ候ヘトモ、其人ノ犬ノ様ニ罷成、以後迄ムツカ

シキ事比ニ存イタワリ不申ト相聞不届候、向後左様無之様ニ

可相心得候事、

一飼置候犬死候ヘハ支配方へ届候様相聞候、於無別条ハ

向後左様ノ届無用之事、

一犬計ニ不限総テ生類、人々慈悲ノ心ヲ元ト致憐候儀肝

要ノ事、

貞享四年卯四月日

一四八七 (卷之一 七五号文書に同じ、本文略)

一四八八 (令条記卷三十三 四八四号)

生類憐之御触

一生類アハレミノ儀に付、最寄前以書付被仰出候処、今度

武州高尾村・同国代高村ノ者病馬捨之テ不届ノ至リニ付、

死罪もニ可被仰付候ヘトモ、先今度ハ一命御タスケ流

罪被仰付候、向後相背者ハ急度曲事可被仰付之、御

領ハ御代官、私領ハ地頭ヨリ前方被仰出候趣、堅相

守候様入念可申付者也、

貞享四年 月日仰四 月日 匡補 記スヘシ

一四八九 (卷之一 七四号文書に同じ、本文略)

一四九〇

鳶鳥巢之御触

一在々森林或海道ノ並木或ハ屋敷廻リ、居山ニ鳶鳥巢ヲ

カケ不申様ニ繁々見廻リ、若巢ヲカケ候様ニ見ヲヨヒ

候ハ、巢ヲ破リ可申候、若遅ク見付玉子抔生置様候カ巢ヲ

破リ候者如何ニカ候間、早速取捨可申候、

一御年貢地或武士屋敷・寺社共其趣申達シ、是又巢ヲカ

ケサセ不申様ニ可仕候、

外ニ一ヶ条略、

右、従公義急度被 仰渡候儀無之候へトモ、右ノ段村々

ニテハ百姓并召仕等迄相守候様可申付、乍然鳶鳥巢取

ニコトヨセ、諸鳥巢下ニ子共取捨候儀可有之候間、其

段入念鳶鳥巢ノ外一切トテモ申間敷候、已上、

貞享五年戊辰二月廿二日

(一四九一の₂)

下馬ヨリ下乗橋迄召連人数之事

一侍六人或五人四人

一六尺四人

一草履取一人

一挾箱持二人

一雨天ノ節笠持一人

右ノ通可被相通候段、国持大名タリト云へトモ此書付

ノ外数多過マシキ者也、

一右ノ外、往還ノ時モ右ノ積ヲ以テ如此心得有へキ也、

分限アルヘシ、

万治二年九月二日 (五日カ)

一四九一(の₁)

諸大名於江戸可召連供ノ事(留守居役所覚書)

一下乗橋ヨリ内へ召連候人数積事、御定ノ通可相守事、

一 国持大名并侍従以上ノ面々、出仕ノ時召連士可為三人

事、

一 国持大名息并一万石以上ノ面々、召連士二人タルヘキ

事、

一 右、何レモ草履取一人・挾箱持一人、

但、雨天ノ時ハ笠持一人・挾箱持二人可相通事、

以下六ヶ条略、

万治二年亥九月五日

一四九二

就御移徙大名従者覚(同上)

一 国持大名并侍従以上ノ面々、出仕之時召連侍三人タル

ヘキ事、

一 国主之息并一万石以上ノ面々、出仕ノ時召連侍二人タ

ルヘキ事、

一 一万石以下三千石迄寄合右同断、

一 諸番頭・諸物頭右同断、

一 諸守衆・御小姓衆・御小納戸衆・表御小姓衆、召連侍(御カ)

二人タルヘキ事、

一 中奥三千石以下之寄合役人并総テ御番衆、侍一人ツ、

タルヘキ事、

一 奥医師并当番之医師、召連侍(二人カ)一人、

但、雨天之節ハ笠物一人・簀箱持一人可相通事、

一 紀伊殿・水戸殿・尾張殿・(左馬頭殿カ)馬殿家来ノ面々、召連侍

一人・草履取忝人・挟箱持一人ツ、タルヘシ、其外諸

大名之家来、侍一人・草履取一人計可通之事、

一四九三(の1)

奥坊主衆条目(同上)

一 五節句・朔日・十五日・廿八日諸大名出仕ノ砌、大広

間次ノ間御座席ニ台子ヲカケ御茶可有之、勿論御座(外之脱カ)

敷ヘ御茶持ハコヒ申問敷事、

付、諸大名出仕之節、御勝手ヨリ差図ナク御茶持ハ

コフヘカラス、并御茶道頭台子有之処ヘ見廻、諸事

入念候様可申付事、

一 子細ナクシテ諸大名不可参、若無扱儀於有之ハ其趣ヲ(脱カ)

頭中ヘ申断、可伺差図事、外十五条略、

右之条々、可相守此旨者也、

万治二年九月五日

(一四九三の2)

同御広間坊主衆御条目

六ヶ条略ス、

一 大名衆出仕ノ節、取持大勢罷出間敷事、

但、御玄喚進物取次ノ外、一切罷出ヘカラサル事、

右、可相守此旨也、

万治二年九月五日

一四九四

御供番役(同上)

一 御城廻リ御鷹野之時ハ羽織ニテ罷出候事、

一 御鷹野ノ時、御拳ノ度々御本丸ヘ御注進申案文

公方様、弥御機嫌能被為成御座、於何之所御拳ニテ、

ハイ雁ヘ被為合候、此旨御老中ヘ可被仰達候、以上、

月日

当番御目付中

但、夜入候へハ御注進不仕候、

一四九五

御代替誓詞(同上)

起請文前書ノ事

一 今度就御代替^(奉脱カ)弥重公義御為第一奉存候、御後闇儀不仕

段前々被仰付候趣堅相守、御奉公油断仕間敷事、

一 御一門ヲ始諸大名^(傍カ)諸輩、奉对御上以惡意申合、一味

^(仕間敷候事カ)
以下欠損、

一 御尋ノ儀、縦親子兄弟知音之好身又ハ中惡敷輩ニテ有

之トモ、鼻肩偏頗ナク有様ニテ可致言上候、勿論御隱

密ノ上密々ノ趣、毛頭他言仕間敷候、総テ殿中ノ取沙

汰御老中差図ナク諸方へ申遣間敷事、

一 万事御法度違背ノ族、心ニ及候処見出聞出候様、随分

入精心ヲ付可申候、勿論見ノカシ聞ノカシ候儀ハ在御

座間敷候、聊以用捨ノ儀^(ル脱カ)アマシク候、御法度ノ趣ヲ自

分違背仕間敷事、

一 御目付ノ權威对諸^(傍カ)輩私之奢仕間敷事、

一 諸事不行儀ナル族於有之ハ其人へ申断、若手引候ハ、

可致言上候、

但、事ニヨリ老中迄モ可申候、万一雖為老中其儀申

断、是又老中迄可申達候事、

一 万事相談ノ時不殘心底申出、多分ニ付相極可申候、狼^(狼)

ノ儀ヲ隱候テ何角ト沙汰仕間敷事、

一 奉对御為同役ノ面々ト中惡敷仕間敷事、

一 親類并近縁、右ノ外訴訟仕候儀取次仕間敷事、

一 於殿中^(空百)事者可取次書付、御使被遣候時分モ右ノ段相

守油断仕間敷、

右ノ通、於評定所誓詞仕候、

延宝八年七月十八日

諸大名衆誓詞前書

一 奉对御番家御奉公之儀、今以疎略仕間シキ事、

一 仮令如何様ノ儀御座候共、無表裏別心一篇ニ御奉公可

申上候事、

一 雖為親子兄弟知音之好、对公義聊惡心者御座候共、同

心不仕偏可奉励忠節事、

右ノ条々、雖為一事於違背者、神文略ス、

一四九六 (令条記卷二十三 二七五号)

辻札

条々

一堤ト河端ノ間ニ牛馬ヲ放ツヘカラサル事、

一道ノ外ミタリニ通ヘカラサル事、

一植木・サシ木ニサワルマシキ事、

右条々、相背族ニヲヒテハ可為曲事者也、

慶長十二年三月十九日

一四九七 (卷之三十五 二四三三号文書に同じ、本文略)

一四九八

鹿兒島城中御座間画図之説 (市来次右衛門政(空白)記ス)

御対面御床(所脱カ)

堂上端座被成候者帝堯ニテ候、階下四人之列立ハ稷・契・
皐陶・伯益ニテ候、其南二年若キ人橋ヲ渡リ進見之体ニ
相見得候ハ虞舜三十歳ノ御時登庸之図ニテ候、後堂之内

二二婦人並居ノ図ハ堯之二女娥皇・女英ニテ候、
同所北頰之御襖

堂上ニ袞冕十二章之盛服ハ虞舜受禪之後、五弦之琴ヲ彈
シ、五風十雨天平キ地成ルト申太平ノ時ヲ被写候、階下
ニ五人列立有之ハ大禹・稷・契・皐陶・伯益ニテ候、舜
有臣五人而天下治トモウス、論語本文ニ符合イタシ候、

同所北頰之御襖

周文王出御之図、鳳輦上白髮之帝王、即文王ニテ候、

御中段

右上頰之御襖

太公望磻溪之釣之場ヲ写シ、垣石上ニ座釣之人、則太公
望ニテ候、南之方鸞輿降釣台ニ歩ミ寄ルハ直ニ周武王ニ
テ候、侍從之諸臣ハ周公旦・召公奭・畢公・榮公・太顛・
閔天・散宜生・南宮括ニテ候、

右北頰之御襖

諸葛武侯茅廬烈皇帝三顧、関・張趨陪之図ニテ候、

右東頰之御襖

輪扁輪ヲ斲リ、奚仲車ヲ造リ、貨狄舟ヲ作ル体ニテ候、
貴人之堂ヲ降り、工者ニ立問之体ハ齊桓公ニテ候、

此所ハ、「但、孝行之間ニ二十四孝之名前ハ、御見合有之候可除

ヘハ直ニ相知可申候ニ付、態ト略筆仕候、君(敬禮カ)微漢」按

ニ、御上段ニ堯舜文武孝行之間、御床ニ漢文帝之御母

公薄太后ニ孝養ヲ尽シ玉フ体ヲ始トシ、其余無殘書尽

サレ、偕又御中段ニ周武王・太公望、昭烈帝之三顧ヲ

写シ、下之一面ニ貨狄・奚仲等舟車ヲ作ル体ヲ写サレ、

イツレモ古今ニ又ナキ聖賢碩德之遺像ニテ、景仰ノ美

觀光ノ実、都テ殘所無御座候、且舟車ヲ作ル体ヲウツ

サレタル意味ハ、古聖賢種々ノ苦心ヲ以テ舟車ヲツク

リ、不通ヲ濟シ生民之務ヲ開キ玉ヒシ大切ヲ末ノ世ニ

迄伝ヘ示ル、心ニテ候、

此所ハ、「舟ヲ造初シ事ハ、易經ニ、剡木為舟、剡木為楫、可除

舟楫之利以濟不通ト相見得候処ハ舟ノ事文字上ニミヘ

シ始ナリ、初テ舟ヲ作りシ人ノ名ハ、世本ノ内ニ黄帝

臣共鼓・貨狄剡木為舟トモ見得、呂氏春秋ニ虞姁作舟

トモ有之、山海ニハ、淫梁生番禺、是為舟ト有之、物

理論ニハ、貨狄作舟ト云、晋束皙モフシ著シタル發蒙

記之說ニ伯益作舟ト相見得、如此異說区々ニテ候ヘハ、

此人コソ第一番發起シ人ト申事タシカナラス、イカ様

舟ニモ艤撞アリ、舳舻アリ、餘艤アリ、其外航舩艤

龍艦艦艦ノ類一々枚拳スルニ暇アラス、名異ナレハ形

勢モ亦不同、然レハ右形製一人ノ手ニ出ルニ非サルコ

ト勿論ナレハ、前ノ諸引書ノ内ニ作舟トアル人ノ数多

キモ、此等ノ色々ノ形(製カ)□ヲ工夫シテ或漫流ヲ楫ス舟ア

リ、或洪波ヲ衝ク舟アリ、或逆瀾ヲ破ル舟アリ、或ハ

渴齊ヲ凌ク舟アリ、或八月ニ吟シ花ニ浮ヒ、千派万別

様々ノ舟ト成リタルナレハ、舟作りシ人ノ数多キモ受

カタキ事ニハアラス、増シテ貴國ハ、西ハ唐土ニ渡リ、

東ハ日本ニ楫シ、三国通融ノ樂邦タル事、偏ニ此等ノ

(八カ)大ノ功德ニテ、仮初ニモ忘レタモフマシキ事也、」

掛縁御杉戸

右御杉戸ノ画モ位置名状一ニ深意有之事ニ候、御上段北

頬之一角赤尾白身岐蹄ノ獸ハ獬豸ニテ候、一名神羊ニテ、

正人ヲ扶テ邪人ヲ殺ス靈獸、後世法官獬豸冠ヲ服スルモ

此由ナリ、

東頬御杉戸

白身虎文ノ獸ハ(脚カ)□虞ニテ候、名譽ノ仁獸ニテ、形貌ハ殊

ノ外恐シク候ヘトモ、不履生草、食自死ノ肉トテ、生草

ハ必スヨケテ通り、自ラ死シタル獸ノ肉ナラテハ生ル虫
蠅トテモ殺生スルコトナケレトモ、虎豹ヲ見テハ必殺ス、
此害人ノ惡獸ナル故也、如此靈獸ナレハ聖人在位徳及草
木、則此獸必見ルト申伝候、右両御杉戸ノ義ハ御上段・
御中段イツレモ聖賢之御像故ニ、他ノ凡獸ヲ画カタキ道
理ニ御座候付、右ノ二獸ヲ写シ被申タルニテ候、獬豸御
杉戸ノ裏ハ鸞鷲ノ二神鳥ニテ候、鸞モ鷲ノ同種ニテ鳳凰
ノ伯仲ノ鳥ニ御座候、

敷舞台御杉戸

右驕虞御杉戸ノ裏ニテ仙禽飲啄鼓翼ノ図、北頬ノ御杉戸
ハ白象ニテ候、御中段ニ驕虞・獬豸、禽ニハ青鸞・紫鸞
ト相濟ニ付、少シ降りテ敷舞台故ニ仙鶴・白象ヲ写シ、
且又高欄ヨリ差シ口ノ御座格別威猛ヲ示サルヘキ事肝要
ニ候故、虎ノ間トテ一通色ニ虎豹ノ猛獸ヲ写サレ候、

虎ノ間東西御杉戸

東方ノ御杉戸ハ白沢獸ニテ候、東望山ト申山中ノ水辺ニ
住ム毛モノニテ、人ノ言語ヲ能シ、王者有徳明照幽遠則
至ルト見得、昔黄帝巡狩ノ御時、東海ニテ此獸ニ逢ヒ玉
ヒシト承伝候、偕此獸ヲ此処ニ写サレ、西方御杉戸ニ蘇

鉄ヲ写サレタル故ハ両御杉戸共ニ火災御除キノ禱禳ニテ
候、白沢ハ沢獸トテ水ニタヨル故ニ右御杉戸ノ一面ニハ

大波ヲ写シタルニテ候、沢獸故ニ火除ニ相成候、蘇鉄一
名ハ鳳凰尾蕉トテ、葉ノ形鳳凰ノ尻尾ニ能モ似寄候故名

(鳳凰尾蕉カ)

付候、一名ハ番蕉、此木中国ニ無之、遠国ヨリ貢キ来リ

シ故ニ番ノ字ヲ用ユ、蕃国ノ芭蕉ト申事ニテ候、蕃椒・

蕃薯・蕃劍・蕃鷄ノ類ニテ候、此木水精故ニ能ク辟(火脱カ)ト承

伝候、枯レントスルトキ鉄ノ屑ヲ根ニツチカヒ、又鉄針

ヲ打込時ハ必再ヒ盛茂ス、夫故ニ鉄ニ蘇ルト申心ニテ蘇

鉄ト名付タルニテ候、此事ニ付テ此木ノ水精明白ニテ候、

五行相生ノ道理ナレハ金生水ノ処ヨリ鉄ヲ用テ蘇ルニテ

候、金ヨリ水精ノ木ヲ蘇ラスコト更ニ別儀ナキ事ニ候、

右之通東御杉戸ニ水辺之異獸ヲ写シ、西ニハ水精ノ嘉木

ヲ写シ給フ事、皆共ニ此御殿中無残火難ナキ様ニトノ御

事ニテ候、御樓門上ノ鱸魚ト同シ心ニテ候、

獅子間・波之間

御書院ノ通口ニ獅子ヲウツシ、象ノ間ヨリ奥ヘノ通口ニ
鳴渡シ荒波ヲ被写タル事、中ニモ深キ意味有事ト承伝候、
御書院ノ取付ニ獅子有ハ高欄口ノ取付ニ虎豹有ル心ニテ

候、此獅子ヲ此間ニ居ラシ置事、不正ノ人ヲ制禁シ玉フ御心ニテ候、サテ波ノ廊下ハモフスモ恐レナカラ、禁中荒波ノ御障子ノ御心ニヤ、須磨明石之灘々ヨリ東へ渡ル村、千鳥幾千万ト云数知レス打ムレテ鳴渡ニ至レ半、数千羽ノ内ヨリ只一羽二羽ナラテハ渡リ得ル千鳥ノナキト申心ヲウツサレテ、鳴子口マテハ誰ニ限ラス相通ル場所ナレトモ、夫ヨリ先キハ数千人之内ヨリ器量材芸勝レタル人ハカリ許サレタル事、偏ニ鳴渡ヲ渡ル千鳥ニナソラへ給ヒシ御事ニテ候、

梅之間・水仙之間

梅ト水仙トハ、自余ノ草花トハ天地懸隔セシ事ハ皆人ノ知リタル事ニテ、其余ノ草木ハ春夏ノ間ハ若芽ノメテタク萌へ出シモ、木カラシ・雲之比ニモナレハ、イツトナク若々^(ヤカ)カナリシ木ノ葉モ黄ハミ落タル冬枯ノ梢ニ引カラテ、雪霜ノ中ヨリ花ヲ開キ香ヲ飛シタル体ヲウツサレテ、人モ此通りイカナル風ニモ少シモタワマヌ、ヒトツノ操立サレハカノ草木ニモ劣ル故、兼テカヨウノ司ヲ戒メ玉フ御心ニテ候、

鶴之間・椿之間

鶴ハ雲井ニ飛カフ仙鳥ニテ、此処ハ御座マシマス所ニ近ケレハ、雲井モイト、近キ心ニテ鶴ヲ写サレタルニテ候、椿ハ八千歳為春、又八千歳ヲ為秋トテ、並ヒナキ神仙之靈木ニテ人間ニ有ルヘキ物ナラネハ、此所木ハ雲井モ近ク凡夫ノ往通フヘキ地ニ非ストテ、此靈椿ノミノ花ノ咲キミチタル体ヲ写サセ給フ御心ニテ候、
斯文ハ造士館助教兼御記録奉行市来次右衛門政^(空白)カ齊興公ニ奉リタル者ナリト云、

一四九九

孟宗竹舶来ノ説(二ノ丸膳写方)

薩州へ孟宗竹ノ初リ候ハ、享保ノ比琉球国在番奉行野村^(良島)勤兵衛殿彼国帰帆被致候節被持越、珍ラ敷物候由ニテ磯御屋敷御隠居様(吉貴公)へ進上被仕、其時分ハ鉢植ニテ、御当地ニヲヒテ磯御屋敷ニテ竹ノ廻リ七八寸ニ罷成リ、又四五寸ノ比竹ノ子生ス、孟宗竹・楊柳・唐キン竹・京竹唐進上被致候テ、此時分初リ候ヨシ、(同時ノ遺種鹿兒島滑川琉球館ニアリ)

鑄錢御目論見ニ就テ加治木郷由来調査

加治木ハ往古後漢之靈皇之子孫播州大倉谷ニ居住シテ後大隅之國主タリ、其子孫之人ニ大倉之太夫良長之後家(未亡人ノ通唱)ヲ加治木肥喜山(日本山之)後家ト言、此後家之古地ト云テ、日木山之山王宮之前ニ有リ、其頃於禁中ニ大織冠鎌足・小野宮之関白・公達・禁中女御之争ヒアリ、後一条之院之御宇寛弘三年之比国々ニ配流セラレ、其中ニ藤原経平卿ハ大隅国ニ配流セラレ、此時肥喜山後家(傳説之)方檢非違所ヨリ惣官掛タリ、依之肥喜山後家経平卿ヲ警固ス、其後経平卿肥喜山後家ト夫婦ト成テ一子ヲ生ス、是藤原ノ太夫経頼二十代之連続ナリ、松尾城之下ニ委ク記ス、

往古加治木一万斛ハ太閤秀吉公薩州御下向之後、文禄四年御竿入(文禄二三年間)太閤之御藏入、加治木一万斛之御目録大隅国始羅郡之内加治木

高式千三百五拾五石九斗六升八合
高式千五拾九石一斗六升五合

木田村
高井田村

高六百六拾八石四斗式升五合

西別府村

高式百三拾三石四斗五升八合

日木山村

高千三百七拾三石六斗四升七合

反土村

高九百拾壹石七斗式升四合

小山田村

高七百拾石九斗六升七合

佳例川村

高千六百拾七石式斗四升

竹子村

高千三百拾五石壹斗壹升九合

溝辺村

高千九百拾四石四斗七升

崎守村

合高壹万斛

御代官(三處)
石田治部少輔

右壹万石之御高、義弘公 忠恒公高麗ニ御渡海被成、於彼地御軍忠、為御感状御高五万石御頂戴被成、此五万石之内一万石御拝領相成、其後元和二年又八郎様御守護代御上(上洛力)路御成、義弘公加治木御隠居御跡目御給依之加治木壹万石、寛永八年 黄門様ヨリ又八郎様へ武州江戸ヨリ御拝領也、

寛永九年壬申十月加治木士十六人・御道具衆三十人、黄門様ヨリ又八郎様へ持留之知行ニテ被召付候故、加

治木給地高（士族祿高ノ通語）相究、同十年酉十月又
士七拾八人被召付候、此時西衆中・東衆中相分ル、同
十一年東衆中皆同被召付候ニ付、此時加治木給地高相
増、同年之春ヨリ御支配有之、

高千七百拾壹石九斗七升壹合八勺七才

高五百四拾六石九斗七升九合壹勺七才

高千八百石三斗七升四合壹勺八才

高七百九拾六石七斗六升五合六勺二才

高八百拾三石八斗八升壹勺五才

高七百九拾八石式斗六升九合六勺

高七百六拾石 加治木衆中給地

高五百石 加治木衆中給地

高八百拾六石 加治木衆中給地

外二千六百石御領并鹿兒島衆中給地

高三拾七石九斗三升七合五勺

高六百七拾石四斗式升式勺壹才

高七百六拾三石五斗壹升壹合三勺九才

高三百五拾式石七斗

高三百拾式石八斗四升九合五勺八才

高八百六拾壹石八斗式升七合七勺

高八百八拾五石四斗八升式合三勺

高九百拾壹石三升三合五勺

内、五百四拾五石式斗式升八合五勺

加治木
反土村 西衆中持

高三百拾九石九斗八合壹勺 加治木衆中持

同 日本山村 財部内

高六百八拾四石三斗七升九合三勺四才

同 小山田村 北俣村
同 西別府村 栗下村
同 竹子村 東永井浦村
同 小浜村 栗野内
同 溝辺村 恒次村
同 有川村 東衆中持
同 木田村 西衆中持

高七百七拾壹石七斗七升八合三才

内、三百七拾九石五斗 東衆中持

三百九拾石三斗四升四合三勺六才 西衆中持

式石式斗七升六合八勺 肝煎

高五百六拾石壹斗六升四合三勺七才

曾於郡内
持留村 加治木内
宮内之 高井田村
内山田村 木田村
羽月内 帖佐内
羽月内 辺川村

内、四百四石四升九合 東衆中持

百五拾五石五斗六合 西衆中持

六斗九合三勺七才 肝煎屋敷

高三百七拾六石 加治木衆中持 野久見田村

高六百七拾石 加治木衆中持 内山田村

高百五拾七石 加治木衆中持 見次村

高百四拾五石 加治木衆中持 松之木村

高三拾七石 加治木衆中持 曾於郡

高百六拾八石 加治木衆中持 山路村

高六百七拾六石 加治木衆中持 栗野

寬永十一年加治木御私高壹万石御竿入帳式拾冊 米永村

三月十九日

御支配所

高崎伊豆守 印

山田民部少輔 印

新納加賀守 印

右高之内、三拾石四斗式升八合余り再檢増昌日二成増、

承応十年二月郡奉行川南次郎右衛門殿之入竿増表有之

二付、持留之高二可相加之旨、御家老衆任御引付書裁

令支配者也、

明曆三年酉七月十七日 御支配所

岩切嘉右衛門 印

有馬勘右衛門 印

新納縫殿 印

右高之内、何石明曆四年蒲生新十郎殿・猿渡少左衛門

殿竿入増高有之付、本高二相加御給之旨、御家老衆任

御引付書裁令支配者也、

万治二年亥三月六日 平田五右衛門 印

有馬勘左衛門 印

喜入吉兵衛 印

一五〇二

当分加治木(島津兵庫所領)御領分之御高諸所

高千四百拾九石四斗七升五合八勺四才 溝辺 竹子村

高八拾六石四斗四升三合壹勺六才 溝辺内 有川村

高五拾八石八斗六升壹合四才 溝辺内 崎守村

高貳石八斗八合三勺四才 溝辺内 三繩村

高六百四拾貳石貳斗七升九合八勺六才 大崎内 井俣村

高千六拾六石三斗四升四合壹勺六才 大崎内 野方村

高四拾三石五斗四升八合九勺六才 大崎内 万膳村

高壹石三斗貳升七合九才 大崎内 中津川村

高百貳拾七石六斗三升七合七勺四才 大崎内 宿窪田村

高五百六拾九石六斗六升式合四勺六才

躡内 持松村

高千四百六石七斗式升壹合九勺三才

大口内 小木原村

高五百七石三斗八升七合七勺四才

羽月内 下殿村

高六百貳拾七石貳斗八升九合壹勺六才

羽月内 宮人村

高千三百五拾八石六斗四升六合八才

本城内 荒田村

高千九拾四石四斗三升九合六勺貳才

高城内 前目村

高貳百五拾七石壹斗六升七合五勺

財部内 北俣村

高壹斗貳升七合四勺

山野内 山野村

高三石壹斗八升六合壹勺貳才

馬越内 田中村

高三拾石

伊集院内 桑畑村

高拾三石三斗四升六勺貳才

鹿兒島内 上伊敷村

高八石三斗八升五合四勺貳才

帖佐内 西餅田村

高拾四石七斗九升九合八勺四才

帖佐内 中津野村

高拾八石六斗貳升八合壹勺貳才

山田内 山田村

高壹石三斗三升六合四勺六才

山田内 北山村

高三拾九石壹斗貳升式合六勺六才

日当山内 嘉例川村

高九石三升式合式勺九才

国分内 野久見田村

高貳拾石壹斗貳升六合四才

曾木内 永野村

加治木諸士之諸屋敷先帳三拾九町四段貳拾三步

右屋敷何百ヶ所必分限無足高屋敷多少、五畦限ニシテ不足分相足賦付候間、一ヶ所衆之儀、於向後人役等之御奉公可被相勤者也、

寛永十一年三月廿一日 御支配所判

(加賀守之) 新納伊賀守 印

高崎伊豆守 印

山田民部少輔 印

右加治木東衆中居屋敷之内、高百八拾石貳斗貳升九合貳才之御返地、今度被成差上御給候ニ付、鹿兒島御小者衆・御道具衆・御中間衆屋敷相改除我々取候、申候、此屋敷帳別紙相調渡申候条、後日御用ニ罷立間敷候、以上、

比志島与助 印

諏訪甚左衛門 印

式町九段九畦貳拾貳步、卷人ニ付五畦宛ニシテ、御道具衆六十人、高ニシテ貳拾六石六斗五升八合三勺三才、三段五畦、御小者衆六人、五畦宛ニシテ、高ニシテ貳石七斗八升八合五勺四才、六段四畦貳十貳步、御中間衆十三人、五畦宛、高ニシテ石七斗六升六合、九畦

式拾五歩、出米兩御藏地、高ニシテ八斗五升六合式勺四才、

合高三拾六石壹斗三升式合式勺八才

内、九石式升八勺三才

反土村

式拾七石式斗壹升四勺壹才

木田村

右者從兵庫頭殿返地御上被成候付、鹿兒島へ被差出屋

敷帳之留也、銘々割付候帳御道具衆へ御小者衆へ一札、

御中間衆へ一札書調渡候、鹿兒島へハ帳一札ニシテ上

候、桑畑休左衛門・長谷場伝左衛門・藥丸才右衛門・

折田勘左衛門印、其後六十ヶ所被召立御公領也、岩原

之所ニ記ス、

屋敷三町七反式畦式拾壹歩、大豆百四俵式斗八升三合

六勺四才、高ニシテ三拾八石式斗壹升式合壹勺式才、

諸士屋敷田成ニ付高相増、

寛永廿年未四月十六日

奉行

江川弥左衛門殿

右同

原田新兵衛殿

筆者

坂本孫右衛門殿

右同

木藤与右衛門殿

薛見 脇田織部正殿
御道具衆筆取
山口源右衛門

一五〇三

鑄錢御目論見ニ就古金銀錢價格ノ概略

慶長銀百貫目付代銀式百拾四貫六拾五匁三分ニ而候処、

卯年銀ニ双替相増候ニ付、以來式百五拾八貫五百五匁三

分之積仕来候通、六拾目替ヲ以金ニ而四千三百八兩壹分、

永百七拾壹文六分六厘六毛之割合ヲ以罷差出候、從公

儀被仰渡、三月十四日御家老座御通達、

大目付江

張紙

銀式百五拾八貫五百五匁三分

六拾目替ニ而、割ハ永銀四千三百八貫四百式拾壹文六

分六厘六毛ニ成ル、永壹貫文ハ金壹兩故、此金四千三

百八兩ト四百式拾壹文六分六厘六毛、

永壹貫文ヲ四ニ割、式百五拾文ニ成ル、是則金壹分也、

右ニ四百式拾壹文余、内式百五拾文ヲ引、金ニ直上

候得者金四千三百八兩壹分ト永百七拾壹文六分六厘六

毛ト成ル也、

右ヲ現銀ニ而相渡時ハ永百七拾壹文余ハ、六拾日ヲ掛
戻シ、銀札拾匁三分ト成候テ相渡賦ニテ有之候、(文
久二年壬戌八月琉球通宝鑄造許可ノ条参考看)

一五〇四

琉球国在留外国人処分ニ就キ調査

外蕃通略(叙力)鈔

人臣無外交古之道也、自武臣擅国、古道漸廢、如足利義
滿者、至国王自処称臣外域、人臣之悖至是極矣、德川氏
既代豊臣宰割天下、凡百制度多步趨足利、然足利之罪人
能言之、德川之非孰敢議之、固有待于隱居放言之士也、
吾頃説外蕃通書、得具見德川氏交通外国文書、蓋有蹙然
不安者、顧其為書幕吏所著、明知其非而不能極議者勢也、
吾故披其略、書以王法、垂鑑万世、噫我亦人也、有氣血
有性命、非不顧身惜家、放言何其所樂為、然当今四海之
勢、交通往来將無分乎華夷内外、而吾大八洲之御宇天皇
久矣、假使征夷国主自処、則内固有嫌僭踰、外亦有過卑
屈、並非吾国之体也、近者征夷賜魯西亞・米利幹諸書、
若少有慮于此者而未也、当今四海率用漢文与皇国無異、

則昔之侏離缺舌、今則彬々同文矣、於是私立各名曰、某
帝国也、某王国也、某公爵也、某侯爵也、夫侏離缺舌之
無礼不足深咎焉耳、一旦四海有指斥御宇天皇之大八洲為
国王日本者征夷府何以答天下、何以謝天朝、天下之士大
夫亦何以自処、(及脫力)起念于此、隱居放言之誠不可已也、吾寧
暇顧惜身家哉、安政四年丁巳三月上巳日力病書此、二十
一回猛士、

外蕃通略

慶長十二年正月朝鮮国主李昭始奉書于征夷府為和好之驗、
五月大將軍源秀忠賜復書、

書式 奉書云、朝鮮国王李某奉書日本国王殿下、年用
明号、賜書云、日本国源某奉復朝鮮国王殿下、未署龍
集干支、後元和三年・寛永元年並用此式、

謹案、朝鮮称征夷府為日本国王、国王非天朝所命、
德川氏又未嘗受封于異域、而彼妄称之者以足利氏旧
例乎、則不足深責、独怪、當時不諭而改之也、賜書
單標干支而不揭天朝年号、吾不知其何謂、朝鮮原服
属天朝、今与德川氏用敵国札者蓋以上有天朝耳、然
徒称日本国王、則其義不著、往復若明掲征夷府官位、

則名正而義著矣、惜夫議者未及是也、

元和三年五月朝鮮國主李璉遣三使、奉書于征夷府、以嗣

好音、九月大將軍源秀忠賜復書、於是使聘如通、(始力)

寬永元年八月朝鮮國主李倬遣三使、奉書于征夷府、賀襲

職、十二月大將軍源家光賜復書、

謹按、賜書云、余幸統領日域、是不令外國知有天朝

也、宜改稱有詔襲先職、乃可、朝鮮非敬事明清者、

而動稱天朝以資誇揚、今征夷府竭忠於天朝、豈朝鮮

於明清之可北也哉、(比力)而示外國不敢稱天朝、特為不

可解、後家綱賜書云、慶我繼述治國、綱吉賜書云、

慶我繼前業、家重賜書云、誕保前緒、家治賜書云、

承紹前緒、其失並同、

寬永十三年八月朝鮮國主李倬復遣使、奉書于征夷府、賀

襲職、十二月大將軍源家光賜復書、先是宗義成臣柳川調

興偽造書印加日本國下以王字、至是事覺流調興、是以再

賀、足利氏旧例、使浮屠草書、是時林道春始預事、

書式 奉書改為奉書日本國大君殿下、賜書始書年号、

余如旧、後二十年及明曆元、天和二年並同、正德元年

奉書復稱國王、享保四年以後並稱大君、

寬永二十年二月初朝鮮國主李倬遣使、奉書于征夷府、賀世

子降誕世子竹千代、且捧國主祭文、祀日光山、八月大將軍

源家光賜復書、

明曆元年四月初朝鮮國主李湊遣三使、奉書于征夷府、賀襲

職、且祀日光山、十月大將軍源家綱賜復書、

書式 是時朝鮮已降清、奉書不復用明年号、唯稱干支

年、

天和二年五月初朝鮮國主李焯遣使、奉書于征夷府、賀襲職、

九月大將軍源綱吉賜復書、

正德元年五月初朝鮮國主李焯遣使、奉書于征夷府、賀襲職、

十一月大將軍源家宣賜復書、

書式 賜書稱日本國王源某、新井瑛筆也、

謹按、稱日本國王者出新井之愼勿論而可、然前後書

式單稱日本國奉書、稱日本國大君、並未見其甚當、

況前後改稱、往復二名、寧不為外蕃之咲哉、吾故惜

其不明揭征夷府官位也、

享保四年四月初朝鮮國主李焯遣三使、奉書于征夷府、賀襲

職、十月大將軍源吉宗賜復書、

書式 賜書復為日本國源某、(信光力)林信道筆也、爾後不復改、

延享四年十一月朝鮮国王李吟遣使、奉書于征夷府、賀襲職、明年六月大將軍源家重賜復書、

寶曆十三年八月朝鮮国王李吟遣使、奉書于征夷府、賀襲職、明年三月大將軍源家治賜復書、

右朝鮮國

謹按、德川氏之於諸蕃、率因互市通書信耳、則吾如(姑)

置不論焉、独朝鮮遣使通聘、事体頗重、而其來為德

川氏賀襲職、而未嘗為天朝賀登極、且德川氏亦未以

是請天朝而奉勅旨、人臣外交之罪、德川氏其向以辞(何力)

之哉、

慶長十三年阿蘭陀国主某奉書于征夷府、明年七月前大將

軍源家康賜復書、且賜朱印于船主云、阿蘭陀国船到日本、

不問何浦愛護無他、初五年蛮船一隻到和泉堺浦請互市有(教力)

数引見江戸、船過相模浦賀毀焉、不能還国、船人阿蘭陀

耶楊子、漢人利亞安子留江戸、賜祿米居宅、家康時或召(漢久利亞安字力)

見、問以異国事、至是互市始通、船人皆返、独耶楊子慕

化不去、

書式 奉書不載、後例皆呈老中書、而非直奉大將軍也、

是亦或然、賜書云、日本国主源某復章阿蘭陀主殿下、

末署年号、

謹按、世皆謂、德川氏以瑣國為定制、大謬矣、初魏

田信長当国時、波尔杜瓦尔国始來開市、已而稍弘邪

教、至豊臣秀吉峻絶而嚴禁之、而余類未断、阿蘭陀

之來、稔察其情、首讒波尔杜瓦尔以謀私市利、征夷

府亦嘉阿蘭陀恭順、聽納其言、元祿中阿蘭陀檢夫兒(ケンブエ)

觀江戸、著書極稱鎖國之美、実為其国遊說也、至文

化征夷府賜魯西亜書全用其意、於是世皆謂、鎖国德

川氏之定制也、誠其然、家康時何待諸蕃之広也、

慶長十五年十一月阿蘭陀国主某呈書于征夷府老中本多正

純、是時前將軍源家康召見船使于駿府城、

慶長十七年二月阿蘭陀国主名代某呈書于征夷府老中本多

正純、五月正純与復書、十月前大將軍源家康亦賜書報之、

謹按、阿蘭陀書呈老中、実奉征夷府也、故前大將軍

亦賜書報之、

元和三年八月大將軍源秀忠賜朱印于阿蘭陀船主、如慶長

十四年之例、

寬永四年九月阿蘭陀国奉書于征夷府、老中以其無礼黜之、

寬永九年九月阿蘭陀国呈書于征夷府老中土井利勝、不載

復書、

延寶三年五月阿蘭陀頭目某呈書于長崎奉行、亦不載復書、安永八年咬囉吧頭目呈書二通于長崎奉行、並亦不載復書、

右阿蘭陀國

謹按、源家康國主自居、私交外國、其罪固夥、然當時府中老臣儒士、皆莫不逢迎其惡、是不可得罪家康也、況家康威(權力)振百蠻、德馴異類、克任征夷之職、其有功于天朝、顧不亦大乎、抑阿蘭陀通市、至今不絕、使彼有追想家康時、亦可以感世愛已、

慶長十五年七月前大將軍源家康賜明國広東府商船以朱印云、広東府商船到日本、不問何國何島何浦、許市易買賣、十二月賜其応天府商船周性如以朱印云、性如商船到日本、不問何浦何津、応護達長崎、

十二月征夷府老中本多正純、奉前大將軍源家康教、与書明國福建府総督某求勘定(合力)之符、長崎奉行長谷川広智亦与書、並不報、

書式 正純書云、日本國臣本多上野介藤原正純奉旨呈書福建道総督軍務都察御史所、未署歲舍干支、書中指彼國為中華、又有日本國主源某之語、広智書云、日本

國長崎市舶使司長谷川左兵衛藤広(約藤原、広智也)、謹致書福建

道総督陳御史台下、書中指彼國為貴國、又称吾國主源君、未不署年号干支、蓋闕文耳、

謹按、二書書式固不足道、然広智猶有稍勝于正純者矣、漢土人贈外國文書、每々書其地名不冠其國号、是自彼土陋習、徒知有(己力)巴國而不知世界有万国故耳、勿做可也、吾謂、外國人到吾國、及吾國示敵國文書、單書地名可也、吾國人到外國、及吾國示敵國文書、地名冠國号可也、今明敵國也、故書称日本國長崎当矣、

又按、吾誑正純・広智書、意在襲尼利故事、復勘合符則彼之不報、顧吾之幸也、不然家康与義滿亦何挾焉、

慶長十六年十一月前大將軍源家康賜明國商船(朱力)以來印、文佚、蓋如賜其広東・応天例、

元和五年六月明國浙直総兵官王某奉書于征夷府、請靖盜安辺以杜商患、其使人單鳳翔等五十人、上京欲必得復書、明年六月長崎奉行長谷川広智時在京師、以其書無礼奉府教、召鳳翔等于所司代所、論而却之、

書式 奉書云、將軍樣麾下、末署大明万曆某年、

正保三年八月明国主某上書請援兵、某平虜侯鄭芝竜奉書于征夷府及長崎奉行重言其意、且求送還其妻孥、十月事聞于江戶、未及復答、明兵敗国主某奔、援兵之議遂輟、

十二月明国總兵官崔芝上書請援兵、明年正月征夷府使長崎奉行答曰、明国勘合絕已百年、無復通信之義、今所請不可輒議也、

書式 上書云、大明国某官臣崔某泣血稽顙奏、又云、

特修奏楮、馳諸殿下、結云、謹具奏聞、尾署其年号、

謹按、崔芝一總兵官、(計カ)不許身分乃敢上書天朝、且其

辭有無礼者、是以征夷直自当之、又從而拒之、似矣、

然明国之存亡實係此一举、事雖不関于吾国、明人之

心亦可悲已、

万治元年明国招討大將軍朱成功奉書于征夷府、以締旧好、

七月書達于江戶府、不賜復書、

書式 奉書云、某官某頓首拜啓上日国上將軍麾下、

右明国

慶長六年五月安南国都元帥某奉書于征夷府、送還漂商、

十月大將軍源家康賜復書、

書式 奉書云、安南国天下總兵都元帥瑞国公妓屢蒙家

康公貴意、末署其国年号弘延二年、賜書云、日本国源某復

章安南国某官某公、末署年号、安南諸書率多如是、

謹按、安南都元帥大都統蓋其国主也、而某諸書彼不(其カ)

自載其姓名、甚者至直舉我大將軍諱稱之、其失礼甚

矣、夫安南亦漢文之国也、非蠻字之比矣、當時府議

不詰責而措之何也、

慶長七年安南国大都統某奉書于征夷府書、十月大將軍源

家康賜復書及兵器、

慶長八年五月安南国大都統阮敬奉書于征夷府、十月大將

軍源家康賜復書及朱印朱印、

慶長九年安南国大都統某奉書于征夷府、八月大將軍源家

康賜復書、

慶長十年五月安南国大都統某奉書于征夷府、九月前大將

軍源家康賜復書・兵器、

書式 賜書云、日本国從一位源某、

謹按、前後書式是独稍善、然明年安南奉書、為日本

国本主一位源家康殿下、則彼似未知從一位所以然也、

蓋聞、安南強臣僧踰、国若二君、其元帥都統或君或

臣不可指定、彼以其國視我國、宜不知我一位非國主也、

慶長十一年五月安南國大都統某復奉書、蓋報去年九月賜

書也、九月前大將軍源家康賜書、蓋報五月奉書也（通書云、五月前有

我賜書、九月前有奉書、並闕、恐不然

書式 賜書云、日本國源某回章安南國刺史足下、（史力）

謹按、六年至是、安南与我征夷府、書信往復、物貨

貿易、無歲無之、其書信則皆貿易事務、非朝鮮聘使

之比也、故交雖甚密、事則甚細、無無足言者矣、安

南每貨其沈楠、而博吾利刀、堅甲、諸銅器、是則吾

之失計也、

慶長十七年五月安南國大都統某奉書于征夷府、

謹按、十一年之後奉書始見于此、然其間貿易蓋不絕

矣、

元和二年八月大將軍源秀忠賜交趾商船以朱印（交趾即安南）云、

交趾商船遭風漂至、不問何地愛護無他、

元和六年二月征夷府老中本多正純、土井利勝、與書安南

國大都統某、

謹按、是後至元祿七年安南國奉書于征夷府及長崎奉

行、又示船商凡十余通、率不載復書、蓋無比也、安南之事於是乎漸歇矣、（此力）

寬永二年正月大將軍源家光使府老中酒井忠世、土井利勝、

酒井忠勝賜復書于安南國主某（不載奉書、又載家光書、守重云、蓋草成不果賜）、

右安南國

慶長十一年九月前大將軍源家康賜書于暹羅國主某、

慶長十五年七月前大將軍源家康賜書于暹羅國主某（是時有本多正純復暹羅國臣某書、而不載某奉書）、

元和七年四月暹羅國主某遣使奉書于征夷府、九月大將軍

源秀忠賜復書、時尾張國人山田長正在暹羅國、亦呈書于

府老中土井利勝、言遣使事、利勝與答書、

謹按、暹羅國往復貿易事体大類于安南矣、其國亦自

用其年号、但、國主自署其名、比安南為少有礼耳、

元和九年四月暹羅國主某遣使、奉書于征夷府、閏八月大

將軍源秀忠賜復書、先是七年及是年、暹羅國臣有呈征夷

府老中及長崎奉行書及其復書、是後寬永二年三年亦有與

老中往復書、

寬永六年四月暹羅國主某遣使、奉書于征夷府、九月大將

軍源家光賜復書、時其臣某及山田長正各呈書于老中、老

中往復書、

中与答書、

右暹羅國

慶長八年先是柬埔寨國主某、蓋奉書于征夷府書、正月大

將軍源家康賜復書、四月國主某復奉書于府、十月家康賜

復書、

書式 奉書云、柬埔寨國寡人書拜奉日本國主足下、未

署大歲干支年、無年号、

謹按、柬埔寨非特遣使奉書、書皆付吾國商船、其事

較安南・暹羅更輕、而往復益繁、有一歲至二三次者、

慶長十年四月柬埔寨國主某再奉書于征夷府、九月十月十

一月前大將軍源家康賜復書、

慶長十一年三月柬埔寨國（兼カ）臣某某等奉書于征夷府、八月前大

將軍源家康賜復書、

謹按、諸蕃國臣直奉書于征夷府者、為無礼却之、或

命其下官代答無有不可、今煩大將軍復書者豈以其國

陋不足与較、姑以不治治之乎、

九月前大將軍源家康賜書于柬埔寨國主某、

慶長十三年四月柬埔寨國主某及其舅某奉書于征夷府、八

月前大將軍源家康並賜復書、且賜制札曰、凡國人到其國

有惡逆者、其國以法処之吾無恨也、

慶長十五年四月柬埔寨國主某奉書于征夷府、七月前大將

軍源家康賜復書、是後寬永四年長崎奉行長谷川広智与書

其宗室及其臣某、享保十二年・元文五年・寬保二年其臣

並奉書于征夷府、並不載復書、柬埔寨之事止于斯、

書式 柬埔寨諸奉書並單署干支、独享保・元文二書署

天運号、守重云、柬埔寨原横文國非有年号、是蓋信漢

人作漢文、（脱カ）從說美号尔、

謹按、享保・元文・寬保三書、（脱カ）拋文弘之、皆奉征夷

府者也、而守重以為呈長崎奉行、蓋有所見也、今姑

從之、

右柬埔寨國

慶長十一年八月前大將軍源家康賜書于右城國主某、十二

年使僧承允与書其執事、十四年長崎奉行長谷川広智与書

其國主某、

右占城國

慶長四年太泥國封海王某奉書、七月内大臣源家康賜書、（復脱カ）

七年太泥國林隱麟奉書、八月内大臣源家康賜復書、十一

年太泥國主某奉書、八月大將軍源家康賜復書以上奉書三通並佚、

右太泥国太泥古浮泥也

慶長十一年十二月大將軍源家康賜書田彈国主某、

右田彈国守重云、田彈疑番丹諒

慶長六年十月内大臣源家康賜復書于呂宋国、

慶長七年八月内大臣源家康賜復書于呂宋国大守、九月家

康賜書于呂宋国主某、

慶長八年正月大納言源秀忠(復脱力)賜書于呂宋国主某、

書式 賜書云、日本国大納言源某奉復呂宋国主麾下、

時秀忠未任將軍也、奉書三次並不載、無以兇其式也、(見力)

慶長九年呂宋国主某奉書于征夷府、不載復書、

書式 末署西土台千陸百肆年、乃洋曆也、(卷力)

謹按、奉書用洋曆、乃知、前後所稱国主者、皆伊斯

巴尼亞頭日也、(目力)當時府議徒貪互市之利、不復顧名義

之当、是以於是等事、一無所問、其失国体大矣、

慶長十一年正月薩摩等国主島津義弘、復書于呂宋国主某

及其巴礼王某並不載

慶長十三年五月呂宋国守護某奉書于征夷府而將軍、八月

前大將軍源家康、大將軍源秀忠並賜復書、時呂宋船奉府

教至相模浦賀、家康賜朱印二通有言、凡人到其国或有

惡逆者、其国処諸法吾無恨也、

書式 秀忠賜書云、日本国征夷大將軍源某呈報呂宋国

主麾下、

謹按、是時前將軍尚在、秀忠姑署其官職、以別之耳、

非覺国主自処之非義也、十七年賜五和・天川書亦同、

然署官則誠可為後程式、但、呂宋与五和・天川並非

同文国、恐不能達吾国名分、独惜朝鮮書式議未及是

也、

慶長十四年七月・十日前大將軍源家康賜復書于呂宋国(月力)並

載奉、家康又賜呂宋船主制令云、呂宋船至濃毘須蛮、或

遭賊船或遇逆風、以漂到吾国、檢此書印加救護者、

慶長十六年九月前大將軍源家康賜書于呂宋国主某、

慶長十七年彼六月、呂宋国某奉書于征夷府及其老中本多正純、

後藤光次光次為何官人未攷焉、前將軍源家康及正純・光次並賜書、(復脱力)

書式 奉書云、民希獵王欽奉于系蠟国皇帝其命、鎮守(蠟力)

呂宋東洋總評事、兼興宜力郎云々、

謹按、民希蠟蓋奉伊斯巴尼亞命鎮守呂宋者、前後所

稱国主即此類耳、要在彼為人臣、小夷之臣乃敢書達

征夷府、頗嫌与為敵体、其極夷主將視天朝為同輩、

是識者之所懼、而今人之所不講也、

慶長十八年彼五月、呂宋國主某奉書于征夷府、某及其臣某又

復本多正純・後藤光次正純・光次先是蓋、有往書而不載、

九月前大將軍源家康賜復書、正純・光次亦與書、

書式 家康賜書國主某為呂宋國王、正純・光次書其臣

某為呂宋國執事、

右呂宋國

東埔寨・占城・太泥・田彈及呂宋、所謂國主決非

(真力)直國主、率係西歐所置頭目、今皆以為國主者、(因)

仍日文、疑以佞疑也、

慶長十四年七月前大將軍源家康賜朱印於天川國、

慶長十六年九月前大將軍源家康賜朱印於五和國、

慶長十七年八月薩摩等國主島津家久作書復南蛮國來船主

及其國老、是年六月五和國主某等・天川國某等共六並奉

書于征夷府、又呈書于府老中本多正純及後藤光次、九月

前大將軍源家康・大將軍源秀忠賜復書于五和國、使正純・

光次各與復書、

書式 五和奉書云、西域國署五和王事、天川云、西域

國臣奉行天川港知府事、

謹按、西域蓋言西洋也、諸書並係波爾杜瓦爾國所置

五和・天川頭目所奉、若待以一國則過矣、

元和七年天川國呈書于征夷府老中土井利勝、九月利勝與

復書、

寬永十七年(加々爪)瓜瓜忠隆忠隆為何官未攷焉與書阿瑪港、責其挾邪教

不軌永絕之、

右天川・五和兩國

謹按、天川又作阿瑪港、五和又作臥亞、或總稱南蛮、

其地偏小、素不足列一國、特以當時波爾杜瓦爾扼焉、

開港置鎮、四通貿易、誤指為一國耳、他若呂宋諸地

亦然、而大將軍必親賜書印不太重乎、

慶長十七年六月前大將軍源家康・大將軍秀忠並賜復書于

濃毘數般國主不載、唯許物貨貿易、而切禁(教脫力)、

守重云、濃毘數般即新伊斯巴尼亞按係北亞墨利加州、其國

主即本國所置頭目、與波爾杜瓦爾之天川・五和事

体全同、後寬永元年来使亦恐非其國使也、

寬永元年三月伊須波使來薩摩、府議使長崎奉行長谷川広

智諭曰、往年所許貿易一事耳、何乃犯邦禁、邪法誑衆為、

吾不受外國聘使也、

右濃毘數殺国

慶長十四年七月前大將軍源家康賜朱印于伊祇利須、許貿易、事詳阿蘭陀国下、

慶長十八年伊祇利須国主奉書于征夷府、九月前大將軍源

家康賜復書、時賜朱印、其中有言、云、伊祇利須船到日

本、不問何港愛護無他、賜邸江戶地基任其所請、

元和二年八月大將軍源秀忠賜朱印、与慶長十八年家康所

賜略同、

延宝元年六月征夷府禁絶伊祇利須來航、蓋惡其与波尔杜

瓦尔交結也、

右伊祇利須国

謹按、伊祇利須漢訳啖啖、四海多用之、故今或仍

之、啖啖喇見絶于延宝、文化則來擾我辺、而見親於

安政、時也、源家康・秀忠好交通万国、慶長・元和

之際往來輒盛、寛永十三年申邪蘇之禁、乃始瑣国矣、

近癸丑・甲寅來啖啖喇及魯西亞・米利幹・仏朗西諸

国、來者親之、請者許之、是以為復慶元之盛歟、慶

元之際交通者、皆小島陋夷、吾之所能制其死命也、

今之諸国殆不如是、通国勢者、蓋有知其不然也、雖

然吾之所憂、名義之不正也、

一五〇五

同上

白石先生著書目

白石余稿刻本三冊、白石詩草刻本一卷原註云、余稿詩草ノ、外詩卷數本アリ

白石遺文三卷、内序記弁論及ヒ詩一卷漢官云、常藩史臣立原、高伯時、土德甫家ニ有所

ノ先生眞蹟ヲ綴、集シテ卷ヲ成者、經邦典例抄、日本紀論、俳優考、樂考、

議訴父母罪一、問田歩一、起請文考証一、一卷ト為ス經

邦典例序、田制考、貨幣考、車輿考、冠服考、樂舞考、

職官考漢官云、右諸考經邦典例内篇、方策合篇序編三卷佚ス、惟名本篇既ニ佚ス、惟序存ス、方策合篇序漢官云、方策合

序存、新井家系集、古函序、奴為古主紀事、一卷俱ニ遺文

三卷ト為ス、白石遺稿一卷、内聖像考、唐莊宗紀講義進

呈案、玉考樂考、木瓜考、人名考漢官云、人名考佚ス、今存、スル処ノ者ハ其序例ノミ、

岩松家系付録各一篇、俱編一卷ト為ス漢官云、児玉氏徳甫ノ家ニ有所ノ先人元成録

本ヲ得ル集綴シ、テ書ト成スモノ、決獄考一卷、樂考一卷、文字考一卷、冠

服考二卷、軍器考刻本十四卷原註云、先生孫邦賢邦軍、器考數本アリ、同文

通考刻本四卷、讀史余論五卷、古史通三卷、東雅七卷、

地名河川兩字通考一卷、五事略五卷、國喪正議鳩巢室一子文

卷、復号紀事一卷、朝鮮聘考付共二二卷、朝鮮聘札事

原註云、林七九郎・林百助故事ヲ録シ、朝鮮信書式一卷紙四、將軍

テ上ル所ノ者、先生集メテ書ヲ成ス、宣下儀紙、奉命教諭一卷、癸巳三月議三卷上中二卷存、下卷佚ス、藩

翰譜二十卷、同系圖六卷、觀樂鴻閣筆談一卷、經邦典禮

例 一作 佚ス今其存スル所序例、數篇遺文中ニ見ル、孫武兵法拊副言四卷、黃白問答名

新野問答ト云、野々、新安手簡白石ト常藩ノ史臣安積覺ト往復ス、漢

宮參議新井君美問對官云、立原伯時安積氏家白石書牘真蹟

ニ從ヒ集録シ、鬼神論一卷、南島史二卷又琉球志、北島志

又蝦夷志、停雲集刻本二卷、折燒柴三卷秘本堀田撰州・京極備

トイフ、文廟遺事及出身始末雜事古歌ノ詞ヲ取、テ名ク意ヲ托スル事尤腕ナリ德甫云、西洋紀聞二卷秘本寛政癸

ニ留、西洋圖說一卷、采覽異言二卷、新井家譜一卷、新

田徳川世良田三家合考二卷門人平元成跋云、独此一考實ヲ、易ル數タノマヘニ成ルト云々、白

雉帖一卷、雜文二通、五色筆二卷、画工便覽一卷、集古

図說二卷、詩經図一筐、倭地形類一卷、鶏肋稿一卷、天

爵堂漫鈔一卷、雜録十九卷原二十有余卷、三四本ヲ佚ス、其内編

雜録〇〇、珊瑚綱四卷、百家編十卷右二部、群書ノ抄本ニ係、

卷トナス、右田カ目ニ拠ル、通計八十餘種、君沢ノ言ニ較ルニ猶三

ノ一二足ラス、知ル佚亡ノ者多ニ居ルヲ、特ニ惜ムヘシ、

〇又云姓名考五卷、家礼儀節考三卷ト云、

一五〇六

軍事改正ニ就テ調査

權馬(犬追物及ヒ鎗流馬)
(流鏑馬カ)

西遊記ニ云、薩州・日州ノ辺ハ都遠ケレハ却テ古代ノ風

残レル事多シ、諸所ノ神社ニ權馬トイフ事有、此權馬ト

イフ名目ハ東鑑ニモ見ヘタリトソ、其權馬トイフ事イカ

ナル事ト所ノ人ニ問ニ、何ニトモ心願有人、其思ヒ崇フ

所ノ神社ニ權馬ヲ奉ルトイフ、其式ハ小荷駄野飼馬ヲ不

撰數十疋取集メ、鞍鐙皆具シテ其上ニ幣ヲ切カケ、口取

ノ馬(音脱カ)壹疋ニ三人程ツ、付テ、皆白衣ニ襷ツバカケ、神樂ノ太

鼓ヲ相図ニ其馬ヲ一度ニ追立、鳥居マヘヨリ拝殿ヲ廻ル

事三遍、數十百ノ馬・數百人ノ口取イヤカ上ニ折重リ、

我先ニト一同ニ押廻ル、其間神樂ヲ頻リニ奉ル、太鼓ノ

響・人馬ノ声夥敷クテ一村ニ震フル事ナリ、此ヲ濟テ流

鏑馬ヲ始ム、イト勇敷クテ古風ナル事ナリ、其流鏑馬競

馬ナド、イフ事モ近世上方ニハ稀ナル事成ニ、此辺ニハ

諸神社ニ皆有之、殊更日向ノ宮崎郡下北方村ニアリ、神

武天皇ノ宮ニ行フ流鏑馬競馬ハ最嚴重ナリ、其地方七八

町計平地ニシテ古松森々ト生ヒ茂リ無双ノ境内ナリ、宮

居ハ中央ニ東向ニ立玉フ、馬場ハ宮居ノ南北ニ開キテ幅十五六間計、長サ式百間ニ余レリ、北ヨリ南ヘ向フテ乘ナリ、例年九月廿七日当日ナリ、前ノ廿三日ヨリ足揃ヲナス、村々ヨリ奉ル馬ノ遅速ニ從テ番々ヲ定ム、大凡例年馬ノ百五六十疋計ナリ、馬ノ上中下ヲ分チテ五匹ツ、ヲ一組トナス、扱其当日ニハ左右ニ土俵ヲ築上テ、棧敷ヲ構ヘ見物人コ、ニアリ、早朝ヨリ始メテ暮ニ及フ、各三遍ツ、乗ル下リ、北ノ馬ノ出シ口ニ大綱ヲ引テ五匹ノ馬ノ足ヲ揃ヘ出入無キ様ニ構ヘ、乗入ハ狩裝束ノコトクニ出立、禪ヲカケ誠ニ勇々敷ナリ、馬主ノ寄人馬壹疋ニ五六人程ツ、口綱ヲ取、互ヒニ片唾ヲ吞テ相鬪ヲ待ツ、馬ハ一人ヨリモ勇シテ、ハヤ馳出シ々々トハヤリ出ス、行事ノ人声ヲ懸ルヤ否ヤ綱ヲ切テ一同ニ馳出ス、五疋ノ足音震動シ、乗人ノ懸声樹木ニ響キテ夥シ、馬ハ元ヨリ此日ノ晴ノ為ニ飽テ飼立タルコトナレハ、古ニ聞ヘシ駿足ニモオサく、劣ルマジク見ユ、乗人モ互ヒニ勝負ヲ争フコトナレハ爰ヲセンド、励ム、馬ノ競ヒ争フコトハ人ニモ十倍ス、サレバニヤ出シ口ニテ少シノ後レアレバ、早トテモ勝マシキト思フヤ否纔二十間廿間ニテ馳止リ、

打トモアホレトモ馳ル事ナシ、或ハ中途ニテ馳後レタルハ横サマニ切レテ見物ノ中ニ馳入ル事有、是其力ノ劣レルヲ恥テナリ、又相当ノ力アリ馬ノ打連テ馳行ニ、纔ニ後ル、様ナレバ其馬先キノ馬ニ追スカヒ、横サマニヒタトモタレテ押懸ルニテ、先キノ馬強ク押サレテ少々横ニヨル所ヲツト馳抜ルナド、馬ニモ色々ノ智恵有テ見ユ、扱馬ハ立替々々乗ニ乗、人ハ纔十人計ニテ式百間計ノ馬場ヲ三遍ツ、百五六十疋ノ馬ヲ朝ヨリ暮ニ及フ迄少シモヒルマス乗ル事、誠ニ馬上ノ達者トモイフヘシ、又薩州ニハ犬追物ナトイフ馬術射術ノ式アリ、折々其稽古ヲナス事ナリ、他国ニハ稀ナル事ニテ、弓場ノ家ニ犬追物ナトハ極秘トスル事ナリ、薩州ニハ其先祖島津三郎兵衛尉忠義、鎌倉將軍ノ時犬追物ノ申様ヲ勤シ例ニヨリテ、御当家 大猷院殿(家光)御上覽ノ御時、東都ニ於テ島津家ヨリ犬追物ヲ勤ラレシヨリ今ニ至テ伝来シテ彼家ノ事トスルトナリ、又牧ノ荒駒ヲ捕事アリ、奇代ノ見物事ナリ、牧ノ中ニ諸士ノ棧敷ヲ設ケ、扱騎馬數十人・歩卒數百人四方ヲ囲テ牧ノ駒ヲ狩置テ棧敷ノマヘニカリ出シ、騎馬ノ士其志ス荒駒ヲ乗伏ル事ナリ、其様荒タル牧ノ駒

ヲ追詰テ、或ハ谷ヨリ谷ニ乗移リ、轡ヲハマスモ有、細引ヲ折懸テ引留ルモアリ、竹ノ輪ヲ打懸テ取留ルモ有リ、思ヒ々々ノ働キ誠ニ目サマシキ壯觀ナリ、其隊伍ノ備ハ歩卒ノ懸引、軍陣ノ修練ニシテイト正敷事ナリ、此事奥州相馬ニテモアリテ、年々其日限極リ居テ他国ヨリモ見物集ルコトナリ、大抵ハ其趣似タル事ナリ、中土ニハ土地狭ク牧トイフモノモナク、野飼ノ馬モ稀ニテ、カ、ル兵馬訓練モナク人皆カシコケレトモ、年々柔弱ノ風ニ移コトナルニ、辺土ハ物事オロカナル代リニハ又カク古風ナルコトモアリテ、治世ニ武ヲ不忘、聖人ノ教ニモカナヘル業モ多カリケリ、

一五〇七

農工業獎勵ニ就テ調査

石質考

大隅州ノ石ハ密ナレトモ甚柔ナリ、彼国石灯籠或ハ手洗鉢・石碑・仏像等皆此石ヲ用ユ、イカヤウノ巧ナル細工ニテモ施スヘシ、又能水氣ヲ含ムユヘニ苔ムシテ其上數百年ノ久シキニモ堪ヘシ、彼地ニテ五百年ニ近キ石塔ヲ

見タリ、薩州及ヒ琉球国ナド皆石碑ニハ此石ヲ用ユ中、是ヲ打ハ磬ノ音アリ、珍石ナリ、

撰州御影石ハ龜ナリトイヘトモ、確キ事日本第一トイフヘシ、ユヘニ長崎或ハ薩州ナトニテモ石碑ニ此御影石ヲ以テ作ル人有、長崎ハ石龜ニシテ且柔ナリ、薩州ハ石密ニシテ柔ナリ、都テ南国ハ石ミナ和柔ナリ、下品ナリ、琉球ノ石杯ハ殊ニ柔ニシテ用ルニ足ラストイフ、

一五〇八

琉球奇石

琉球ノ属島ヨリ穀ノコトキ細石ヲ出ス、光沢ナク只潔白ニシテ奇品ナリ、備中ヨリ出ル石是ニ似タリ、其外但馬ノ国ニ石臼有、下略、和漢名石ノ事ハ雲根志ニクワシ、

屋久島さつま杉 硯 渡り鶴 雁木 雁風呂

琉球近キ島ニ屋久島トイフ大島アリ、昔ハ日本ノ外ナル一ケ国トシテ国史ナトニモ屋久島人來朝スルナトト見ヘタリ、此島ニ八重嶽トテ高サ十三里ノ高山アリ、当山ヨリ良材ヲ産シテ、世ニ称スル薩摩杉ナトイフ木モ此山ヨリ出ルトソ、又ヨキ硯石ヲ出ス、上品ナリ、スヘテ南国

ノ鶴春ニ至リ北方ニ渡ラントスル時ハ、數千里ノ北海ヲ一飛ニ越行コトユヘニ羽勞レテ海中ニ落ンコトヲ恐ル、ユヘニヤ、此屋久島ノ八重嶽ヲ廻リテ空高く飛上リ虚空ニ至リテ、ソレヨリ北ニ向ヒテ飛渡ルナリ、中途ニテ羽勞レテ次第ニ落ルトイヘトモ、高クヨリ飛事ユヘニ、容易ニ海面マテ落ル事ナクシテ、朝鮮ノ地方へ着クコト、ソ、此八重嶽ノ絶頂ヨリ猶々舞々シテ虚空ニ入事ナレハ、人ノ目モ及ハザル高ク雲中ニ入テ始メテ北ニ向フナリ、雁ナドニテモ小鳥類ニテモ北地ヨリ日本へ渡リ来ルニハ、中途ニテ羽勞レテ海中ニ落ンコトヲ恐レテ、鳥毎ニ枯木ノ枝ヲクハヘテ来ルナリ、海中ニテ羽勞レバ枯木枝ヲ海面ニ浮メテ、其上ニ下リ立テ羽ヲ休メ、又其枝ヲ飛来ル^(クハヘテ脱カ)トゾ、ソレユヘ北道^(海力)邊ニテハ、秋ノ初ハ雁ノ渡リ来リシ時ハ海浜ニ枯枝夥敷落有ナリ、依之秋ノ比ハ海浜ノ人、此捨アル枝ヲ拾ヒ集メテ風呂ヲ焚テ漁人集リ浴スル事ナリ、コレヲ北海邊ニテ雁風呂トイフ、微少ノ禽獸トイヘトモ相応ノ智アル、天地自然ノ所ナラ感スヘシ、

春の屋云、一宵話一卷ノ頭書ヲ見ルニ云、雁ノ空中ヲ渡ルニ蘆ヲ銜ムトイフ事ハ、淮南子ニ出レハ古代ヨリ

云シ世言ナルヘシ、東奥海邊ニテ此蘆ヲ拾ヒテ雁風呂ヲワカストイフ話ハイト嘆シ、唐土ノ書ニモ載セヌニヤ、尚尋ヌヘシト云々、イヅレカ是ナル哉辨ガタシ、俳諧ノ季寄ニモ雁風呂トイフ事アリ、

一五〇九

獵犬考

薩州ハ武国ニテ、若キ人々山野ニ出テ鳥獸ヲ獵ル事他國ヨリ多シ、都テ山野ニ獵スルハヨキ犬ヲ得サレハ不叶事ナリ、彼邊ノ犬常ニ人家ニ養ヒ飼モノハ長ケ低ク、上方ノ犬ヨリモ少ク小ナリ、常ニ座敷ノ上ニ養フテ上方ノ猫ヲ飼フガゴトシ、至極行儀ヨク、上方ノ犬ヨリハ柔和ナリ、異品トイフヘシ、又獵ニ用ル犬ハ格別ニ長ケ高ク、猛勢ニテ座敷ニ養フコトナク、上方ノ犬ヲ飼通リナリ、其猛勢ナル事ハ上方ノ犬ニ十倍セリ、先年虎ノ餌ノ為ニ彼國ノ犬ヲ入レシニ、其犬虎ノ噬ニ咬付テ虎ヲ殺セシコト世間ノ人ノ物語ニ在コトクナリ、カ、ル猛勢ナル犬ユヘニ、常々ハ二三疋ヨリ集レハ早咬合テ喧シキニ、大勢獵ニ出ル時ナトハ諸方ノ犬ヲ皆々繋キテ各率行事ナルニ、

市町ヲ出ル迄ハ必ス咬合テ騒ケレトモ、既ニ山ニ入ト、其犬トモ常々ハイカヤウ中悪敷ヨク咬合フ犬ニテモ甚中ヨク成テ、綱ヲ解キ放シテ犬ノ心任セニ馳廻ラスレトモ、犬同士咬合フ事ナク、互ニ助合テ山ヲ働クナリ、是向フニ猪鹿トイフ敵アル故ニ、犬トモ皆一致ノ味方ニ成テ中ヨク成事トソ、依之イフニ昔朝鮮御陣ノ時、彼地ニテハ日本人イカ成者モ皆一致ニ成テ互ヒニ相助ケ合、至極親シカリシトソ、向フニ異国人ノ敵有ユヘニ、日本人同士ハ格別ニ親ミ厚ク成ケル事尤ノ事ナリ、一家ノ中ニテモ親子兄弟夫婦等ノ中アシク、争ヒ怒ル事ハ内証コトニテ、畢竟榮耀又ハ我マ、氣随トモイフヘシ、モシ盜賊入カ又ハ火事ナトノ時ニハ、イカナル中アシキ家内ニテモ一致ニ成テ防グヘシ、此ユヘニ詩經ニモ兄弟カキニセメケトモ、外ニハ其侮リヲ防グトモ見エテ、他人ノ親キヨリハ中アシキ骨肉ノ方カ厚カルヘシ、此所ヲ心ヲ潜メテ考ヘ弁ヘハ道ヲ行フニ至ルヘシ、

一五一〇

麝香鼠

薩州鹿兒島城下ニ麝香鼠トイフ者有、多ク水屋ノモト床ノ下杯ニ住テ其形ウロモキ鼯鼠ニ似テ、其糞甚臭シ、少シ麝香ノ匂ヒニ似タリ、ユヘニ麝香鼠トイフ、食物ヲ貪リ器ヲ破リ損フ事常ノ鼠ヨリ甚シ、膳・碗・櫃ナトニ此鼠一度入ル時ハ其匂ヒ留リテ幾度洗ヒ清ムレトモ去ラス、此鼠又座近ク出ル時ハ其匂ヒ鼻ヲ穿チテ堪難キ程ナリ、其鳴声甚大ニシテ雀ノ声ニ似タリ、ユヘニ中山伝信録ニハ琉球ノ鼠ハ雀ノ声有ト書述タリ、此鼠モモトハ琉球ノ船ヨリ渡リ来リ、今ニテハ城下町々家々ニ甚多キ事ニ成レリトイフ、長崎ニモ唐船ヨリ渡リ来リテ町家ニモ多クアレド、薩州程ニハ多カラス、其外ノ国ニテハ絶テ無キ鼠ナリ、一説ニ阿蘭陀人ハ此鼠ヲ以テ煉合セ麝香ヲ造ル法有トイフ、誠ニ秘法アラハ麝香ニモ成ヘキ程ノ強キ匂ヒアル鼠ナリ、

一五一一

天ノ逆鉾西遊記五

神代卷ニ、諾冊ノ兩神天ノ浮橋ノ上ヨリ霧ノ海ヲ詠メ下シ賜フニ、島ノコトクニ見ユルモノ有、二神天ノ手トホコカ鉾ヲ

以テコレヲ探リ見賜フニ国ナリケレハ則此所ニ跡ヲ垂賜
フ、是霧島山ト名付ル由ニシテ、其銚ヲ逆シマニ下シ賜
フカ今ニ至リ、其マ、ニ此山ノ絶頂ニ立テ有ルヲ天ノ逆
銚トイフ、誠ニ神代ノ旧物ニシテ奇絶ノ品、又外ニ是ヲ
比スヘキモノナシ、人々皆珍ラシト尊ヒテ拜センコトヲ
希フトイヘトモ、此霧島山格別ノ高山ニシテ、殊ニ火燃
風動キ其外種々ノ神変・不思議・怪異・珍奇多ク、登ル
者不時ニ紛失スル事ナド毎度ノ事ユヘニ、薩州ノ人トイ
ヘトモ恐レテ絶頂ニ至ル者少ク、予久敷此逆銚ノ事聞居
テユカシク思ヒイツレバ、鹿兒島逗留ノ時ニ志ヲ発シ登
ラントス、然ルニ山中奇怪多シト聞ハ、召連シ僕ナドハ
凡庸ノ者ナレハ、若恐レテ紛失ナトセハ悪カルヘシト思
案シテ、旅宿ヘ集会ノ人ノ中ニテ撰ミシニ、旅宿近辺ニ
年若キ勇壯ノ男有テ、我コソ同道スヘシトイヒシユヘ、
則打ツレテ只二人十一月八日トイフニ薩州鹿兒島ヲ立テ
日向国ニ赴ク、薩隅日三州ハ嚴寒ノ時トイヘトモ雪霜ヲ
知ラヌトイフ程ノ暖国ナレハ、カ、ル高山ヘモ霜月ニ登
ラル、事ナリ、殊ニ此年ハ格別暖氣ニテ此比ヤウ々々綿
入衣衣着スル位ノ事ナリシカハ心ヲダヤカニ発足ス、扱

海陸ニ日路ヲ經テ霧島山ニ入、数十丁登リテ霧島ノ宮居
ノマヘニ着ク、ニ神垂迹ノ地ナレハ宮居今ニ至リ殊ニ美々
敷、此近国ニテノ大社ナリ、伏拝ミテ黄昏ニ及ヒヌレハ
側ノ山下坊トイフ坊ニ宿ス、此坊ニテ先達ノ案内者ヲ宵
ニヤトヒ明朝夜ノ間ヨリ登山ス、雜樹生茂リ日映サヘ包
ミケル程ノ山ニテ睨トシタル道路モ見ヘサルニ、只案内
者ノ後ニ從ヒヒタ登リニ登ル、其間奇樹異草名モ知ラス
目ナレヌモノ甚多シ、是ハ南方暖国ノ山ナレハ生草ノ品
類モ多キナルヘシ、全体草木北国ノ山ナド、ハ格別ニ種
類多シ、カクノコトキ所ヲ五十丁登リ尽セハ夫ヨリ上ハ
樹木一本モナク、只芝ノコトキ草ノミ生タリ、其所ニ至
レバ四方豁達ト打晴、薩隅日ノ三州一望ノ中ニ入テ、衆
山ハ波濤ノコトク、大海ハ青聲ヲ敷タルカコトシ、其中
ニ桜島山突然ト秀テ、盆石ヲ置タルガコトシ、絶頂ヨリ
白キ煙四時ニ立昇リテ香炉ノコトク、景色無双、筆ニ尽
シ難シ、扱件ノ草計リノ山ヲ登ル事又五十丁、ソレヨリ
上ハ草モナク、只栗ホドノ焼石計ナリ、コ、ニ至ツテ登
リマスタ々々急峻ナリ、扱此辺リヨリ上ヲ段々登ルニ從ヒ
天地ノ気色ヤ、変シ、不時ニ下ノ方ヨリ雨ソ、キ来リ、

或ハ風ヨコサマニ卷来ル、又眺望ノイトマナク、ソレヨ
 リ二十丁モ登リテ馬ノ脊越トイフ所ニイタル、マタ御鉢
 巡リトモイフ、此所ハノボラス、只平ニユクトイヘトモ、
 左右皆谷ニテ劍ノ刃ノ上ヲユクコトク、足ノ踏所纔ニ馬
 ノ脊程ナレハ馬ノ脊ト(總脱カ)ハイフナリ、足ヲ運ヘハ粟(粟カ)ノゴト
 ク成焼石左右ノ谷ヘナダレ落ル、其行所ノ狭キヲ知ルヘ
 シ、扱左ノ方ハ万仞ノ谷ニテ底ハ雲ニテ眼及ス、右ノ谷
 ハ深サ三四丁或ハ五六丁ニテ、谷ニ滿テ猛火燃上ル、此
 馬ノ背越ニカ、リテ後ハ只何トナク震動シテ地軸只今碎
 ケ折レテ此山微塵ニ成ヤウニ覺ユ、マタ腥キエモイワレ
 ヌ氣吹来リ、或ハ墨ノコトクナル雲渦卷来リ、同行ノ者
 サヘモ一向ニカクル、事モアリ、或ハ前後左右ニ異形ノ
 雲煙現ハレ、鬼神ノコトク仏神ノコトキ事モアリ、或ヒ
 ハ足下ヨリ虹立登リ経横ニタナヒキテ織ナセルガコトク
 成事モ有、又天地トモニ金色ニ成事モ有、其外奇怪フシ
 ギ中々イフモ愚ナリ、静ニコレヲ考フルニ、是ミナ谷一
 面ニ猛火ニヨリテ又陰氣聚リ来リ、火ノ上ニ雨ソ、ギ雲
 霧覆フカユヘニ、水火相激シテ震動雷電シ、又水火薰蒸
 ニヨリテ種々ノ形ミユルナリ、マタ硫黄・焰硝ノ氣アル

上、ソレニ水ヲソ、キタルユヘニ種々ノ匂ヒモ出ル事ナ
 リ、マタ折々一陣ノ風吹来ル事有、此時二人達都ヘテ急
 ニ俯臥ニ仆レ臥シム、匍匐ニナラザレバ風ノ為ニ取レル
 モノアルユヘニ、此山ニテハ紛失スル人多シトイフナリ、
 予モ殊ニ此風ヲ恐レテ少々ノ風ニモ急キ俯伏ニ成、地ニ
 取付テ風ニ放タレザルヤウニセリ、暫時ニシテマタ忽ニ
 風モ止ミ天晴事モ有也、須臾ノ變幻定リアル事ナク、此
 所ニ取懸リシヨリサシモ勇氣ノ若モノ大ニ恐レ、足戦キ
 立事アタハス、予ト先達ト前後ヨリ介抱シテイロくト
 恥シメ励マシ、暫シカ程ハ引キ行シカド、後ニハ目見ヘ
 ズ顔色変セシカハイカントモシ難ク、殆ト難儀ニ及ヒシ
 ニ、先達イフ様ケフハ山モ格別ニ荒シ、殊ニカ、ル人引
 具シ行ン事イカニモ叶フヘカラス、登山モ是迄ナリ、コ
 レヨリ下山スヘシトイヘハ、力及ハス、本意ナクソレヨ
 リ下リニ向フ、扱夫ヨリ纔ニ二十丁計リ下レハ天氣晴朗
 ニシテ風オモムロニ、四方ノ眺望初ノコトシ、暫ク休息
 シテ焼飯ナド食シ、心ヲ鎮メシカハ若者モ氣色常ノコト
 クニシテ、先ニハ如何シテカバカリモ恐ロシカリツルニ
 ヤト三人打笑フ程ナリ、予ツラく思フニ、カ、ル事有

テ妨ニモ成ヘカランカトテ、凡庸ノ人ヲ同道セザリシナリ、然ルニ今雇夫カ為ニ予迄モ絶頂ヲ極メスシテ是ヨリ下山セン事、生涯ノ遺恨成ヘシ、何トソ一人ナリトモ登リ度モノヲト思ヒメクラシテ先達ニ道ノ程ヲ問ヒ、サラハ余リ残念ナレハ予独歩シテ絶頂ニ登ルヘシ、此所ニ若者ヲ守居テ予カ下リ来ルヲ待クレヨ、是ヨリ下ハ案内ナクテハ一步モス、メ難ケレハ返スノモ頼ムナリト云捨テ、止ムルヲモ聞ス、足ヲハカリニ登リシニ、件ノ馬ノ背越ニ至レハ天地忽変シテ初ノコトシ、先達ガ教ニ任セ、折々ハ俯伏ニ成テ風ヲ避、千辛万苦シテ馬ノ背越八丁カ間ヲ走リヌケタルニ、夫ヨリハ真直ニ登ル処有、此所ニ至レハ天地マタ常ノコトクニシテ奇怪ナシ、只息ヲ限りニ登ル程ニ遂ニ絶頂ニイタレリ、絶頂ハ尖リテ纒ノ地面ニ天ノ逆鋒有、是ヲ見得シ時ノ嬉シサ何ニカタトヘン、逆鋒ノ有様、全体ハ唐金ノコトクニ見ヘタレトモ、風霜ニ晒セルモノナレハ青ク錆テシカト知レ難シ、長サ一丈余計、太サ大ナル竹程ニテ逆様ニ地中ニ立、其石突ノ端ノ所ニ南面ニ鬼面ノ如キモノ見ユ、是モ風霜ニ晒サレタレハ、鼻目シカトハ見ヘカタシ、土中ニ入タル先キノ方

ハ何程深く入タルヤ知ルヘカラス、只絶頂ニ此鋒一本ノミニテ外ニ堂宇等ノコトキモノ一ツモナシ、神代ノ旧物ナリヤ、其程ハ知ラストイヘトモ、実ニ三百年五百年位ノ近キ物トハ見ヘス、天下ノ奇品ナリ、モシ銘ナトモ有ヤトクワシク見シカトモ見ヘス、暫ク此絶頂ニ徘徊スルニ、天気清明ニシテ四方目ノ及フ限りミヘ渡リ、其心地ヨキコト今ニ忘レ難シ、サレトモ斯ル所ハ久敷止ルヘキニアラサレハ急キ下リタルニ、馬ノ脊越ニイタレハマタ初ノコトク、天地晦冥シテ怪異マスノ甚シ、悉ク筆ニ尽スヘキニ非ス、殊ニ山上ノ様々ハ人間ニ洩サ、ル山法ナリ、恙ナク馬ノ脊越ヲ越テヒタ下リニ下ルニ、遙ノ下ニ先達・若者カスカニ見ヘテ豆粒ノコトシ、姑ク急ク程ニ、下ルトハナシニ^(元カ)下リテ須叟^(奥カ)ノ間ニ二人マヘニ着ス、恙ナカリシトノミ共ニ悦ヒ、其夜暮過ル比山下坊ニ帰リヌ、元来急峻ナル山ナレハ百五十丁ノ間ナレトモ、下ルニハ甚速ニテ暫時ニ下ル事ナリ、今度ノ登山、暴虎馮河ノ勇ナレトモ、モシ馬ノ脊ヨリ下リ来ラハ生涯ノ遺恨ナルヘカランモノヲ、ヨクモ絶頂ヲ極メタリヌ、官居ヨリ左右二分レテ西ノ峯・東ノ峯トイフ有、登ル処ハ東

ノ峯ナリ、東西只二峰ナレハ登リカ、リテヨリ絶頂ニ至ル迄只一筋ニ登ル事ナリ、他国ノ高山ハ多クハ登ル所モ有、又下ル処モ有モノ成ニ、当山ノミ水筋ニモ從ハス、只登リニ登ルノミナリ、富士杯ノ登リニ似タリトイフヘシ、山ノ高キ事思ヒヤルヘシ、カク二峯東西ニ対シ聳ヘタルユヘニ、昔ヨリ高千穂ノ二上嶽トイフ、神書ニイフ所ノ山是ナリ、別ニ今世ノ人ノ高千穂ノ峯トイフ山此国ニアレトモ、甚タ小山ニシテ神記(書カ)ニ記セル山ニアラス、高千穂ノ峯トイフハ此霧島山ナル事、種々ノ慥ナル証拠アリ、此山ニ登ルモノハ自然知ルヘシ、白石先生ヲ初メ、諸先哲ノ只今世ニ称スル所ノ高千穂ヲ神代ノ旧跡ト云レシハ、其身其地ニ遊ハサルユヘニ真跡ヲ知ラサルナリ、二神垂迹ノ義・天ノ逆鋒ノ義ナト皆予深ク考フル所有テ一説アレトモ、事長ケレハ別ニ記シテ此書ニ略ス、西ノ峯モ高サハ東ノ峯ニオトラス雲間ニ聳ヘヌレトモ、神跡ニアラサルユヘニ世ノ人登ル事ナシ、只此山ノ高ク、然モ広大成事無量ナリ、桎ノ巡リ三十六里、山中ニ大ナル池五六十モアリ、中ニモ大波ノ池・紫ノ池ナトハ三里モ有テ湖水ノ如シトイフ、此山ニハ蛇ウバヒ多ク住テ池ノ辺尤

モ多ク、樵者トイヘトモ池ノ辺ニハ行ナシ、モシ無拠池ノ辺ヲ通ル時ニハ無言ニテ通ルナリ、人語ノ響ヲ聞ハ大蛇必ラス出テ人ヲ吞ムトイフ、又野馬トイフモノ有テ、形ハ馬ノコトク、髪ハ長クシテ地ニ引キ恐シキ姿ノ獸ナレトモ、人ヲ害スル事ハナシトナリ、予山ニ登リシ時モ初メニ案内ノ者此事ヲ云テ、モシ見賜フトモ驚キ賜フヘカラストイヒシ、予モモシ見ハ珍ラシカルヘクト思ヒシカトモ、折アシク出サリケリ、其外種々ノ毒蛇・悪獸・大蜘蛛・大蝦蟇ナト夥シトナリ、是ハ南国ユヘカ、ル高山深谷ナレトモ雪封スル事ナク常ニ暖氣ナル上ニ、格別ニ広クテ人跡通ハサル幽僻ノ所多キユヘニ万物生シ易ク、冬モ蟄セスシテ斯ル物共多シト見ヘタリ、北国ニモ越中立山ナトハ高ク広キ事霧島ニ劣ラサレ共、四時雪封シテ生類ハ住事成難キ故、毒蛇・猛獸アル事少シ、只鳥獸草木ノ種類ノ多キハ天下此霧島山ニ勝ル処ハアラシトソ覺ユ、又山中ニ温泉ノ涌所モ数十ヶ所有、硫黄ノ出ル谷モアリ、水晶ハ馬ノ脊越辺ノ谷底ニ日影ニ輝キテ遙ニ鏡ノコトシ、或ハ月出ノコトク見ユルモノ所々ニ有、其大ナル事思ヒヤルヘシ、然レトモ絶嶮ノ所ニテ行難ク、殊ニ

ハ其辺神變不測多キ辺ナレハ、砂壳粒トイヘトモ山神ノ怒ニ触ルトテ取人ナシ、又黒尊トテ千丈ノ黒岩谷底ヨリ生ヌキタル有、奇絶言語ニ及ハス、其外イロくノ珍奇イヒ尽スヘカラス、此山中ニ一ヶ月二ヶ月モ有テ見巡ラハ面白キ事限リ有ヘカラス、サレトモ中々仙骨ヲ得サレハ叶ヒ難キ事ナリ、都テ天下ノ高山ハ役ノ小角（祝祝カ）ノ泰澄ナトノ開山多キニ、此霧島山ノミ仏者ノイマタ手ヲ付サル所ニシテ、只開山ハ伊諾（伊諾、伊拜丹カ）・伊冊ノ両神トヤイフヘキ誠ニ珍敷山ナリ、

一五二

山汐及火山考

安永年間、薩摩ノ桜島大ニ焼テ後、山上ヨリ大水溢レ出テ田地民家大ニ損セリ、所ノ人はヲ山汐トイフ、抑此桜島トイフハ海中ニ在テ禁ノ巡リ七里、山ノ色黒ク、一峯ニ聳テ比叡山ニツ計モ重ネタルコトクニ高シ、禁ノ巡リテ人家田地有之、富饒ノ所ナリ、其峯ノ焼タリシ事ハ希代ノ珍事ニテ、委敷事ハ別卷ニ記セリ、其燒漸ニ鎮リテ人々モ再ヒ活タル心地シテ悦合ル所ニ、或日マタ山ノ峯

震動シテ夥シ、スハヤ又焼上ルカト見ル程ニ、山ノ峯ヨリ雪ヲ解ルカコトキ物真逆様ニ落来ル、何事カトイフ程コソアレ、大水山ヲ砕キ石ヲ飛シ、樹木ヲ拔テマヘニ落ル、其水先ニ当ル所ハ人家田地ノ差別ナク、只一刻ノ間ニ大海へ突出セリ、サハカリノ嶮阻ナル高山ノ峯ヨリ海ヲ切落セルカコトキ大水、真逆様ニ落来ル事ナレハ、其勢ヒノ急ナル事タトヘンモノナシ、人馬トモニ逃ルニ暇ナク、睨ト見定メタル者モナシトカヤ、予モ其地ニ渡リシ時、其跡ヲ見タリシニ、其水筋ハ大ナル谷ト成、其側ノ田地ノ中或ハ小高キ岡ノ上ナトニモ大サニ丈三丈、或ハ五丈六丈ニモ及ヘル石ナカレ残レリ、カ、ル大道（石カ）ノ事ナレハ人力ニ動ス事モ能ハス、田畑ナトモサマタケラレナカラ其マ、捨置リ、是ヲ見ルニモ誠ニカ、ル大石ノ水ノ為ニ流レ下レル事、其時ノ水勢思ヒヤラレタリ、今モ桜島ノ小兒ノ唱フウタヲ聞ハ、島ノオダケルドロくノ鳴ルソ、村父ハヨニケ、山汐カ来ルト唱ヘリ、其時ノ恐シカリケン事、見ルカコトクナリ、

都テ高山大焼ノ後ハ、多クハ大水溢レ出ル事アル物ナリ、天明癸卯年信州浅間ガ岳大焼ノ時ノ洪水モ夥シカ

リシ事、ミナ人ノ知ル所ナリト云々、春ノヤ云、桜島
焼ノ記前卷仙良多言九冊目ニアリ、凶ハ別ニアリ、浅間ヶ岳
焼モ前卷五十九冊ニアリ云云、

一五二三

日本国中寺数ノ事(梵鐘鑄換調査二ノ丸贍写方)

- 一天台宗 千八百二十ヶ寺
- 一真言宗 一万千八ヶ寺
- 一禅宗 一万七ヶ寺
- 一遊行宗 六万七千六ヶ寺
- 一仏光宗 八千五百二十ヶ寺
- 一西本願寺宗 四万五千八ヶ寺
- 一東本願寺宗 八万百二十ヶ寺
- 一高田 七千五百二十ヶ寺
- 一法華宗 八万三千五百八十九ヶ寺
- 一大念仏宗 千八百二十ヶ寺
- 一浄土宗 十四万二十ヶ寺
- 一法相宗 五千三百二十ヶ寺
- 一律宗 九千八ヶ寺

合計数四十七万五百六十六ヶ寺

一ヶ月一寺錢三文ツ、一年分三十六文

一七ヶ年一寺六百三十六文宛ノ賦ニシテ十七ヶ年分

錢二十九万九千八百八十五貫八百二十四文

右年数ノ内閏月六ツ有之、賦ニシテ増分八千八百二十

三貫百十二文

二口ノ錢三十万八千八百八貫九百三十六文

右ハ、大坂天王寺伽藍修覆ニ付、日本国中諸寺ヨリ奇(密)

進被仰付候帳面寺数ノ由、

享保十九年寅五月ノ書付ヲ以写之也、

但、寄進ハ止ニ成候由、

薩藩例規雜集

二三

薩藩例規雜集二三

目錄

(以下十四行、本文より補)

琉球条令

琉球法令

琉球王謝恩使豊見城王子病死届書

琉球人登城道筋

琉球人登城・上野御宮參詣之節行列

朝鮮国王江被遣物三使以下江被下物

薩摩黄櫨蠟ノ由来

薩隅日琉球高惣

道之島一紙繪

大島一紙繪

薩隅日琉球高究総帳

薩隅日外城衆中屋敷総帳

薩隅日琉球凶田総

薩隅日本琉球并道之島御蔵入給地諸屋敷総高紙

一五二四

(卷之十四 八一五号文書に同じ、本文略)

一五二五

(卷之十四 八一六号文書に同じ、本文略)

一五二六

(卷之十四 八一七号文書に同じ、本文略)

一五二七

(卷之十四 八一八号文書に同じ、本文略)

一五二八

(卷之十四 八一九号文書に同じ、本文略)

一五二九

(卷之十四 八二〇号文書に同じ、本文略)

一五三〇

(卷之十四 八二一号文書に同じ、本文略)

一五三一

(卷之十四 八二二号文書に同じ、本文略)

一五三二

(卷之十四 八二三号文書に同じ、本文略)

一五三三

(卷之十四 八二四号文書に同じ、本文略)

一五三四

(卷之十四 八二五号文書に同じ、本文略)

一五三五

(卷之十四 八二六号文書に同じ、本文略)

一五二六

九月廿三日

御名

今度為來聘使自琉球國差渡候豊見城王子、國許へ到着仕候後不快罷在候得共、出立比合及遲滯候テハ不都合ニ付、

右之通、御中途海田市御仕出ニテ、十月十二日於江戶琉球人御掛御老中松平周防守様江被差出候事、

先達而御届申上候通九月朔日押テ発足仕、定例領分ノ内
向田迄召連、同所久見崎ヨリ乗船申付、私儀ハ陸路罷通

一五二七

申候儀ニ御座候、然処其比汐合悪敷、九月十六日迄久見

琉球人登 城道筋

崎出帆之都合無御座滯在罷在候内、右王子病氣追々差重

松平大隅守屋敷ヨリ將監橋、増上寺表門前、夫ヨリ通町、

リ死去仕候、右付而ハ、古來ヨリ使者ノ儀ハ国王一門之

芝口橋際ヨリ左江幸橋御門へ入、大隅守屋敷前脇、松平

家柄王子ノ内江申付差上候得共、隔遠海数月ヲ經使者勤

肥前守屋敷脇、松平大膳大夫屋敷脇前通、日比谷御門、

方等執行候程合ノ儀付而ハ、万々一旅中ヨリ病氣又ハ依

八代洲河岸、龍ノ口水野出羽守殿屋敷脇前、大手御門、

時宜何等故障ノ程合難計、左様ノ節差支無之タメ、往古

登 城、

ヨリノ規定ニテ從者一隊ノ内江王子ニ可成替身柄ノ者兼

御本丸ヨリ西丸へ登 城并退出道筋

テ王命ヲ伝、使節之規式共取整差渡候仕來ニ付而、此節

内桜田御門ヨリ水野越前守殿屋敷前通、西丸大手御門ヨ

モ為讚儀官差渡候宇地原親雲上事、国王血統之者ニ付正

リ登 城、退出ノ節同断、大手御門ヨリ青山山下野守殿屋

使ノ控為相心得、王命相伝使節ノ作法遣候付、直様宇地

敷前通、外桜田御門上杉彈正大弼屋敷前脇通、松平肥前

原親雲上事、豊見城王子ト相改万事ノ作法受継、今般ノ

守屋敷脇通、大隅守屋敷江立寄、夫ヨリ 御本丸登 城

使者無滯相動候儀、副使(感力)沢砥親方王命ノ旨ヲ以取扱相濟、

道筋之通、

則九月十七日久見崎出帆為仕候儀ニ御座候間、宜御聞通

紀伊殿・尾張殿へ罷越候道筋

聘式無滯相濟候様仕度奉存候、此段先以申上候、以上、

芝松平大隅守屋敷ヨリ赤羽根橋、土箸町、西久保八幡前、

天徳寺裏門前、相良彦岐守屋敷前通、御堀端江出、夫ヨリ虎御門江入、松平備前守屋敷前脇、井伊掃部頭屋敷後、永田馬場、松平出羽守屋敷脇前、紀伊守殿御屋敷脇通、井伊掃部頭中屋敷脇、喰違通、紀伊殿赤坂御屋敷江罷越、夫ヨリ御堀端通り、尾張殿へ罷越、市谷八幡前、夫ヨリ立戻、御堀端通、四谷御門江入、麴町通、半蔵御門外、右へ火消屋敷脇、御堀端通、松平河内守屋敷前脇通、西尾隠岐守屋敷前脇通、青山房次郎屋敷脇前、新橋出(室カ)愛宿下通、左江跡部大膳屋敷脇前、秋田信濃守屋敷脇前通、中川修理大夫中屋敷前脇、宇田川町、増上寺表門前通、將監橋、夫ヨリ芝大隅守屋敷、

御老中方・若年寄衆江罷越候道筋

芝松平大隅守屋敷ヨリ將監橋、増上寺表門前、夫ヨリ通町、芝口橋際ヨリ左江幸橋御門江入、大隅守屋敷前脇、松平肥前守屋敷脇、松平大膳大夫屋敷脇前通、日比谷御門、八代洲河岸、馬場先御門前ヨリ右江、大名小路、永井肥前守江罷越、夫ヨリ田沼玄蕃頭殿・松平和泉守殿・増山河内守江罷越、立戻、林肥後守江罷越、松平丹波守屋敷脇前通、松平伯耆守殿・大久保加賀守殿へ罷越、夫

ヨリ小普請方定小屋前酒井雅楽頭屋敷前通、水野出羽守殿へ罷越、和田倉御門へ入、土手通、小笠原相模守・堀大和守・松平周防守殿・森川内膳正・水野越前守へ罷越、夫ヨリ青山下野守殿・本多豊後守江罷越、外桜田御門上杉彈正大弼屋敷前松平大膳大夫屋敷脇通、夫ヨリ元之道筋芝大隅守屋敷、

一五二八

棒突

御口ノ者

御馬式疋

沓籠二荷

御目印

棒突

御口ノ者

御請笠

御堅傘

御旗竿一本

御鎧箱式荷

御旗箱一竿

御刀箱

御用櫃

御先走足輕

御先走足輕

御挾箱

白熊
御鍵

御馬印

御弓台

御小人頭

御挾箱

白熊
御鍵

中小姓

同

同

同

御腰物筒

御長刀

中小姓

同

同

同

御腰物筒

御挾箱

御茶籠筒

御蓑箱

御召
御馬

杓籠一荷

御挾箱

兩掛朱之

御挾箱式荷

御召替
御駕籠

御桐油箱

御用心馬一疋

又者押

又者

供鍵

兩掛杓籠

又者押

又者

供鍵

供具足箱

御供目付五人
御右筆式人

白熊摘毛
奧御小姓四人
奧御茶道式人

御

表方六人

御手鍵

御供夫式人

御茶弁当

御小人頭老人
御陸尺主取三人

御手鍵

御草履取式人

同小添者人
御陸尺拾式人

供挾箱

合羽籠

又者押

御側役

又者押

御納戸奉行 御小納戸頭殿 御小納戸 同

奥医師 同 同 御側御用人 行列直 御徒目付

御医師

御家老

新番

一五二九

琉球人登城・上野御宮參詣之節行列

足輕 足輕 同 同

留守居手廻召連 家老同 用人同

足輕 足輕 同 同

議衛正騎馬 (譜カ) 讚久山親雲上 中小姓 傘小人 跟伴

中小姓 衣家小人

鞭小人 中小姓

足輕 杵籠 合羽籠 同 同

鞭小人 中小姓

張旗小人 銅鑼小人 中小姓 銅角小人

張旗小人 両班小人 中小姓 銅角小人

喇叭フツバ小人 中小姓 哨呐ソウナ小人 鞭(鼓カ)小人

喇叭小人 中小姓 哨呐小人 鞭(鼓カ)小人

中小姓 鞭小人 虎旗コキ小人 中小姓 足輕 牌

中小姓 鞭小人 虎旗小人 中小姓 足輕 牌

小人 掌(輪カ)輪史騎馬 与那霸親雲上 中小姓 跟伴

小人 掌輪史、登城之節ハ此所、上野參詣之節ハ衆正之次、衆童子之前江相立 中小姓

傘小人二人 杓籠 合羽籠 同 足輕 同 同 同

衣家足輕 杓籠 同 足輕 同 同 同

同 同 馬廻 中小姓 用達

同 同 馬廻 涼傘リョウサン小人 輜正使 豊見城王子 中小姓 用達

替度使 中小姓 同 跟伴中 小姓 足輕 鐘

替度使 中小姓 同 跟伴中 小姓 足輕 龍刀

茶庫 牽(添カ)濟馬 杓籠 合羽籠 同 同 同 輜廻江相付候 供鎗

衣家 牽濟馬 杓籠 合羽籠 同 同 同 輜廻江相付候 供鎗

馬廻 中小姓 揮(押カ)足輕 同 同 同 中小姓

馬廻 同 足輕 副使乗物 揮(押カ)足輕 同 同 同 中小姓

同 同 跟伴 中小姓 同 中小姓 鐘 足輕

同 同 跟伴 中小姓 同 中小姓 傘 小人三人 衣家 足輕

(沢庵親方カ)沢紙親雲上

牽添馬 沓籠 合羽籠 同 同 乗物廻中小姓

中小姓 跟伴 傘

譜久村里子 足輕 沓籠 合羽籠

中小姓 小人 衣家

中小姓 跟伴 鑓

供鎗 讚議官乗物 小祿親雲上 跟伴 傘

樂童子騎馬 演(演力)元里子 同断 樂童子同 登川里子

中小姓 跟伴 衣家

同断 樂童子同 宇地原里子 同断 樂童子同

小人二人 中小姓

沓籠 合羽籠 同 樂正騎馬 伊舍堂親雲上

足輕 中小姓

富永里子 同断 樂童子同 小録(録力)里子 樂師騎馬

跟伴 傘 小人三人

中小姓 跟伴 傘

沓籠 合羽籠 同 樂童子騎馬

富山親雲上 足輕 沓籠 合羽籠 樂師

跟伴 衣家 足輕

中小姓 小人 衣家

騎馬 池城親雲上 同断 樂師騎馬 内間親雲上

同断 正使之使贊騎馬 誑谷山親雲上 同断

同断 樂師騎馬 具志川親雲上 同断 樂師騎馬

正使之使贊騎馬 真栄平親雲上 同断 副使之使贊

城間親雲上 同断 正使之使贊騎馬 与儀親雲上

中小姓

(騎馬力) 騎兵 与古田親雲上 同断 副使之使贊騎馬

中小姓

兵具之方

跟伴 傘

足輕 杓籠 合羽籠 正使之使贊騎馬

小波藏親雲上 同断 (物力) 者頭手廻召連 備鎗式拾本

兵具之方

小人 衣家

肝煎 同同同

合羽籠手廻召連 馬廻 同同同同同同

玉城親雲上 同断 正使之使贊騎馬 浦崎親雲上

肝煎 同同同

同 用人手廻召連 側役手廻召連 家老手廻召連 医
師同

足輕 足輕 同 同 同 同 小人

供挟箱 合羽籠 合羽籠

足輕 足輕 同 同 同 同 小人

同 同 同 同 新番 行列直 足輕

同 同 同 同 新番 行列直 足輕

同 同 同 同 新番 行列直 足輕

足輕 若党 若党 同 手鍵 挟箱

若党 川上五後右衛門 草履取 沓籠 合羽籠

若党 笠 挟箱

足輕 若党

若党

合羽籠 若党 比志鳥隼人 草履取 沓籠 合羽籠
若党 同 笠 挟箱

若党

若党

若党 同 手鍵 挟箱

同 同 供押 若党 島津十郎左衛門 草履 沓籠

若党 笠 挟箱

若党

足輕 同 同 步行士若党 草履取 手鍵

騎馬唐装束 跟伴小人

合羽籠 同 儀衛にいういらんのはるはいきん 正野原親雲上

跟伴小人

足輕 同 同 步行士若党 草履取 手鍵

步行士供人上同

笠

足輕 沓籠 合羽籠 同 同 同

衣家

步行士供人上同

歩行士供人上同

鞭琉球人
張旌琉球人

銅鑼琉球人
銅角

鞭琉球人
張旌琉球人

兩班琉球人
銅角

歩行士供人上同

歩行士供人上同

琉球人
喇叭琉球人

噴呐琉球人
鼓琉球人

琉球人
喇叭琉球人

噴呐琉球人
鼓琉球人

歩行士供人上同

歩行士供人上同

歩行士供人上同

足輕 同

鼓琉球人

虎旌琉球人

鼓琉球人

虎旌琉球人

歩行士供人上同

歩行士供人上同

足輕 同

同 歩行士供人上同

騎馬唐裝束

跟伴小人 笠

圍師 真喜屋親雲上

足輕 沓籠

跟伴小人 衣家

同 歩行士供人上同

足輕 歩行士

牌琉球人

合羽籠 同

牌琉球人

足輕 歩行士

歩行士供人上同

騎馬唐裝束

跟伴小人 笠

宮里親雲上

跟伴足輕 沓籠 合羽籠 同

跟伴小人 衣家

歩行士供人上同

足輕同同同同同

馬廻士歩行士同同

琉球人小人 唐裝束

足輕

涼傘

轎 与那城王子

琉球人小人

足輕同同同同同

馬廻士歩行士同同

小人同同

足輕 鑓 琉球人

贊渡使同同同同

跟伴

足輕 笠 琉球人

賛渡使同同同 跟伴

小人同同 足輕 龍刀とんろう琉球人琉球人

茶庫ちあぐら琉球人琉球人

引馬一疋 沓籠 合羽籠同同同同

衣家いけ琉球人琉球人

轎廻こま參候馬廻士步行士供之者供之者鑓挟箱乘馬沓籠持合羽

轎廻參候馬廻士步行士供之者供之者鑓挟箱乘馬沓籠持合羽

足輕同同同同 步行士供人上同

籠持 供押 足輕

牌はい琉球人琉球人

籠持 供押 足輕

牌はい琉球人琉球人

足輕同同同同 步行士供人上同

步行士供人上同

騎馬唐裝束書翰ヲ掛 跟伴小人 笠

掌翰史つやんあんし 砂辺親雲上すなへはいみん

跟伴小人 衣家

足輕 沓籠

步行士供人上同

足輕同同同同同同 馬廻士 步行士同

合羽籠 同 足輕

涼傘りやうさん琉球人琉球人

步行士 步行士

足輕同同同同同同 馬廻士 步行士同

小人同同 足輕

唐裝束

賛渡使同同同同

跟伴

轎 金武王子

足輕

賛渡使同同同同

跟伴

小人同同 足輕

鎗やん琉球人琉球人

茶庫ちあぐら琉球人琉球人

笠かさ琉球人琉球人

引馬一疋 沓籠 合羽籠同同同

龍刀りんと琉球人琉球人

衣家いけ琉球人琉球人

轎廻參候馬廻士步行士供之者供之者鑓挟箱乘馬沓籠持

同同

轎廻参候馬廻士歩行士供之者鍵扶箱乘馬杵籠持

合羽籠持供押足輕 足輕 同同同 歩行士 同同同

乗物唐装束
副使知念親方ふすろちねんおやうた

合羽籠持供押足輕 足輕 同同同 歩行士 同同同

鎗つやん琉球人 足輕

跟伴 同

笠かさ琉球人 引馬一疋 杵籠 合羽籠同同

跟伴 同

衣家いけ琉球人 足輕

乗物廻参候歩行士供之者鍵 足輕同同同歩行士同同同

乗物唐装束

足輕 副使勝連親方

乗物廻参候歩行士供之者鍵 足輕同同同歩行士同同同

鎗つやん琉球人 足輕

跟伴 同

笠かさ琉球人 引馬一疋 杵籠 合羽籠同同

跟伴 同

衣家いけ琉球人 足輕

乗物廻参候歩行士供之者鍵 騎馬唐装束 跟伴

賛議官さんぎいん 南風原親雲上なまばらはいきん 跟伴

乗物廻参候歩行士供之者鍵 跟伴

歩行士若党 草履取手鍵

鎗 歩行士供人上同

小人 笠 足輕 杵籠 合羽籠 賛議官さんぎいん 喜瀬親雲上きせはいきん 跟伴

小人 笠 足輕 杵籠 合羽籠 賛議官さんぎいん 喜瀬親雲上きせはいきん 跟伴

衣家 歩行士供人上同

鎗琉球人 歩行士供人上同

小人 騎馬唐装束 跟伴

小人 笠 足輕 杵籠 合羽籠同 楽正がくちゆう 玉城親雲上たまぎすく 跟伴

跟伴 笠 足輕 杵籠 合羽籠同 楽正がくちゆう 玉城親雲上たまぎすく 跟伴

小人 笠 足輕 杵籠 合羽籠同 楽正がくちゆう 玉城親雲上たまぎすく 跟伴

衣家 歩行士供人上同

笠 歩行士供人上同

小人 騎馬 足輕 跟伴

跟伴 足輕 沓籠 合羽籠 樂童子やっどんつうはまかハ浜川里之子 小人

小人 足輕 跟伴

衣家 歩行士供人上同

歩行士供人上同笠

笠 騎馬 足輕 跟伴

沓籠 合羽籠 同 樂童子 喜屋武里之子 小人

衣家 足輕 跟伴

歩行士供人上同衣家

歩行士供人上同笠

騎馬 足輕 跟伴

合羽籠 樂童子 保榮茂里之子 小人 合羽籠 同

足輕 跟伴

歩行士供人上同衣家

歩行士供人上同笠

騎馬 足輕 跟伴

樂童子やっどんつう 稻嶺里之子 小人 沓籠 合羽籠 樂童子

足輕 跟伴

歩行士供人上同衣家

歩行士供人上同笠 歩行士供人上同笠

騎馬 足輕 跟伴 騎馬 足輕 跟伴

祢霸里之子 小人 合羽籠同樂童子手登根里之子小人

足輕 跟伴 足輕 跟伴

歩行士供人上同衣家 歩行士供人上同衣家

歩行士供人上同笠

騎馬 足輕 跟伴

合羽籠 樂童子 伊野波里之子 小人 合羽籠 同

足輕 跟伴

歩行士供人上同衣家

歩行士供人上同笠 歩行士供人上同笠

騎馬 足輕 跟伴 騎馬 足輕 跟伴

樂童子 久志里之子 小人 沓籠 合羽籠 使贊高嶺親雲上

足輕 跟伴 跟伴

歩行士供人上同衣家 歩行士供人上同

笠 歩行士供人上同笠

小人 騎馬 跟伴 小人

合羽籠 同 使贊 渡具知親雲上 合羽籠

足輕

跟伴 足輕

衣家 歩行士供人上同 衣家

歩行士供人上同 笠

騎馬 跟伴 小人 騎馬跟伴 小人

使賛 安里親雲上 合羽籠 同 使賛 當間親雲上

跟伴 足輕 跟伴 足輕

歩行士供人上同 衣家 歩行士供人上同

笠 歩行士供人上同 笠

騎馬 跟伴 小人

沓籠 合羽籠 使賛 森山親雲上 合羽籠

跟伴 足輕

衣家 歩行士供人上同 衣家

歩行士供人上同 笠

騎馬 跟伴 小人

同 使賛 運天親雲上 沓籠 合羽籠 楽師

跟伴 足輕

歩行士供人上同 衣家

歩行士供人上同 笠 歩行士供人上同

騎馬 跟伴 小人 騎馬 跟伴 小人

伊江大城親雲上 合羽籠 同 楽師 本部親雲上

跟伴 足(輕力) 跟伴 足輕

歩行士供人上同 衣家 歩行士供人上同

笠 歩行士供人上同 笠

騎馬 跟伴 小人

合羽籠 楽師 安慶田親雲上 合羽籠 同 楽師

跟伴 足輕

衣家 歩行士供人上同 衣家

歩行士供人上同 笠 歩行士供人上同

騎馬 跟伴 小人 騎馬

伊礼親雲上 沓籠 合羽籠 使賛 鳥袋親雲上

跟伴 足輕

歩行士供人上同 衣家 歩行士供人上同

笠 歩行士供人上同 笠

小人 騎馬 跟伴 小人

合羽籠 同 使賛 伊佐親雲上 沓籠 合羽籠

足輕 跟伴 足輕

衣家 歩行士供人上同 衣家

歩行士供人上同 笠 足輕 若党

騎馬 跟伴 小人

樂師 永山親雲上

合羽籠 同

若党 村田為右衛門
物頭 若党

跟伴 足輕

步行士供人上同 衣家

足輕 若党

足輕 同同同
小頭

同 手鍵 挾箱

杏籠 合羽籠

備鍵二拾本

笠 草履取 挾箱

足輕 同同同

若党

手鍵

手替足輕二拾人

若党同

挾箱

若党 中原伊兵衛
物頭

草履取 杏籠 合羽籠

若党

挾箱

若党

笠

若党 手鍵

蒲生八之丞
騎馬 草履取

合羽籠 騎馬供人上同

中村早太

伊地知孫右衛門 肥後八右衛門
騎馬供人上同 騎馬供人上同

若党 挾箱

山本吉左衛門 伊集院為右衛門 仁礼正膳五 野村与右衛門 伊東孫七
騎馬供人上同 騎馬供人上同 騎馬供人上同 騎馬供人上同 騎馬

若党

若党同同手鍵挾箱

松崎藏右衛門 相良清兵衛
供人上同 騎馬供人上同 騎馬供人上同

若党 島津李 草履取

若党同 笠 挾箱

若党

若党同同

若党同同 手鍵 挾箱

杏籠 合羽籠同同供押

肝付主殿 草履取

若党同同 笠 挾箱

若党同同

供押 若党同 葉箱

蓑箱 杏籠 合羽籠同同同

乘物 醫師 草履取 合羽籠

供押 若党同 挾箱

足輕同同 足輕同同同 小人

乗物
醫師供人上同 挟箱同同同同同同同同同同

足輕同同 足輕同同同 小人

同同同同 若党 手鐘 若党 手鐘
土草履取 合羽籠 土 若党 手鐘
若党 挟箱 草履取 挟箱 合羽籠 士

同同同同 若党 手鐘 若党 手鐘
土草履取 合羽籠 土 若党 手鐘
若党 挟箱 草履取 挟箱 合羽籠 士

供人上同 士供人上同 士供人上同 士供人上同

供人上同 士供人上同 士供人上同 士供人上同

釣ワク 同同

足輕 同

用心乗物 同同同

足輕 同

一五三〇

表書二

〔かな付無之〕

〔朝鮮国王江被遣物、三使以下江被下物并太刀・長刀打候鍛冶之名、屏風絵様筆者之書付〕

朝鮮国王江被遣物

鎧 二十副

太刀 二十把

長刀 二十条

厨子 一座金副

屏風 二十対

被下物

銀五百枚 三使江
充

綿三百把

銀式百枚充 上々官三人江

同五拾枚充 上判事三人江

同三拾枚

学士一人江

同五百枚

上官

次官中江

小童

同千枚

中官
中江
下官

同五拾枚充

馬芸之者二人江

曲乘之時罷出候

上々官三人

判事一人

軍官三人

小童三人

理馬一人
江

同百枚

通事三人
使令六人
馬夫六人

太刀二十腰打候鍛冶

近江国下坂肥後守康繼之孫

武藏国

下坂康繼

山城国粟田口国綱之孫

同
法城寺国正

先祖相模国貞宗之弟子

同
橘永弘

美濃国関金重之孫

同
源国永

山城国藤原来金道之孫

山城国
藤原来金道

摂津国忠綱之孫

摂津国
忠綱

摂津国兼道之孫

同
兼道

加賀国家忠之孫

加賀国
藤原国平

薩摩国康国之孫

薩摩国
康国

肥前国忠吉之孫

肥前国
藤原忠吉

同断

同
藤原政広

同断

同
藤原行広

因幡国忠国之孫

因幡国
忠国

先祖豊後国河内守元行之弟子

豊前国
紀政平

美濃国志津兼氏之孫

武藏国
清平

越中国清光之孫

越中国
清光

豊後国忠行之孫

豊後国
忠行

同行恒之孫

豊後国
行恒

山城国信国之孫

筑前国
源重包

先祖石当是一之弟子

同
藤原守次

長刀二十振打候鍛冶

近江国下坂肥後守康繼之孫 武藏国 下坂康繼

山城国粟田口国綱之孫 同 法城寺国正

先祖相模国貞宗之弟子 同 橘永弘

美濃国関金重之孫 同 源国永

山城国藤原采金道之孫 山城国 藤原采金道

摂津国忠綱之孫 摂津国 忠綱

同兼道之孫 同 兼道

加賀国家忠之孫 加賀国 藤原国平

薩摩国康国之孫 薩摩国 康国

肥前国忠吉之孫 肥前国 藤原忠吉

同断 同 藤原政広

同断 同 藤原行広

因幡国忠国之孫 因幡国 忠国

先祖豊後国河内守元行弟子 豊前国 紀政平

美濃国志津兼氏之孫 武藏国 清平

越中国清光之孫 越中国 清光

安芸国輝広之孫 安芸国 輝広

先祖山城国国広之弟子 陸奥国 国虎

先祖摂津国和泉守国定之弟子 同 貞則

備中国青江之孫 備中国 国重

御屏風二十双絵様筆者

聖徳

一 孝徳天皇白雉ノ図 一 双探信
一 文武天皇慶雲ノ図

孝徳・文武ハ我朝ニテ文武ノ聖徳ヲソナヘ玉ヘシ御

事也、

忠孝

一 小松教訓 一 双春湖
一 楠木遺誠

小松ハ忠ニシテ孝アリ、楠木ハ忠ニシテ慈アリ、二

ツノ徳ヲ兼シ事、異朝ニモ類スクナキ歟、

詩文

一 大井川三船 カ、ル多才多芸ノ人ハ異朝ニモマレナリ
一 安楽寺長篇 カ、ル大作ハ異朝ニモタメシナシ、名譽ノ事也

才女 一 双養朴

一 紫式部 一 双洞春
一 清少納言

右二人ハ梨壺五人ノ歌仙ノ中ニモコトニスグレテ、

倭歌ノミチノミニモアラス、漢学ニタケシ人々也、

礼楽

一朝觀行幸 一 双内蔵允

同

一 枳實

一 双同断

同

一 唐楽
やまと楽

一 双永叔

右礼楽ノ事ヲバ異朝ニモウツシ見セマホシキ事ノ第

一也、

小勢ニ而謀ヲ以多クノ
軍兵ヲ谷ヘ落ス

一 クリカラヲトシ

一 双探雪

サガシキ山ノ上ヨリ多クノ軍兵谷々ヘヲチカサナリ

テウスル也、

馬ニテ海ヲ渡

一 藤戸渡

一 双永叔

海ヲ馬ニテ渡シ事、異朝ニ例ナシ、異国人見テ大キ

ニオドロクベキ也、

射方

一 為朝大箭

一 双柳雪

異朝ニテ我国ノ弓矢ヲ万国ノ中ニスグレテ大キナル

ヨシ申伝ル歟、為朝ノ大弓矢ハ我国ニモ双ナケレバ

古今一人ト申ベシ、

力士

一 朝比奈三郎門ヲ破
泉小次郎船ヲアグ

一 双探信

右ハ我朝ノ力士也、

勇女

一 巴
一 板額

一 双養朴

右ハ我朝ノ勇女也、

業

一 鵜飼
一 狼マハシ

一 双梅雲

コレハ朝鮮人先年見テ、コトノ外ニ不思議カリシ事

也、

風景

一 富士
一 三保

一 双養朴

富士ハ我朝ノ名山也、

同

一 吉野
一 竜田

一 双洞春

異国ニ桜ト楓トハナキ物也、サレバカノ国々ニテハ

賞翫スベシ、

同

一 住吉
一 玉津島

一 双寿碩

同

一 松島

一 双探雪

日本

一 花鳥

一 双休碩

風俗

一 祇園会

一 双春笑

射御

一 犬追物

一 双如川

一五三一

(薩藩例規雜集卷之一 七号文書に同じ、本文略)

一五三二

(薩藩例規雜集卷之一 八号文書に同じ、本文略)

一五三三

(薩藩例規雜集卷之一 九号文書に同じ、本文略)

一五三四

薩隅日琉球(高松總力)高惣

享保十三戊申年総合高八拾六万七千二拾八石六斗七升三

合二勺八才

内、高七十式万四千四拾壹石三斗三升式合式勺五才

高五万七千七百五拾六石六斗四升九才

道之島

(德之島力)
大島・喜界・徳島・沖永良
部諸島之総唱

高九万四千式百三拾石七斗九勺四才

本琉球

右内訳

琉球・道之島

一 高三拾三万五千五百八拾六石四斗八升二合四勺八才

諸御蔵入

内、高式拾七万八千三百三十五石一斗九升三合六勺

御城内并山野高达現地

高五百九拾壹石九斗式升六合八勺六才

諸屋敷方

高九百拾九石壹升式合三勺壹才

塩浜方

内、六石六斗式升式合八勺六才

道之島方

高五万七千七百四拾石三斗四升九合六勺九才

(道之島力)
道之島方

一 高五拾式万七千四百八拾七石九斗九合式勺壹才

諸給地

一門家及七門閥家領地又八
士分家祿社寺高之総唱

内、高四拾万三千七百四拾五石八斗五升八合九勺式才

薩隅日三州

山野高达現地

高式万六千三百三拾壹石九斗九合七才 仕明持留

開墾地ヲ云フ、此外享保以來ノ開墾地數万石ニ升レリ

余地込

高式千九百七石四斗壹升壹合七勺七才 諸屋敷方

高式百七拾貳石貳升八合五勺壹才 塩浜方

高九万四千三百三拾石七斗九勺四才 中山王領

一高式百四石四斗貳升四勺五才 万御用地

内、九石五斗壹升五合壹勺六才 道之島

一高七千七百四拾九石八斗六升壹合壹勺四才 諸屋敷御免地

内、壹斗五升貳合三勺八才 道之島

琉球・道之島

一門屋敷三万三千八百九拾七ヶ所

内、門壹万三千百七拾三

屋敷貳万七百貳拾四

内、門屋敷貳万貳千四百貳拾九 諸御藏入

内、門五千百六ツ

屋敷四千七百六拾貳

屋敷壹万貳千五百六拾壹 琉球・道之島ノ分

門屋敷壹万四千四百六拾八 諸給地

内、門八千六拾七

屋敷三千四百壹ツ

一男女四拾五万八千八百四拾九人

内、男貳拾三万五千貳百拾壹人

女貳拾壹万六千六百三拾八人

内、男女拾九万三千九百拾四人

内、男拾万四千貳百七拾人

内、三万八拾六人

女八万九千三百四拾四人

内、三万千貳百拾八人

男女拾貳万八千貳百九拾三人

内、男七万貳千九百五拾六人

女五万五千三百三拾七人

男女拾貳万九千六百四拾貳人

内、男五万七千六百八拾五人

女七万九千九百五拾七人

一牛馬拾貳万貳千九百八拾四疋

内、馬九万四千貳拾六疋

牛貳万八千九百五拾八疋

薩隅日琉球

諸御藏入

道之島分

右同所

諸給地

中山王領

薩隅日琉球

内、牛馬四万八千七百八疋

諸給地

男八拾五年ヨリ五拾九年、女八拾八年ヨリ四拾年ヲ限

内、馬四万五千五疋

リ年々調査シタルモノナリ、而シテ此ノ人員、巷名一

牛三千七百三疋

年幾回仕役スルアリ、之ヲ米穀又ハ代価ヲ蔵入又ハ所

牛馬貳万六百七拾五疋

中山王領

有主ニ収ムルコト、セリ、則租庸調ノ制ニ則リタル法

内、馬八千三百四拾八疋

ナリキ、

牛壹万貳千三百貳拾七疋

牛馬五万三千六百壹疋

諸御蔵入

一五三五

内、馬四万六百七拾三疋

道之島一紙繪

牛壹万貳千九百貳拾八疋

万治二己亥年檢地竿七千三百三拾八丁六反八畝貳拾八步

外

惣合田畠屋敷八千貳百七拾八丁五反八畝拾七步

一男女五万六千四百七拾四人

町・浜・寺門前

右同拾四万七百九拾三俵壹斗八升七合八勺七才

内、男三万五千五百九拾三人

惣合粃大豆拾五万五千貳百五拾俵壹升八合

女貳万四千八百八拾壹人

右同三万六千九百三拾八石四斗三升八合八勺七才

一牛馬四千七百三拾七疋

右同

惣合高五万七千七百五拾六石六斗四升九才

内、馬四千五百貳拾九疋

内、九石五斗壹升五合壹勺六才

御蔵地并仮屋敷

牛貳百八疋

六石六斗貳升貳合八勺六才

塩浜

一中宿五人寄留人ヲ云フ

(桑カ)一米貳千貳百四拾四本

以上、男女ノ人員及ヒ牛馬ノ数ハ耕地ニ応シ、現ニ耕

一棕杓九百七拾五本

耘ニ従事スル人員ヲ計校シタル者ニシテ、用夫ト唱へ、

一黒ツク四百九拾四本

一大カラ竹五百五本

一小カラ竹四拾束

惣合屋敷巻万式千五百六拾巻

惣合男女六万式千三百四人

内、男三万八拾六人

女三万千式百拾八人

惣合牛馬巻万四千三百八拾五疋

内、牛九千八百四拾巻疋

馬四千五百四拾四疋

惣合荒田畠百三拾七町三反九畝廿三歩

惣合船百式拾六艘

内、五枚帆四艘、四枚帆巻艘、三枚帆八艘、

クリ船百拾三艘、

惣合立網(網カ)四拾七帖

一五三六

大島一紙総七間切

万治二己亥年竿千九百四拾三町五反八畝式拾六歩

都合田畠屋敷式千三百五拾六町三反八畝拾七歩

内、唐芋地・芭蕉地・宝雀地(宝の地カ)宝雀詳ナラス
誤字ナラン

上木上木ハ植木
ノ俗唱

右同四万三千五百三拾八俵式斗六升七合

都合粗大豆五万三百拾四俵式斗六升六合

内書同断

右同四反六畝

都合塩浜五反六畝式拾八歩

右同巻万四千五百式拾石巻斗式升九勺五才

都合高巻万六千七百七十八石式斗九合五勺九才

内、式才過、

一桑式千式百四拾四本

一棕栢八百五拾六本

一黒次四百九拾四本

一大唐竹五百五本

一小唐竹四拾束

一屋敷四千三百三拾八

合男女式万三千六百五人

内、男巻万七千七百式拾巻人

女巻万八千八百八拾四人

合牛馬三千三百六拾五疋

内、牛貳千四百拾九疋

馬千貳百拾六疋

合荒田畠貳拾四町壹反三畝貳拾三歩

右高ノ内

高三千四百拾三石九斗五升壹合四勺三才

高三千貳百五石八斗九升四勺九才

高貳千九百九拾六石三斗九升壹合四勺四才

高貳千貳百三拾九石八斗壹升三合三勺三才
(高千貳百拾六石三斗七升七合壹勺四才脱力)

住用間切

高貳千六百五石四斗五升五合貳勺六才

西間切

高千八百九拾三石七斗七合六勺三才

古見間切

喜界島六間切

万治二己亥年竿千四百三拾五町三反五畝貳歩

都合田畠屋敷千六百七拾町壹反九畝貳拾七歩

右同三万四千四百六拾貳俵壹斗六升六合

都合粗大豆三万貳千五百九俵壹斗八升四合

右同壹万四百八拾七石四斗九升壹合四勺三才

都合壹万八百三拾六石五斗八合五勺七才
(高脱力)

一棕栢木百七本

合男女八千八百五拾八人

内、男四千四百拾壹人

女四千四百四拾七人

合牛馬貳千五百四疋

内、牛千四百三拾貳疋

馬千七拾貳疋

合荒田畠貳拾九町三反七畝貳拾四歩

右高之内

高千八百九拾三石四斗八升七合六勺貳才

荒木間切

高千五百五拾石壹斗七合壹勺四才
(升力)

伊砂間切

高千七百七拾六石貳斗五升五合貳勺四才

東間切

高千六百九拾石貳斗四升壹合九勺

志戸桶間切

高千八百六拾九石壹斗六升四合七勺六才

西目間切

高貳千五拾七石三斗四升壹合九勺壹才

湾間切

徳之島三間切

万治二己亥年竿貳千六拾三町八反七畝貳拾八歩

都合田畠屋敷貳千百拾四町壹反拾六歩

右同四万九拾七俵貳斗貳合四勺六才

都合粳大豆四万五千九百五拾五俵(管升脱カ)斗六合

右同粳万三千六百九拾九石壹斗九升才合八勺

外、式勺不足

都合高粳万五千三百拾八石四斗四升三合八勺才

合男女粳万七千四百式拾三人

内、男八千七百拾壹人

女八千七百拾式人

合牛馬五千七百九拾三疋

内、牛三千八百九拾三疋

馬千九百疋

合荒田畠七拾壹町八反七畝拾式步

右之内

高五千七百石三斗八升九勺五才

東間切

高五千式百四拾六石壹斗七升七合才勺四才

西目間切

高四千三百七拾壹石八斗八升五合七勺才

(面南和カ)
西南利間切

永良部島無間切

万治二亥年竿千五百五拾七町式反六畝拾步

都合田畠屋敷千六百九拾七町八反才畝拾壹步

右同粳万七千四百八拾六俵才斗五升五合才勺才勺才

都合粳大豆壹万九千式百三拾俵才斗五升五合

右同五千八百式拾八石八斗壹升四合五勺才

都合高六千四百拾石式斗四升式合八勺八才

合男女粳万八拾七人

内、男四千九百八拾九人

女五千九拾八人

合牛馬式千八拾五疋

内、牛五千九拾八疋

馬三百五疋

合船数八拾壹艘

内、五枚帆三艘・四枚帆壹艘・三枚帆七艘・クリ船

七拾艘、

与論島

万治二己亥年竿三百三拾八町六反式拾式步

都合田畠屋敷四百四拾町八畝六步

右同七千式百八俵九升七合才勺七才

都合粳大豆七千式百三拾九俵式斗四升七合

右同式千四百式石七斗五升九合壹勺八才

都合高式千四百拾三石式斗三升五合式勺四才

合男女式千三百三拾壹人

内、男千式百五拾四人

女千七拾七人

合牛馬六百三拾八(定脱カ)

内、牛五百八拾七疋

馬五拾壹疋

合船(數脱カ)四拾五艘

内、五枚帆壹艘・三枚帆壹艘・刳船四拾三艘、

合立網三帖

一五三七

薩隅日琉球高究総帳

一都合高八拾六万七千式拾七石五斗六升七合九勺八才、

島津家之所有高八七拾七万八百石ナルモ、内実ハ書之

如ク八万九千余ニ増額セシノ計算ナリ、調査ハ享保十

二三年頃ニシテ、其後各所開墾ニ罹ル者数万石之水陸

田アリ、中ニモ天保ノ中頃ヨリ安政四五年頃ニ至ルマ

テ開拓セシモノ最モ多ク、合計スレハ凡ソ百式拾余万

石ニ及ヒ、或ハ各島砂糖ノ産額年々三千万斤ニ及ヒタ

リ、故ニ之ヲ現穀ニ換算スルトキハ歳入ノ額増加セシ

ヲ知ル可キナリ、

外ニ、壹石壹斗五合三勺(私脱カ)ハ高頭ヨリ不足、右訳過不足

付ノ事ニ付、高員數ヨリ過上、

内、增高拾壹万九千八百式拾五石五斗三升壹合七勺六

才

高三拾万八千七百六拾式石六斗九升七合三勺五才

薩摩国

内、高七石八升三合三勺三才黒島大山野ニテ候処、従前ノ檢地帳無之、此節相込候、大山野地ノ數ナリ

地トハ切替

内、增高三万七千九百九拾三石三斗五升壹合七勺六才

高式拾五万九千三百四拾五石四斗四升式合式勺八才

大隅国

内、增高五万三千五拾四石八斗五合三勺四才

高拾五万式千九百三拾式石八斗七合三勺式才

日向国諸県郡

内、增高式万六百拾三石四斗式合三勺四才(升カ)

高拾四万五千九百八拾七石三斗四升壹合三才 琉球

内、高五万七千七百五拾六石六斗四升九才

道之島御蔵入

内、增高四千八百拾七石五斗三升贰合六勺五才

万治二年以来之增高

高九万四千貳百三拾石七斗九勺四才 本琉球

增高三千三百四拾六石七斗九升九合六勺七才

薩隅日高増減一紙目録(総脱之)

薩州

一增高四千三百九拾四石八斗三升壹合六勺六才 帖佐与

一損高貳千八百四拾五石四斗八升八合七勺壹才 右同

内、千四百四石六斗三升六合貳勺六才 諸御蔵入

差引

增高千五百四拾九石三斗四升貳合九勺五才

一增高千五百五拾四石三斗四升七合壹勺五才 新田

一增高百四拾壹石三斗貳升八合五勺五才 御内用右同

一增高七拾壹石七斗九合七勺壹才 諸給地

三口

合增高千七百六拾七石三斗八升五合四勺壹才

一增高三千八百五石七斗三升四合貳勺六才 持留

内、貳千七百四拾壹石六斗三升四合四才

千六百四石壹斗貳合貳才(拾力) 代銀上納申請高(拾下) 通唱

一損高七百四拾石六斗九升四合壹勺壹才

損高并位劣二付引捨り

差引

增高三千六拾五石四升壹合五才(勺力)

惣差引

增高六千三百八拾壹石七斗六升八合五勺壹才

外二、下り高四百三拾八石九斗四升貳合四勺七才

汰足

損高六石五斗六升自分任明並田島成
二付引捨り

隅州

一增高四千貳百五拾六石四斗壹升九合壹勺壹才

帖佐与

一損高五千拾石八斗壹升壹合六勺

右同

内、千九百四拾貳拾貳石六斗八升九合七才 諸御蔵入(四拾貳石力)

差引

引入高七百五拾四石三斗九升貳合五勺六才

一增高八百五拾六石八斗五升四合七勺八才 新田

一增高百三拾八石八斗四升三合九勺六才 御内用右同

一增高四百五拾石七斗八升七合六勺五才 諸給地

三口

合增高千四百四拾六石四斗八升六合三勺九才

一增高三千四拾七石五升五合八勺六才 持留

内、千九百六拾五石九斗六升四合五勺壹才

給分高役職ニ依リテ地所ヲ給シタル者アリ、之ヲ総唱ス

千八拾壹石九升壹合三勺五才 代銀上納申受高

一持留高千五百六拾壹石五斗壹升壹合壹勺壹才

損高并位劣ニ付引捨

差引

增高千四百八拾五石五斗四升四合七勺五才

惣差引

增高貳千百七拾七石六斗三升八合五勺八才

外ニ、下り高五百貳拾貳石九斗 汰足

高七拾石貳斗八升

自分溝損并田畠成ニ付引捨

日州

一增高四千四百四拾貳石七斗壹升九合五勺五才 帖佐与

一損高七千八百貳石五斗壹升八合三勺五才 右同

内、貳千六百貳拾七石壹斗四合貳勺九才 諸御藏入

差引

引入高三千六百五拾九石七斗九升八合八才(勺九)

一增高百三拾石八升貳勺六才 新田

一增高三拾九石五斗七升六合壹勺壹才 御内用右同

一增高貳百三拾四石三斗七升壹勺七才 諸給地

三口

合增高四百四石貳升六合貳勺四才

一增高千八百拾石貳升七合六勺三才 持留

内、千貳百六拾九石九斗六升壹合貳勺七才 給分高

五百四拾石六升六合三勺六才 代銀上納申受高

一持留高千四百八拾五石壹斗三升八合六勺九才

損高并位劣ニ付引捨

差引

增(高脱カ)三百貳拾四石八斗八升八合九勺四才

惣差引

引入高貳千九百三拾石八斗八升三合三勺八才

外二、下り高四百八石貳斗八升貳合八勺 汰足

合增高壹万貳千七百九拾三石九斗七升三勺貳才

帖佐与

合損高壹万五千六百五拾八石八斗壹升八合七勺三才

右同

内、五千九百七拾四石四斗貳升九合六勺貳才

諸御藏入

差引

引入高貳千八百六拾四石八斗四升八合四勺壹才

合增高貳千五百四拾壹石貳斗八升貳合壹勺九才 新田

合增高三百拾九石七斗四升八合六勺貳才 御内用右同

合增高七百五拾六石八斗七合五勺三才 諸給地

三口

合增高三千六百拾七石八斗九升八合三勺四才

合增高八千六百貳石八斗壹升七合七勺五才 持留

内、五千九百七拾七石五斗五升九合八勺貳才

給分高

貳千六百八拾五石貳斗五升七合九勺三才

代銀上納申受高

合持留高三千七百八拾七石三斗四升三合九勺壹才

損高并位劣二付引捨

惣差引

增高五千六百貳拾八石五斗貳升三合七勺七才

外二、下り高千三百七拾石壹斗貳升五合貳勺七才

汰足

損高七拾六石八斗四升

自分溝損并田畠成二付引捨

一五三八

薩隅日外城衆中屋敷總帳

一惣合屋敷六百六拾七町四畝拾五步

薩州

内、三百五拾四町五反四畝拾五步

衆中郷士ノ卷名六千五百六拾八人
以下皆同シ

貳反五畝

御料理役五人

拾貳町三反八畝貳拾八步

諸座付藩士庁各局則チ兵具方・廳方・納戸方
數寄屋方等ノ局々ニ付屬士ノ総唱ナリ貳百拾八人

外二、貳反此所虫付屋地・御番所・御藏地・役屋敷・

余地等有之、略ス、

一 吉田 衆中百五人
 (座付四人)
 (座付七人カ)

一指宿 衆中貳百八拾人
 座付四人

一 穎娃 衆中貳百四拾六人
 座付五人

一 加世田 衆中三百六拾六人
 座付五人

一 坊泊 衆中拾八人

一 阿多 衆中百四拾人
 座付七人

一 伊集院 衆中百六拾三人・苗代川
 役人四人・座付七拾五人

一 市来 衆中貳百九人・御料理
 役五人・座付拾貳人

一 郡山 衆中七拾貳人
 座付拾三人

一 百次 衆中五拾壹人

一 高江 衆中七拾五人

一 東郷 衆中貳百拾五人

川内
一 高城 衆中百八拾三人

一 飯島 衆中三百三拾七人

一 長島 衆中百八拾九人

一 高尾野 衆中貳百四拾四人

一 山野 衆中八拾四人

一 羽月 衆中百拾三人

一 谷山 衆中貳百拾四人
 (座付貳拾四人カ)

一 山川 衆中六拾四人
 座付ナシ

一 川辺 衆中百七拾四人

一 山田 衆中五拾九人

一 久志秋目 衆中四拾人

一 田布施 衆中百拾三人

一 伊作 衆中貳百五拾貳人
 (座付拾三人カ)

一 串木野 衆中百五拾三人
 (座付拾六人カ)

一 隈之城 衆中百八拾人

一 中郷 衆中虫付
 不知

一 樋脇 衆中百七拾七人

一 水引 衆中百八人

一 阿久根 衆中百五拾六人
 座付拾五人

一 野田 衆中百七拾人

一 出水 衆中九百拾三人
 座付壹人

一 大口 衆中三百三拾人

一 鶴田 衆中七拾壹人

川内
一 山崎 衆中四拾六人
 (座付三人脱カ)

一 山田 衆中七拾三人

合外城三拾八ヶ所

外二、私領拾四ヶ所

喜入 日置 平佐 佐司 加治木

知覽 吉利 入来 宮之城 種子島

鹿籠 永吉 黒木 蘭牟田入敷虫付不知

惣合屋敷四百三拾貳町貳反四歩
内、貳百七拾六町六反八畝五歩

衆中四千九百八拾四人

壹反五畝 隅州山田預衆中三人
 座付百七拾壹人

八町九反六畝貳拾九歩

外書同断

一 田代 衆中百四人
 一 佐多 衆中百貳拾三人

一 内之浦 衆中五拾六人
 一 高山 衆中百八拾貳人

一 始良 衆中七拾貳人
 座付壹人
 一 大始良 衆中百貳人

一 串良 衆中百貳拾八人
 一 鹿屋 衆中八拾七人
 座付五人

一 山田 衆中百三人
 座付四人
 一 百引 衆中百五拾貳人

一 蒲生 衆中三百拾九人
 座付拾九人
 一 高隈 衆中四拾人

一帖佐 衆中貳百拾人・山田預 衆中貳百拾五人・座付拾五人

一馬越 衆中百六人

一湯之尾 衆中九拾九人

一栗野 衆中八拾六人 座付九人

一日当山 衆中六拾壹人 座付四人

一曾於郡 衆中百六拾人 座付壹人

一國分 衆中貳百貳拾人 座付七拾貳人

一財部 衆中三百貳拾壹人

一恒吉 衆中百拾壹人

一福山 衆中百五拾九人

一牛根 衆中百貳拾貳人

一大根占 衆中百拾四人

合外城三拾五ヶ所

外三、私領

垂水 花岡 新城 都之城 市成

一惣合屋敷三百四拾五町貳反三畝七步

内、貳百五町八反三畝壹步 衆中三千七百六拾壹人

七畝 座付壹人

外書同断

〔大御支配次第帳〕より補
一溝辺 衆中五拾九人 座付廿五人

一曾木 衆中八拾貳人

一本城 衆中百四拾八人

一吉松 衆中百五拾八人

一横川 衆中百拾三人

一踊衆 中九拾壹人

一清水 衆中百貳拾九人 座付七人

一敷根 衆中九拾三人

一末吉 衆中三百三拾人

一桜島 衆中貳百八拾五人 座付壹人

一小根占 衆中百六拾九人

一馬関田 衆中八拾三人

一加久藤 衆中貳百九人

一須木 衆中百九拾八人

一高原 衆中百六拾貳人

一高崎 衆中百拾八人

一高岡 衆中五百三拾九人

一穆佐 衆中四拾貳人

一志布志 衆中三百貳拾人

一山之口 衆中九拾八人

一大崎 衆中貳百拾五人

合外城拾九ヶ所

三口

合屋敷千四百四拾四町四反七畝廿六步

内、八百三拾七町四反五畝貳拾壹步

貳拾壹町六反貳畝貳拾七步 衆中方 座付方

合衆中壹万五千三百貳拾壹人

合座付并苗代川役人迄三百九拾四人

外三、御用屋敷余地等不書写、略之、

一五三九

薩隅日琉球岡田總

外本琉球新竿不入故、反畝不籠、

合田島塩浜八万九千三百式拾四町六反四畝式拾式步

内、田地四万八百拾三町五反拾七步

島地四万八千三百九拾九町壹反壹畝拾八步

塩浜百拾式町式畝拾七步

外同斷古高盛增加相込ル、

合高頭八拾六万七千式拾七石五斗六升七合九勺八才

(内九)

田高六拾三万千式百六拾七石式斗壹升壹合六勺三才^(六)

才カ

島高拾三万八千八百式拾七石六斗五升五合五勺七才

才

上木高千五百六拾五石三斗九升式合式勺式才

塩浜高千百式拾九石五斗七升四合式勺九才

高九万四千式百三拾石七斗九勺四才

本琉球

但、盛增高相込ル故、田島高不知、

門屋敷男女牛馬略之、

三年分廻ニシテ一ヶ年分相記、

合銀千四百八拾六貫六百九拾目

内、銀九拾三貫三百三拾三匁四分

銀式百四拾四貫七百四拾七匁四分

銀五拾四貫百九拾目七分

銀式貫式百四拾九匁

銀拾四貫百式拾八匁

銀式拾五貫六百四拾三匁九分

銀九百三拾式匁

銀千四拾貫百四拾四匁式分

銀拾壹貫三百式拾壹匁四分

薩摩国 拾三郡

一高三拾万八千式百九拾式石九斗八升^(壹合脱カ)

内、田高式拾五万百三拾九石九斗七升壹合八勺^(才カ)

島高五万六千九百八拾九石式斗九升壹合七勺八才

上木高三百五拾六石壹斗三升四合八勺

塩浜高八百石五斗壹才

大山野高七石八升三合三勺三才

諸浮得

御船手方

山奉行方

牛馬改方

町奉行方

御牧駒代

代官方

鮎川請銀

請所生蠟代^(諸カ)

屋久島方

但、前々ヨリ不入竿候故、御檢地帳無之、

門屋敷男女牛馬略之、

三年分廻ニシテ一ヶ年分

合銀六百七拾貫百九拾七匁五分

内、銀七拾八貫五百九拾壹匁四分

百九貫百七拾六匁貳分

貳拾壹貫五百五拾八匁五分

壹貫四百拾八匁九分

七貫百四拾目三分

拾四貫三百拾四匁九分

四百四拾九匁三分

四百三拾七貫五百四拾八匁

大隅国 八郡

一高式拾五万五千八拾五石四斗七升九合七勺八才

内、田高式拾万六千五百八石九斗貳升四合壹勺四才

島高四万八千貳拾五石六升五合九勺貳才

上木高式百貳拾九石三升八合三勺

塩浜高三百貳拾貳石四斗五升壹合四勺貳才

門屋敷男女牛馬略之、

三年廻ニシテ一ヶ年分

合銀^(六百八拾貫カ)百八拾貫八拾貳匁七分

内、拾貳貫百九拾五匁四分

三拾五貫五百拾匁五分

拾八貫三百五拾貳匁七分

七拾目九分

六貫九百八拾七匁^(七匁)四分

拾壹貫三百貳拾壹匁四分

八貫貳百八拾三匁六分

百七拾七匁

五百八拾七貫百八拾三匁五分 桜島並諸所生蠟代

日向国 諸県一郡

一高拾五万七千六百六拾壹石七斗六升六合壹勺七才

内、田高拾三万四百貳拾四石九斗四升四合九勺貳才

島高貳万六千八百三拾六石七斗五升壹合六勺七才

上水高^(木カ)四百石六升九合五勺^(八才脱カ)

門屋敷男女牛馬略之、

三年廻ニシテ一ヶ年分

合銀百三拾六貫四百九匁八分

諸浮得

御船手方

山奉行方

牛馬改方

町奉行方

御牧駒代

屋久島方

代官方

鮎川受銀

内、貳貫五百四拾六匁六分

御船手方

寛永上ニ盛増
同シ

百貫六拾目七分

山奉行方

高千六百七拾九石貳斗三升九合五勺三才

拾四貫貳百七拾九匁五分

牛馬改方

上木方 樹木ヲ
云フ

七百五拾九匁貳分

町奉行方

高三千三百四拾六石七斗九升九合六勺九才(七カ)

三貫四拾五匁四分

代官方

盛増 石盛ノ増
額ヲ云フ

三百五匁七分

鮎川受銀

男女牛馬略之、

拾五貫四百拾貳匁七分

諸所生蠟代

琉球道之島 五島

一五四〇

一高五万七千七百五拾六石六斗四升九才

薩隅日本琉球并道之島御藏入給地諸屋敷(惣高紙) 総高紙

内、田高四万四千百九拾三石三斗七升壹合四勺九才

高頭八拾六万七千貳拾八石六斗七升三合貳勺八才

畠高六千九百七拾六石四斗九升六合貳才(勺カ)

内、七拾貳万四千四拾壹石三斗三升貳合貳勺八才(五カ)

上水高五百八拾石壹斗四升九合五勺四才

内、壹石壹斗五合三勺ハ不足増

塩浜高六石六斗貳升貳合八勺六才

薩隅日三州

屋敷男女牛馬略之、

内、三拾万八千貳百九拾三石五斗四升三勺三才 薩州

本琉球 拾島

貳拾五万五千八拾五石九斗壹升四合貳勺九才

一高九万四千貳百三拾石七斗九勺四才

隅州

内、高八万三千八拾四石九斗四升五合八勺六才

拾五万七千六百六拾壹石八斗七升七合六勺三才

慶長竿 慶長年間ノ
檢地ヲ云フ

日州

高六千百拾九石貳斗壹升五合八勺八才

拾四万五千九百八拾七石三斗四升壹合三才

本琉球並道之島

右払

一高拾貳万三百七拾壹石九斗四合七才

拾貳万石御藏入高藩主直接藏入高

内、六万七千七百六拾三石壹升五合三勺八才

薩州

三万貳千三百七拾四石八升九合貳勺六才

隅州

貳万六千貳百三拾四石七斗九升九合四勺三才

日州

一高千五百六拾九石六升八合七勺五才

屋久島・口永良部島御藏入

一高五万貳千貳百九拾石九斗七升貳合壹才

帖佐与十七世義弘公大隅国帖佐城二居リシトキノ統料ヲ云フ今代ニ至リテモ其区別アリタリ 御藏入

内、貳万三千拾石七斗五升四才

薩州

貳万貳千七百拾四石壹斗七升六合八才

隅州

六千五百六拾六石四升五合八勺九才

日州

一高五万貳千六百壹石四斗八升壹合七勺 五万石御藏入

内、貳万九百四拾五石七斗七升八合九勺四才

薩州

貳万四百六拾壹石六斗八升壹勺貳才

隅州

壹万千九百九拾四石貳升貳合六勺四才

日州

一高壹万六千貳百拾貳石三斗五升八勺三才

新田封内各所開墾地ノ総唱 御藏入

内、八千六百八拾貳石貳斗九升三合八勺九才

薩州

五千四百五拾三石八斗八升四合壹勺六才

隅州

貳千七拾六石壹斗九升(七カ)貳合七勺八才

日州

一高三拾三石八斗八升貳合壹勺六才

宮内原新田国分郷ニ在ル鹿兒島神社ノ隣地ヲ宮内ト云フ、其地ニ在ル開拓地ノ通唱ナリ 御藏入

一高八千七百貳拾五石壹斗九升六合三勺八才

国分与十六世義久公大隅国国分郡富隈城三居住セリ、当時統料高ノ内一種ノ区別アリタリ 夫ヨリシテ今ニ至リテモ旧

名ヲ存ス、然レトモ藏入高ノ一ナリ 御藏入

内、九百貳拾貳石四斗三升貳合七勺壹才

薩州

六千五百貳拾九石七升七勺五才

隅州

千貳百七拾三石六斗九升貳合九勺貳才

日州

一高七千九百八拾七石八斗壹升六合三勺七才

(御藏入也)磯御屋敷付代吉貴公城北磯ノ別邸ニ隠棲ス今忠義公居邸是ナリ 御藏入

一高千三百三拾三石七斗八升貳合六勺八才

信証院様御買入藩主実母 右同

一高五百六拾四石六斗貳升貳合九勺貳才

於須磨様御買入藩主実母 右同

一高三百四拾四石式斗升九合式勺三才

寺院御買入各寺院ニ買入タルヲ云フ右同

一高五百拾三石五斗八升五合九勺四才

御内用藩主手許金ヲ以テ買入レタルヲ云フ右同

一高九百三拾三石四斗壹升壹合式勺四才七島并諸島右同

一高三百拾五石壹斗四升九合六勺九才 助用高救助方右同

一高式千五百五拾九石八斗壹升五合七勺七才

金山付各金銀釵山給与料ヲ云フ右同

一高百七拾三石八斗七升六合七勺七才

新御買入右同

一高三千石

御渡方藩吏扶助右同

一高壹万壹石六升六合式勺七才

御影堂付藩主代々ノ肖像安置ノ祀堂ニ付ス

一高三百石

護摩所付城内ニ在リ、折願所ナリキ

一高三百貳拾九石式斗壹合四才

御仏餉料当主ヨリ五六代前大乗院鹿兒島城北半里許ニ在リ

一高三拾石式合八才

仁王門付

一高拾九石

磯天神領

鹿兒島諸給地一門家其他士分及ヒ社寺祿高

一高三拾壹万七千四百七拾六石壹斗三升五合式才

内、拾貳万九千貳百五拾八石四斗壹升三合五勺四才

薩州

拾壹万六千三百拾九石三斗九升六勺三才 隅州

七万八千八百九拾八石三斗三升八勺五才 日州

一壹万六千七百七拾五石七斗三升五合壹才

御役料并役料国老以下ノ役高ノ通唱

内、六千四百八拾七石壹合式勺九才 薩州

七千六百六石式斗六升八勺四才 隅州

三千百八拾貳石四斗六升四合八勺八才 日州

一高九万五千八百三拾九石七斗九升四勺九才

諸外城給地各郷祿高

内、三万九千五百八拾貳石五升五合七勺壹才 薩州

貳万五千六百五拾貳石七升四合五勺八才 隅州

一高式千五百拾七石三斗四升七勺 日州

一高六千三百四拾石式斗壹升五合壹勺八才 御免地社寺地

一高百九拾四石九斗五合式勺九才 御用地藩庁用地

一高千貳百六拾九石三斗八升壹合九勺三才

士並座付屋敷^{上三云}カ如シ

一高五拾三石八斗六合五勺

上町屋敷^{城下ノ市街ヲ三区三分ツ、上町・下町・西田町トス、西田町ハ村市ナリ}

一高八拾六石三斗四升壹合壹勺五才

下町屋敷

一高五万七千七百五拾六石六斗四升九才

御藏入道之島

一高九万四千貳百三拾石七斗九勺四才

中山王領地^{琉球ヲ云フ}

以上、享保十三^(戊申カ)己亥年封内一般検地ノ成蹟ニシテ、當時

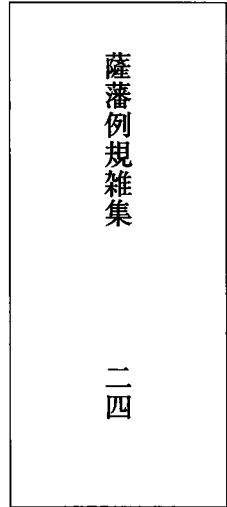
検地ト唱ルトキハ幕府ノ允可ヲ請ヒ、吏員臨検ヲ請フ成規ナリシ故、

内検ト唱へ臨検ヲ請ハス、万治二年

ノ検地ハ引並シト唱へ、或ハ寛永度ニハ内検ト唱へタ

リ、皆幕吏ノ臨検于預ヲ欲セサリシニ由テナリ、

(表紙)



薩藩例規雜集二四

目錄

(以下十九行、本文より補)

御元服

墓石制度

法事仙家名目ノ事

仏事之次第

葬式規定

潜庵筆語

容貌言語矯正令

帳簿上名取消令

信濃殿ヨリ被相渡候御書付之写

唱呼令

江戸邸ニ於テ御交際料

封内五口之通唱

伝馬人足定

諸国御本亭

御精進日

御法事之次第

薩隅日郡院説

建久惣田数注進案

大隅国注進御家人交名等事

一五四一 (卷之二十九 一七九八号文書に同じ、本文略)

一五四二 (卷之二十九 一七九九号文書に同じ、本文略)

一五四三 (卷之三十二 二二四八号文書に同じ、本文略)

一五四四 (卷之三十二 二二四二号文書に同じ、本文略)

一五四五 (卷之三十二 二二四三号文書に同じ、本文略)

一五四六 (卷之三十二 二二四四号文書に同じ、本文略)

一五四七 (卷之三十二 二二四五号文書に同じ、本文略)

一五四八 (卷之三十二 二二四六号文書に同じ、本文略)

一五四九 (卷之三十二 二一四七号文書に同じ、本文略)

一五五〇 (卷之三十二 二一四九号文書に同じ、本文略)

一五五一 (卷之四十九 三七八六号文書に同じ、本文略)

一五五二 (卷之四十九 三七八七号文書に同じ、本文略)

一五五三 (卷之四十九 三七九三号文書に同じ、本文略)

一五五四 (卷之四十九 三七九四号文書に同じ、本文略)

一五五五 (卷之四十九 三七九五号文書に同じ、本文略)

一五五六 (卷之四十九 三七九六号文書に同じ、本文略)

一五五七 (卷之四十九 三七九七号文書に同じ、本文略)

一五五八 (卷之四十九 三七九八号文書に同じ、本文略)

一五五九 (卷之四十九 三七九九号文書に同じ、本文略)

一五六〇 (卷之四十九 三八〇〇号文書に同じ、本文略)

一五六一 (卷之四十九 三八〇一号文書に同じ、本文略)

一五六二 (卷之四十九 三八〇二号文書に同じ、本文略)

一五六三 (卷之四十九 三八〇三号文書に同じ、本文略)

一五六四 (卷之四十九 三八〇四号文書に同じ、本文略)

一五六五 (卷之四十九 三八〇五号文書に同じ、本文略)

一五六六 (卷之四十九 三八〇六号文書に同じ、本文略)

一五六七 (令条記卷二〇 二五二号)

伝馬人足定

定

一御朱印伝馬人足之員数、御書付ノ外多不可出事、

一御伝馬并駄賃之荷物ハ壹駄四拾貫目、人足之荷物者一

人ニ付テ五貫目ニ可限事、

一江戸ヨリ品川迄駄賃錢一駄ニ付テ五拾三文、乘懸荷物・

人共ニ同前、荷物ナクシテ令乗者三拾四文、人足賃ハ

一人ニテ二拾七文、千住へ五十八文、荷ナシニ乗者三

十八文、人足賃ハ廿九文、板橋へ六十文、荷物無之時

ハ三十九文、人足賃ハ三十文、下高井出へ九十三文、

荷ナクシテ乗ハ六十二文、人足賃ハ四十七文、但夜通

シ急相通ル輩ハ荷ナシニ乗トイフトモ、夜分ハ一駄ノ

積ニ駄賃ヲ可取事、

付、五貫目迄之乘懸荷物ハ荷ナシニ乗駄賃同前タル

ヘシ、夫ヨリ重キ荷物ハ本駄賃錢可取事、

一人馬之儀、御定之外増錢ヲ取モノ有之者可令籠舎並其

町之間屋・年寄為過料鳥目五貫二宛、人馬之役者ハ

家一軒ヨリ百文ツ、可出事、

一 御伝馬駄賃ノ荷物ハ其町之馬不殘可出之、若駄賃馬才

ホク人付者在々所々ヘヤトヒ、荷物運ニ無之様ニ風雨

之節ニモ可出之、往還ノ輩無子細シテ理不尽之儀申懸

者可越度、又往還候ニ対シ非儀有之者可為曲事事、

一道中次人カ次馬ノ欠数、縦国持大名タリトイフトモ、

家中共ニ東海道ハ一日ニ五十人・五十疋ニ過ヘカラス、

此外ノ伝馬者廿五人・廿五疋ニ限ヘシ、但江戸・京・

大坂ハ各別タルヘシ、勿論道中ニテ人馬共ニ追通スヘ

カラサル事、

付、泊々ニテ木賃、主人一人ハ拾二文、召仕候者一

人ニハ六文可取之、馬一疋モ可為拾_貳文事、

一 乗物一丁ニ次人足六人、山乗物者四人ニテ御定候人足

賃取之可相送候、長櫃一棹三十貫目_を限ヘシ、夫ヨリ

重キ荷物ハ持ハコフヘカラス、人足一人ニ五貫目之荷

物積ニテ、三拾貫目ハ人足六人、ソレヨリカロキ荷物

者貫目ニシタカヒ、人数減少スヘシ、此外者イツレノ

荷物モ可準之事、

右条々可相守候、此旨若於相背者速可被処嚴科者也、
依テ下知如件、

天和四年五月日

- 一五六八 (卷之三十五) 二四三六号文書に同じ、本文略
- 一五六九 (卷之三十五) 二四三七号文書に同じ、本文略
- 一五七〇 (卷之三十五) 二四三八号文書に同じ、本文略
- 一五七一 (卷之三十五) 一四三四号文書に同じ、本文略
- 一五七二 (卷之三十五) 一四三五号文書に同じ、本文略
- 一五七三 (卷之三十五) 一四三六号文書に同じ、本文略
- 一五七四 (卷之三十五) 一四三七号文書に同じ、本文略
- 一五七五 (卷之三十五) 一四三八号文書に同じ、本文略
- 一五七六 (卷之三十五) 一四三九号文書に同じ、本文略
- 一五七七 (卷之三十五) 一四四〇号文書に同じ、本文略
- 一五七八 (卷之三十五) 一四四一号文書に同じ、本文略
- 一五七九 (卷之三十五) 一四四二号文書に同じ、本文略
- 一五八〇 (卷之三十五) 一四四三号文書に同じ、本文略
- 一五八一 (卷之三十五) 一四四四号文書に同じ、本文略
- 一五八二 (卷之三十五) 一四四五号文書に同じ、本文略
- 一五八三 (卷之三十五) 一四四六号文書に同じ、本文略
- 一五八四 (卷之三十五) 一四四七号文書に同じ、本文略

一五八五	(卷之二十五 一四四八号文書に同じ、本文略)	一六〇四	(卷之二十五 一四六七号文書に同じ、本文略)
一五八六	(卷之二十五 一四四九号文書に同じ、本文略)	一六〇五	(卷之二十五 一四六八号文書に同じ、本文略)
一五八七	(卷之二十五 一四五〇号文書に同じ、本文略)	一六〇六	(卷之二十五 一四六九号文書に同じ、本文略)
一五八八	(卷之二十五 一四五一号文書に同じ、本文略)	一六〇七	(卷之二十五 一四七〇号文書に同じ、本文略)
一五八九	(卷之二十五 一四五二号文書に同じ、本文略)	一六〇八	(卷之二十五 一四七一号文書に同じ、本文略)
一五九〇	(卷之二十五 一四五三号文書に同じ、本文略)	一六〇九	(卷之二十五 一四七二号文書に同じ、本文略)
一五九一	(卷之二十五 一四五四号文書に同じ、本文略)	一六一〇	(卷之二十五 一四七三号文書に同じ、本文略)
一五九二	(卷之二十五 一四五五号の1文書に同じ、本文略)	一六一一	(卷之二十五 一四七四号文書に同じ、本文略)
一五九三	(卷之二十五 一四五六号文書に同じ、本文略)	一六一二	(卷之二十五 一四七五号文書に同じ、本文略)
一五九四	(卷之二十五 一四五七号文書に同じ、本文略)	一六一三	(卷之二十五 一四七六号文書に同じ、本文略)
一五九五	(卷之二十五 一四五八号文書に同じ、本文略)	一六一四	(卷之二十五 一四七七号文書に同じ、本文略)
一五九六	(卷之二十五 一四五九号文書に同じ、本文略)	一六一五	(卷之二十五 一四七八号文書に同じ、本文略)
一五九七	(卷之二十五 一四六〇号文書に同じ、本文略)	一六一六	(卷之二十五 一四七九号文書に同じ、本文略)
一五九八	(卷之二十五 一四六一号文書に同じ、本文略)	一六一七	(卷之二十五 一四八〇号文書に同じ、本文略)
一五九九	(卷之二十五 一四六二号文書に同じ、本文略)	一六一八	(卷之二十五 一四八一の1号文書に同じ、本文略)
一六〇〇	(卷之二十五 一四六三号文書に同じ、本文略)	一六一九	(卷之二十五 一四八二号文書に同じ、本文略)
一六〇一	(卷之二十五 一四六四号文書に同じ、本文略)	一六二〇	(卷之二十五 一四八三号文書に同じ、本文略)
一六〇二	(卷之二十五 一四六五号文書に同じ、本文略)		
一六〇三	(卷之二十五 一四六六号文書に同じ、本文略)		

一六二一

參考 薩隅日郡院說

我薩隅日之於諸郡有自以院呼者、則如建久(古脫力)八月園田帳所

載、山門・莫祢・入來・祁答・牛屎・滿家・市來・伊集

院・知覽・給黎等在薩之院也、蒲生・吉田・横川・栗野・

小河・深河・財部・鹿屋・申良・祢寢等在隅之院也、三

俣・島津・真幸・穆佐・救仁等日之院而有諸県郡、飢肥

及櫛間有宮崎郡、新納在兒湯郡、此皆古來以院呼者也、

其呼云爾、雖多知之、未聞其所首說也、愚近按統紀、延

曆十年二月癸卯令於諸国新造倉庫、各去其間於踰十丈、曰、諸

国倉庫比近相接、一倉失火合院燒尽、於是改置隨處寬狹

量宜置之、又按後紀、十四年閏七月辛亥申、令諸国新建倉院、

宜須每鄉改置一院、曰、諸国建郡故置一處、百姓之居僻

遠去郡跋涉山川有受納責、且倉疊近接有失火憂弘仁八年十

九國新治郡實燒不動倉十三字、故令改之、今年租稅輸納新院、

但於那家如難動物依旧莫動漸遷新院、置倉之法依十年制、

又其九月辛亥更令諸国建正倉院、曰、諸国每鄉令建倉院、

追尋此事頗乖穩便、令須彼此相接比近之鄉於其中央同置

一院、村邑遙阻絕隔之處、宜量地便每鄉置之、余依前制、

(親之脫力) 拋此我藩之諸呼院者皆其遺名而首于此者明驗、孰大焉、

其特多院蓋以郡鄉善跨乎山川故也、然我大史白尾国柱・

橋口善等曰、院字音環、義與園同、唐人小說宅書莊院、

後曰別墅、蓋此類云、今按說文、園所以樹果也、恐未的

確、所謂院字今按字典則有垣牆處而官廨曰院、亦亦以其

必有垣牆故也、而郡群也、人所群聚而鄉向也、衆所向云、

參諸上令考本邦制、以国統郡、(以郡脫力以攝脫力) 統鄉、統村、黃白問答所

謂和名鈔国下注為、(郡名脫力) 郡下注為鄉名、云昂此也、是故村則

隸鄉、鄉則隸郡、郡則隸国、国置国衙国司治之、郡置官

廨、倉庫建焉郡司掌之、所謂郡家也、其繞困也、必垣牆

故謂之院、或曰倉院、而百姓之居鄉村者僻遠、去郡跋涉

山川有受納責、且倉舍亦比近、接有失火憂、故於郡鄉其

必令者分建倉院、村居接比近之鄉令量宜建諸其中央、邑

落阻遠山川隔絕、令隨地利每鄉建之、以濟百姓、兼備失

火、於是乎倉庫之制矯而變革、郡院首焉、則以国統其院、(統郡又脫力)

以郡若院各統其鄉、以鄉統村、新田宮藏書所謂諸郡檢田

使幣分差等、大郡五十疋、中郡三十疋、院廿疋、鄉五疋

云、亦可証也、是故郡司分而掌之、因其新院所各定名謂

之其院司、或依其旧尚曰郡司、其美皆一職耳、何以言之、

按因田帳、如給黎則此院也、而其掌此書曰郡司忠益、至(郡司兼保知覽亦院也而書郡脫力)

若牛屎雖書院司元光、於右文書文永二年或書牛屎郡司、此類

尚多則一職分兩員可以知也、而及屬鄉亦聽令者皆繫管下、

泛呼其院又其統鄉云、則觀飫肥有南北鄉、祿寢有南北俣、

可以証也、合而言之惟曰飫肥南鄉、分而言之曰飫肥院之

類亦可觀也、譬諸今世所謂會院猶呼藏本有曰祁答院組之

類、其隸之者猶曰藏屬鄉、今以牛屎等証之、則割伊佐郡

置之二院、其一方以牛山・羽月・山野・平泉・入山等曰

牛屎院曾木氏譜所謂凌刈兩院云、則併牛屎與多郎言之、而凌刈大隅郡名也、又一方以佐志・黒木・

鶴田・宮之城・山崎・大村・藺牟田曰祁答院、各屬其管

下之類、(辭脫力)是遠遠去郡跋涉山川之令以二分置之也、又如

救仁按因田帳、有鄉有院、而其鄉為百六十町、院為九十

町、以広於院則知分於鄉、亦應遠近鄉相接置院中央令以

分之也、然自院建到于今茲一千四十年矣、余稽古乘欲能

言之、古今文獻不足遍徵、況於他邦、莫嘗聞有郡鄉呼院

者、惟觀陰德太平記載豊後州有野津院耳、(新力)荒井白石以博

物聞、其問古制於野宮黃門亦不及院則知絕既久矣、故今

舉一二以竢博古、又其名之大抵皆似乎由其所建地名以各

命之、而如新納院蓋迨遵令以其年租輪納新院、便因其所

新納院遂以名之、似有謂焉、若其然則新納稱呼肇乎 桓

武帝延曆十四年冬亦可以想也、而此是我久仰君及其族人

伯剛老兄等之所世為姓也、故為之說、述其概端窃示君等、

庶乎更質博識以有研究焉云爾、天保五年秋七月甲子潛隱

伊地知季安靜稿、(阿脫力)古郡院說者惟宗曾美宇宿行典借求、

藏書源阿曾美木尾澄明)

一六二

建久惣田數注進案(本書燒失)

大隅国

注進 國中惣田數社庄公領并本家領所、(預力)地頭・弁濟

使等交名事

合田參仔拾漆町五段大

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

田千三百九拾六町三段小(二力)

不輪五百町五段小

應輪七百九拾五町八段

国領

公田百丁半(六脱力)

不輸百三十三町三段小

府社五箇所十六町 大府御沙汰

島津御庄領 殿下御領 地頭衛門兵衛尉

新立庄七百十五町

寄郡七百十五町八段三大(丈九)

近郷

曾於郡二百廿九町四段大

正宮領五拾六町一段 本家八幡 地頭掃部頭

御供田十四町七段

寺田十五段七段(町九)

国方所当弁田

万徳五丁二段

丁別十疋

恒見廿丁五段

丁別十九疋三大(丈九)

国方

公田八拾一町

重枝廿丁

重富三十三町

件兩名、依令私奉寄於正宮、料作御佃三丁也、(辨力)

用松十五丁 藤原篤頼所知

弟子丸五丁 田所建部宗房所知

重武三丁 税所藤原篤用所知

元行五丁 權大様建部近信所知(據力)

寺田丸丁六段半(九力)

仏性灯細料(油力)

經講浮免田五十三丁六段大

聖朝府国御祈禱料、於正宮御宝前講衆募、(各説力)

府社五丁七段 大府御沙汰

島津御庄永利廿三町三段三大(丈九)

殿下御領 地頭衛門兵衛尉

小河院三百四十八町三段大

正宮領二百七十四町八段 本家八幡 地頭掃部頭

御供田十五町六段六十步

寺田三十二丁六段

小神田五丁三段六十步

国方所当弁田

万徳百六十三段

郡司藤原篤守所知

税所藤原篤用所知

丁別十疋

恒見三丁九段大

丁別十九疋三(丈カ)大

公田五十七丁

功德九丁二(十カ)丁

用徳四十五丁

国領

公田八丁五段

廻村弟子丸五丁三段大

武元二丁

元行一丁二段三百歩

経講浮免田廿八丁四段大

聖朝府国御祈禱料、於正宮御宝前講衆各請募、

府社八丁四段

島津御庄永利廿五丁七段三(丈カ)大 殿下御領

桑東郷百八拾九丁四段大

正宮領百拾三丁九段大 本家八幡 地頭掃部頭

御供田廿七丁七段

寺田五拾一丁八段六十歩

国方所当弁田

恒見四丁廿段半

丁別十九疋三(丈カ)大

万徳十二丁

丁別廿疋

宮永廿三丁

正宮修理料

此内不蒙免、押募各々在成歟、

公田廿一丁

丁別廿疋

万善十二丁

松永七丁

千平九十二丁(千手九カ)

国領

公田十五丁五段

丁別廿疋

武安六丁

立丸五丁

税所藤原篤用所知

宗新大夫建部高濤所知(字カ)

字紀新大夫良房所知(大カ)

▽(鎌倉遺文より補)
小神田三丁五段△

元行丁五段 (二脱カ)

秋 (松カ) 二丁

寺田二丁八段

仏性灯油料

▽(鎌倉遺文より補) 經講浮免田廿六丁四段

府社八段

大府御沙汰

聖朝府国御祈禱料△

僧覺慶所知篤時始論

郡司大中臣時房所知

小浜村八丁

僧兼俊所知

国領

公田二丁

郡司則貞所知

寺田一丁二段

仏性灯油料

經講田九丁二段半

聖朝府国御祈禱料

府社一丁一段

大府御沙汰

帖佐郡▽(鎌倉遺文より補) 二百七十丁大△

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

為半不輪、正税官物者并濟於国衙也、

御供田九丁七段小

寺田廿六丁六段

小神田六十四丁九段半

大般若三丁

經講浮免十四丁二段 聖朝府国御祈禱料

国方所当弁田

万德五丁三段大

丁别十疋

恒見八丁七段大

国方所当弁田

万德十四丁四段

酒井未能所知 (末カ)

丁别十疋

宮永卅六丁四段大

丁别廿疋

此内不蒙国免、正宮修理料、押募各之成歟、 (名被カ)

溝部在河 (二カ) 町

酒井未能所知

丁別廿疋(十九カ)三(文カ)大

宮吉五丁

丁別八疋

正政所十丁

丁別十五疋

權政所五丁

丁別十五疋

公田六十八丁四段半

丁別廿疋、村々十ヶ所、

蒲生院百十丁九段半

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

為半不輸、正税官物者并济国衛也、

御供田十二丁六段

大般若一丁

寺田十四丁五段

小神田三十一丁

經講浮免田二丁 聖朝府国御祈禱料

国方所当弁田

宮吉一丁

丁別八疋

万徳十七丁

丁別十疋

恒見七丁九段半

丁別十九疋三(文カ)大

公田廿五町四段

丁別廿疋

吉田院十八丁二段

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

御供田二丁

寺田七段

▽(鎌倉遺文より補)小神田三丁五段△

經講田一丁 聖朝府国御祈禱料

▽(鎌倉遺文より補)国方所当弁田△

万徳一丁

丁別十疋

公田十丁

丁別十疋(二十疋カ)

加治木郷百廿一丁七段半

正宮新御領 本宮八幡(家カ) 地頭掃部頭

公田永用百六丁二段半 郡司大藏吉平妻所知

件名雖為社領、貴府別府以數百余丁宛五十丁所当

准千疋、殘卒余丁不弁濟府国兩方次私用也、動不(六十カ)

隨國務也、

鍋倉村三丁

僧忠覺所知

宮永八丁

正宮修理所為宗所知(酒井脱カ)

万徳四丁五段

祢寝南俣四十丁

本家八幡 地頭掃部頭(正宮領脱カ)

郡本三十丁

丁別廿疋

建部清重所知(元脱カ)

賜大將殿御下文、菱刈六郎重俊知行之也、(但去脱カ) 文治五

年以後貴府別府以多丁弁四百疋也、別不弁社家年

貢不隨國務、任自由知行也、(之カ)

佐汰十町

丁別廿疋

賜大將殿御下文、建部高知行行之、

栗野院六拾四丁

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

御供田四丁

公田六拾丁

鹿屋院恒見八丁 正宮領

始良庄五拾余丁 正宮大般若庄内沙汰(信カ)

島津庄 殿下御領(基通関白ノ時二当レリ) 地頭衛尉(元吉門高宗清所知 衛門兵衛尉 忠久公)

新立庄七百六十丁

深川院百五十余丁

財部院百余丁

多祢島五百余丁

謀反人故有送平分損于今知行也、(有道・有平子孫カ)

件三ヶ所、保延年中以後新府、不隨國務也、(庄カ)

法隆寺大政大臣忠通氏長者ノ時二当レリ、近衛基

通公ノ祖ナリ、

寄郡七百十五丁八段三大(丈カ)

但、付其仁平三年(去カ) (忠通公ノ時也) 御庄方檢注帳進之、

御庄官等檢田入部時、滿作年者貴居活田付、弁濟所当(活カ)

物、不作年者雖遂檢田、不幾數國衛訴也、(衛カ)

横川院三十九丁五段二丈

菱刈郡百三十八丁一段

郡本

賜大将殿御下文、三郎房相印知行之、

入山村 筥崎宮浮免田

同賜御下文、千葉兵衛尉沙汰也、

申良院九十丁三段丈

鹿屋院八十五丁九段

肝付郡百三十丁二段三丈

祢寝北俣四十丁五段四丈

下大隅九十五丁九段

始良西俣廿四丁六段二丈

小河院内百引村十二丁四丈(三九)

近郷小河院内在之、

同永利十二丁六段四丈

同

曾野郡永利廿三丁三段(三丈脱力)

近郷内在之、

筒羽野四十八丁五段一丈

件村者筥崎浮免田以四十余町押募十五丁、残不随国務、
(悉力) 姿弁济使私用之、

右、件惣田数、任御教書旨注進如件、

大判官代藤原

諸司檢校散位大中臣判

田所散位建部宿称同(称力)

税所散位藤朝臣同

目代源同

右、今年去五月廿三日守護所(三九) 二月到来併、欲任鎌倉殿(脱力)

御教書旨在庁参上、注進当国内郡郷庄園并寺社庄園田(園田力)

数同本家領所及地頭政所弁济使交名事、牒、今年四月(称脱力)

十五日御教書到来、九州之内一國其国内候在庁被仰(仁力)

付、国惣田庄公可令注進給也、其施幾其内庄分・公領(国幾上力)

分名幾許可被注進也、且又次第郡立候庄公可令注進給(分脱力)

也、(鎌倉遣之より補) 其上庄者本家領所地頭、公領者地頭某可令注申

給也、△地頭者自是輔任之所、国無隱地歟、且是不補(某力)

給地頭其被注候也、管国之方地頭申、又政所弁济使何(某力)

候歟計、懸紙各神妙可注給也、自是地頭補任不令補給(前力)

之所知食、又誰人何出来時分々明為知食也、仰旨如此、

仍執達如件者、当国内之郡郷田数^{(二)説之}▽庄園田数△并本家

領家領所乃地頭政所并濟使等交名、任御教書旨、在庁

參上令差別、子細具可被損也、大事急速之御下知也、

更不可在延怠也、 欠 如件、以牒之者任御牒之状進^(注脱)

言上如件、

建久八年閏七月日^(六九)

東鑑(元久元年十月十七日丙子大隅国正八幡ノ宮寺^(午九)

訴申事被経沙汰、是故右幕下御時、掃部頭入道叔忍

為正官地頭之寺、^(短カ) 官寺ヨリ被申子細被停止其儀^(説脱カ)、其

後又三箇所^(被補三人地頭之簡違營之功難成之由云々仍今日説カ)止被地頭職等也、帖佐郷ノ地頭肥後房

良西・荒田庄地頭山北六郎種頼・万得ノ名ノ地頭馬

部ノ入道淨覽云々、^(實カ) 広元朝臣奉行之)

権大様伴^(様カ)

権介清原

権介藤原

権介藤原

権介伴

権介小野氏祐

権介大中臣

一六三三(の1)

大隅国注進御家人交名等事

国方

税所篤□^(用カ)

曾於郡司篤守

加治木郡司吉平

修行清俊^(執カ)

河俣新大夫篤頼

イ木房紀太郎良清^(房カ)

イ西郷酒太夫末弘^(能カ)

宮方

政所守平

源太夫利家

権介大伸

権介藤原朝臣

権介泰惟康

権介大中臣朝臣為則

権介惟宗朝臣

田所宗房

小川郡司宗房

帖佐郡司高助

東郷郡司時房

佐多新太夫高清

弥三太夫近遠^(延カ)

祢寝郡司□^(義明)

長太夫清道

修理所為宗

權政所良清

栗野郡司守綱

脇本三郎大夫正平

太郎大夫清直

六郎大夫為清イ有(高清カ)

弥太郎大夫種元(矢カ)

島四郎近延

始良平大夫良門

修行大夫助平(執カ)

新大夫宗房

小平大夫高延

敷根次郎延包

肥後坊良四(肥後房良西カ)

弥二郎貫首友宗

三郎大夫近直

右件御家人、為上覽各交名大略注進如件、

(建久九年三月十一日脱カ)

諸司檢校大中臣時房

田所檢校建部宗房

税所檢校藤原篤司(用カ)

(一六二三の2)

右者、前々御用ニ付差上置候処、去年依焼失写仕置候

ハ、今度差上可申旨被仰渡候間、如此御座候、

宮内

辰六月廿五日

隈元治右衛門

(表紙)

薩藩例規雜集

二五止

薩藩例規雜集二五止

目錄

參考 琉球国降伏爾來施政一斑

琉球国知行高目錄

琉球国人口概數

石高二懸ル諸出米

琉球国石高二懸ル增高井上木(樹木高方言)高

大御支配御受

在番奉行直次渡箱格證書

那霸市街水利

琉球詰見聞役方格證書

漂流船取扱

宮古・八重山二島運賃定例

往復船積間定例

改元布告

御家譜編集書類云々

幕府琉人ノ書ヲ求ム

新井白石詩文ヲ清国ニ遺ス

遣清使屬吏給与

那霸港ヨリ福州迄海路上申

渡唐金數定

家宣公薨去ニ付テ使者

国曆調整

在番藩吏其他ニ対シ礼待心得達書

火藥倉取締

琉球藥価

渡琉者武器禁止

那霸護国寺幡銘

琉球人幕府へ応答心得訓示

益ノ文字称呼ヲ停ム

幕府ニ対シ文字及ヒ称呼遠慮布達

齊宣ノ文字及ヒ称呼停止

寛政改元布告

唐紙模製ノ為換籍琉人

木綿実油食用禁令

御膳賜リ

琉使上国期限達書

齊宣公御結婚布告

齊宣公中将御叙位

冊封使乗船尺度

琉球在番奉行覚悟之条々

渡唐船前覚悟之覚

渡唐船帰帆之節覚悟覚

在番奉行心得書

唐物取締布達

同上享保三戊戌年六月ノ令

唐船漂流云々布達

琉球石高二課スル出来其他物品代米

琉球国及ヒ諸島大御支配延期願

琉球貢納運賃定例

琉球出米定令

琉球往来運賃部下リ達書沿革

琉球砂糖運賃定例

琉球ヨリ積上リ馬其外積間定

在番奉行乗船積間定メ

御高奉行所御規帳

難破船処分

慶良間島貢納船

唐物取締諸令

大和横目格護之仰渡覚

琉吏心得訓示

渡唐船糸物買入云々達書

諸船頭覚悟之条々

以上六十一条

薩藩例規雜集二五止

一六二四

參考 琉球国降伏爾來施政一班

一慶長十四己酉琉球入、大将四月朔日那覇入津、五月十

四日出船、樺山権左衛門殿(久高)・平田太郎左衛門

殿(増宗)・案内者市来織部・同村尾笑柄(橋力)(源左衛門)、

一同十五庚戌竿入、奉行高崎弥六・上井次郎左衛門

里積り事

一巷里トハ三拾六町、間ニシテ式千百六拾間也、巷間ト

ハ六尺五寸賦リ、巷町トハ六拾間也、

金銀引合方

一壹部金壹切ニテ兩目壹匁式分、

代銀ニシテ拾五匁当也、

但、壹分ニテ代銀壹匁式分五厘也、

一小判金壹兩トハ壹部四切引合、兩目四匁八分、

代銀六拾匁也、

但、金壹匁トモ申、

一大判金壹枚兩目三拾六匁、壹部三拾切、小判七兩半引

合、

代銀四百五拾匁也、

一金百貫トハ判金五枚也、壹枚ニ付四百式拾目引合、

但、是者折々少々ツ、立直之由也、

一黄金壹疋トハ壹部壹切也、

一金之位ハ壹番壹歩、式番小判、三番大判也、

一大判之儀者京都後藤書判ヲ以取替スル天下法様也、

一銀子壹番トハ兩目四匁三分、拾兩ニテ銀壹枚之事、

一式ツ宝銀壹匁ニテ元銀シテ七分五リ九モ四シ九才、

一同壹匁ニテ古銀ニシテ六分、

一元銀壹匁ニテ古銀ニシテ七分九リ、

一九分七銀八分三リニテ古銀ニシテ壹匁、

一九分五銀八分五リニテ古銀ニシテ壹匁、

一九分銀九分ニテ古銀ニシテ壹匁、

一拾分銀八分ニテ古銀ニシテ壹匁、

一九分五銀九分五リニテ九分銀ニシテ壹匁、

一九分七銀八分ニテ九分五銀壹匁、

一九分銀壹匁ニテ拾分銀九分、

一拾分銀九分七リニテ古銀壹匁、

一拾分銀九分五リニテ九分七銀壹匁、

古銀ニシテ壹匁八リ七毛五シ也、

一江戸御使者拝領吹銀壹匁ニテ於拾分銀位ニシテ九分五
リ相立、

一古銀壹匁ニテ於唐拾分銀位ニシテ八分也、

一元銀壹匁ニテ於唐古銀位ニシテ七分九リ也、

拾分ニシテ六分三リ弍毛也、

一弍ツ宝銀壹匁ニテ於唐古銀位ニシテ六分、拾分銀ニシ

テ四分八リ也、

一三ツ宝銀壹匁ニテ於唐古銀位ニシテ弍分五リ、拾分銀

ニシテ弍リ也、

一六二五

琉球国知行高目録

沖繩

高五万七千九百九十九石九斗三升

琉球国

久米島

高三千弍百五拾壹石四斗七升

計羅摩島

高百八拾八石八斗弍升

宮古島

高壹万弍千八百八拾八石壹斗弍升六合
八重山島

高五千九百八拾石九斗三升四合

粟国島

高六百七拾五石八斗五升

登那幾島

高四拾壹石四斗四升

伊惠島

高三千三百七拾石九斗三升

伊世那島

高六百九拾六石六斗弍升

(伊平屋島カ)
間部屋島

高五石壹斗九升
(百脱カ)

惣ノ高八万三千八拾五石三斗壹升

右知行之事、永々進置候間、全可有御領者也、
(御承知カ)

寛永六年己巳八月廿一日 家久 御在判

中山王

一六二六

一 田島竿之儀、前々者壹丈三尺式間ニシテ壹竿ニテ候処、
尽御檢見之時分御相談有之、七尺五寸壹間ニ相直候、

如前々六尺五寸ニテモ壹方ニ相究可申上候由被仰付候、

依之我々遂僉儀候者御国元田地六尺五寸賦之由候、尤、

御当地竿入之砌モ右賦之竿ニテ為相濟由承候条、六尺

五寸ニ御召成可然哉ト奉存候、以上、

康熙三拾六年丁丑九月十三日

高奉行

具志頭親雲上

渡嘉敷親雲上

上里親雲上

田場親方

一六二七

琉球国人口概数

一 崇禎八年乙亥 (寛永十二年) 御当国初而牛馬口米代銀

壹疋ニ付式分五厘宛掛掛り候、

寛永十三年丙子

一同九年壬申初而琉球国頭数改有之、

但、万曆三拾七年己酉 (慶長十四己酉) 琉球入ヨリ

二十九年目ニ当ル、

一 頭高拾万八千九百五拾八人

内、男五万三千六百拾人、

女五万五千三百四拾八人、

寛永十三丙子崇禎九年

一同拾壹万千六百六拾九人

内、男五万四千四百九拾六人、

女五万七千七百七拾三人、

寛文五乙巳康熙四年

一同拾壹万式百四拾壹人

内、男五万四千百八拾八人、

女五万六千五拾三人、

万治二己亥順治十五年

一同拾壹万式千七百六拾四人

内、男五万五千七百式拾壹人、

女五万七千四拾三人、

寛文十二壬子康熙十一年

一同拾壹万六千四百八拾三人

内、男五万七千五百四拾人、

女五万八千九百四拾三人、

延宝五丁巳康熙十六年

一同拾貳万貳千貳百拾三人

内、男六万五百五拾八人、

女六万六千六百五拾五人、

貞享元甲子康熙二十三年

一同拾貳万九千九百九拾五人

内、男六万四千貳百三拾五人、

女六万五千七百六拾人、

元禄三庚午康熙二十九年

一同拾貳万八千五百六拾七人

内、男六万三千四百三拾人、

女六万五千百三拾七人、

元禄十二^(十一戊寅力)戊亥康熙三十七年

一同拾四万千八百八拾七人

内、男六万九千九百九拾五人、

女七万九千九百九拾貳人、

宝永四^(三九)丙戌康熙四十五年

一同拾五万五千貳百六拾壹人

正德三癸巳康熙五十二年

一同拾五万七千七百六拾人

享保六辛丑康熙六拾年

一同拾六万七千六百七拾壹人

内、男八万人、

女八万七千六百六拾貳人、

惣合牛馬貳万貳千七百九拾四疋

壹疋ニ付壹升九合四勺七才宛

一口銀代米四百四十三石七斗九升九合壹勺八才

但、是ハ御藏へ入、大和へハ銀子納リ、

一六二八

覚

一牛馬口錢之儀、壹疋ニ付貳分ツ、相納来候処、貳分相

重都合四分ツ、当年ヨリ上納可仕旨被仰渡候、然者於

御当国ニ其分量可相重筈トテ可有之候得共、当時代米

四百四拾四石五斗五升四合八勺六才上納有之事情得者、

此上相重上納候儀及間敷旨被仰出、此中之通取納有之
筭候間可被得其意候、為納得如此候、以上、

享保三年當ル

康熙五拾七年戊戌十月十七日 御物奉行

一六二九

石高二懸ル諸出来

但、反米・賦米ハ大和(鹿兒島総唱)上納、牛馬

口米ハ銀子ニ引直大和へ上納、荒欠地浮得御返濟

出来ハ琉球出来也、

知行并仕明知行高壹石二付、

一反米壹斗壹升四才

但、本知行ニハ三出来無之候、百姓地高ニテ相懸、

仕明知行畠方ハ高半分ニ成シ反米懸ル也、

知行高壹石二付、

一御返濟出来壹升六合五勺式才

但、物成壹石二付六升三合六勺壹才宛、

請地頭作得壹石二付、

一御返濟出来六升三合六勺壹才

但、高壹石二付式升三合四勺式才、雜石ニハ半分引
合、

百姓地并仕明知行・仕明請地高壹石二付、

一三出来三升三合七才

内、是ハ御国元ヨリ壹升四合九勺五才運賃共相掛候

へ共、荒欠地高分モ籠候故、此(空目(眞九)欠数ニ成高二掛

ル、

壹升五合五勺壹才 賦米

壹升七合壹勺八才 荒欠地出来

三勺八才 浮得出来

百姓地并仕明知行・仕明請地高壹石二付、

一御返濟出来式升三合四勺三才

仕明知行并仕明請地・敷請地高壹石二付、

一代官出来入目出来壹升式勺八才九分

但、年々少々ツ、多少有之、

享保十年乙巳ニアタル

雍正三年乙巳四月高所へ此書付被下候也、

一六三〇

手形

本高百石二付、三石六斗八升式合五勺、

右、御当地御高之儀、寛永年間之盛増半分被仰付、都合

御高九万四千式百三拾石七斗九勺四才被仰付、来酉年ヨ

り出物上納可仕由御国元ヨリ被仰出候間、此旨被成承知、

其支配可被致者也、

巳四月廿四日

西平親方

浦添親方

御物奉行

高奉行

一六三一(のし)

琉球国石高二懸ル增高并上木(樹木高方言)高

一高九万八百式拾三石九斗壹合式勺七才二

三石六斗八升式合五勺掛廻候得者右書面高二当、

合之高也

一高九万四千式百三拾石七斗九勺四才

内、九万式千四百八拾九石壹升五合三勺(才脱カ)

内、八万三千八拾四石九斗四升五合八六才(勺脱カ) 前竿

六千百拾九石式斗壹升五合八勺八才 本增高

三千式百八拾四石九斗四升三合式勺六才

新增高

上木高千七百四拾壹石五斗九升五合九勺五才

内、千六百七拾九石七斗三升九合八勺四才

六拾壹石八斗九升六合四勺壹才

新增高

大和(同上)へ上納方

高九万八百八拾三石九斗壹合式勺七才

別竿增高込ル上木

右之内

反米壹万石八斗六升四合五勺

内、式千百式拾七石八斗三合壹勺八才ハ知行方ヨリ

納、余ハ御蔵方ヨリ出ル、

内、高壹石二付八升壹合ヨリ届運賃除ク、

七千三百六拾壹石七斗四升七合四勺七才

本届米

但、此内ヨリ諸御用物代差引仕候而引合、

運賃届壹石二付三斗八升也、此内ヨリ部下リ仕分ケ

式千六百三拾石壹斗壹升七合貳才

内、式千八拾三石五斗壹升三合四合三(勺カ)才貳カ)

本運賃船頭渡

四百三拾三石四升三合九勺七才

部下り届

百三拾貳石五斗五升九合六勺壹才

部下運賃船頭渡

賦米千三百五拾八石七斗壹升四合三勺貳才

内、高壹石二付壹升壹合出届運賃除ク、

千石壹斗六升四合七勺壹才

届壹石二付三斗八升之運賃

三百五拾八石五斗四升九合六勺壹才

内、式百八拾三石六升五合四勺八才

運賃船頭へ渡

五拾八石八斗三升三合貳勺貳才

部下届

拾六石六斗五升九勺壹才

部下運賃船頭へ渡ス

式口合米壹万千三百五拾九石五斗七升八合八勺貳才

牛馬口銀

外、牛馬百五拾四疋、琉球飯屋ニテ牛馬口銀上納

之員数差引仕候得者此分不足、乍然何様之付(付)

二テ候哉、不相知候事、(届カ)

右者、毎年御国元(同上)へ上納反米・賦米年々御下

知有之也、員数替目有之事モ御座候、

名寄帳ニ過高・重高者差引有之候間、左ニ記之、

一過高トハ、御檢地帳引当再檢地仕、本御檢地帳ニ都合

仕候テ、余竿有之時ハ過高也、

一重高トハ、御檢地帳何某地譬ハ四畝有、然処再檢地之

時五畝成節ハ重高也、又下田ヨリ中田ニ成位増候モ同

断也、

三ツサイトウ

一丸木壹本、長壹丈、枯木口五寸、空木口四寸、坪数貳

千三十三坪三分三リ、

右仕様、枯木口五寸ニ空木口四寸ヲカケ式百坪ト成、

枯木口ヨリ空木口四寸引残テ一寸兩ト置掛、扱三ツ割

候へハ三坪三分三リ三毛ト成、右式百坪ヲ加ハ式百三

坪三分三リ三毛ト成、長サ一丈ニカケ式千三坪三分三

り知也、

六ツサイトウ(算術ノ方言)

一 右仕様ハ枯木口五寸ヲバイシ、空木口四寸ヲ加ハ一四
ト成、枯木口五寸ニカケ候ヘハ七ト成、別ニ置、扱空
木口四寸ヲバイシ、枯木口五寸ヲ加一三ト成、空木口
四寸ニカクレハ五二ト成、是ヲ別ニ置、七合セハ一ニ
二ト成ヲ六ツ割、長卷丈ニカクレハ式千三拾三坪三分
三リト成、

大和ヘ仕上セ米届壱石ニ付三斗八升運賃ニ而候処、

三斗八升之内八升者船頭ヨリ大和公義ヘ差上申候付、

又八升ニ三斗運賃相掛仕分様、

一 高壱石之内仕分ケ先壱石起ト置候而、六先ニ而カケ候

得ハ壱石六升先搔ト成、是ヲ右ニ置、左ニ一越六ヲ置、

是ニ運賃三斗八升ヲ加ヘハ一四四ト成、是ニテ右ニ置^(左カ)

候一越六ヲ割候ヘバ届米也、

七斗三升六合壱勺壱才ト成、是ニ又運賃三斗ヲカケ候

テ一越六先ニテ割候ヘハ、本運賃米之式斗八合三勺三

才出ル、

又部下リ届運賃仕分ケ様ハ届之七斗三升六合壱勺壱才

ヲ置、是ニ八升ヲカケ候ヘハ五八八ト成、是ヲ右ニ
置、左ニ一越六先ヲ置、是ニ三斗ヲ加ヘハ一三六ト成、

是ニテ右又八八八ヲ割候得者部下リ届米之四升三合三

勺ト成、是ニ又三斗掛レハ一二九九ト成、是ヲ六先ニ

テワリ候得バ部下リ運賃米之壱升式合勺五才出ル、

但、三斗八升運賃ハ先搔ニテ候故、積高モ又先搔ニ

成、付届サン用仕候也、届壱石ニ三斗八升運賃ト言

届モ先搔ニテ候、而先島ヘ參ル大和船運賃之事右同

断、

一 届壱石ニ付式斗六升先搔之運賃

内、五升四合七勺四才ハ部下リ、此内ニ部下運賃籠

仕分様大和同断、

八重山島

一 届壱石ニ付三斗式升先搔之運賃

内、六升七合三勺七才ニ付、

但、右届米モ先搔壱石ニテ候、

算用目録

一 高八万三千八拾四石九斗四升五合八勺六才^(九カ)

右之外

增高ハ此不足分トモ噲有之、

高六千四拾石九斗式升四合式勺

右者、宮古島高相違ニテ、此節先々除置候、後日御沙

汰可有之候、

寛永五年戊辰五月

(一六三一の2)

上本高除
(木カ)

高八万九千式百四石壹斗六升壹合六勺九才

内、御檢地以後天和二壬戌年迄減高、

式千九百七拾八石五斗六升八合六勺六才

内、千七百六拾七石六斗八升壹合壹勺五才

屋敷道山成分

天和三癸亥年ヨリ宝永二乙酉年迄減高、

五百五拾八石八斗四升九合式勺八才

合三千五百三拾七石四斗壹升七合八勺八才

残而

八万五千六百六拾石七斗四升三合八勺壹才

仕明過重高

千五百拾石五合壹勺七才

芭蕉・唐苧・宝為敷ヨリ成ル

三百五拾三石式斗五升五合式勺四才

合八万七千五百三拾石四合式勺式才

千六百七拾九石七斗三升九合五勺八才之内

上木高千三百五拾石七斗壹升六合八勺六才

外、三百式拾五石式升式合七勺式才ハ芭蕉・唐

苧・宝為敷ヨリ田畠ニ成故上ノ行ニ立、

上木高籠ル現高

合八万八千八百八拾石七斗式升壹合八才

外、式千三石壹斗八升壹勺九才減高、

右、宝永二年乙酉迄取立、

御國中御高総

給地方

御目錄田畠之差分ケ無之ニ付、慶安三寅年国頭親方大

和へ被持登候高究帳之表取立、

一田方四万三千四百八十八石式斗四升七合壹勺三才

内、現高三万九千八百四拾石式斗五升七合九勺六才

外、上木高二籠候故引、

拾六石五斗六升九合六勺式才

芭蕉・唐苧・宝為敷ヨリ成高除ク

引高三千六百四拾七石九斗八升九合壹勺七才

内、千百拾九石九斗貳升壹合貳勺四才

万引高并荒欠地籠 畠過高二引合貳二

五百貳拾八石六升七合九勺壹才減高

高壹石二付四斗六升貳合四勺六才廻代二当ル、

納米貳万百拾壹石六斗七合八勺壹才

内、現高納壹万八千五百三拾八石四斗九升九合六才

引高納千五百七拾三石壹斗八合七勺五才

内、雜石百貳拾壹石六斗九升六勺四才

畠重高納半分引合

米六拾石八斗四升五合三勺貳才

國中出米掛現高壹石二付壹升七合壹勺八才ツ、

米千五百拾貳石貳斗六升三合四勺三才

一畠高四万五千七拾五石九斗壹升四合六勺壹才

外、上木高二籠候故引、

三百三拾七石六斗壹合壹勺八才

荒田ヨリ仕明并万重高 芭蕉・唐芋敷高除ク

千百拾九石九斗貳升壹合貳勺四才

過重田之引高二引合

高壹石二付壹斗八合六勺六才 廻代二当ル

納雜石四千九百六拾七石四斗九升壹合貳勺八才

外、百貳拾壹石六斗九升六勺四才

過高上納荒欠地出米引合

上木高除

合高頭八万九千貳百四石壹斗六升壹合七勺四才

内、八万三千八拾四石九斗四升五合八勺六才

別高

六千百拾九石貳斗壹升五合八勺八才

納貳万五千七拾九石九升九合九才

右之内 御藏高

一高頭五万六拾六石三斗壹升八合九勺六才

内、田方貳万四千四百八石一升四合貳勺三才

納米壹万千貳百八拾七石七斗三升貳勺六才

畠方貳万五千六百五拾八石三斗四合七勺三才

納雜石貳千七百八拾八石三升壹合三勺九才

慶長十六年辛亥御目錄ニ上木高相除、御藏諸士之差分

有之候、且又上木者當時損益有之候故、御藏方召付申

候、

一上木高千六百七拾九石七斗三升九合五勺三才

首尾能様可被致重達候、以上、

御目錄上木納米取立三斗五升廻代ヲ以、當時之上木方

五月八日

大城親方

差引仕候得者過不足有之候得共、現米ヲ以上納之本立

西平親方

不相知候付、内書之通取立申、此代羽地按司代迄書付

浦添親方

トモ相見得申候、

北谷按司

納米五百八拾七石九斗八合八勺三才

鈴木友右衛門殿

内、芭蕉・唐芋・宝為數疎々ハ現米宮相納候処、康

友寄親方

熙三十八卯年(元禄十二年巳卯力)ヨリ敷上納高、
(元禄十三年庚辰)

菊城親方

高三百五拾四石壹斗七升八(空目)之災殃打統、作毛不熟

一六三一

ニテ飯料統兼、百姓及難儀御候故、今程御檢使被差渡

大御支配御受 御内意申上候覚

候儀不相調得吟味ニテ念遣奉存候、依之乍恐奉願候者

一大御支配ニ付而御請并年延御断被仰上候、六月廿一日(脱力)

先キ四五年程被召延被下度奉存候、左様ニ被仰付候ハ、

御仮屋守寄役吉井勘右衛門殿ヲ以和田次兵衛殿被差(脱力)

随分百姓飯料之働申付置、御檢使被差渡候節、滞無之

候処、未何分ト被仰渡儀モ無御座候、

様ニ仕度奉存候、右之御訴為可申上、使者田場親方被

一七月廿二日八ツ後ヨリ郡奉行土師孫右衛門殿旅宿へ被

差上七候、委細被聞召上、何分ニモ可然様御取成御披

差出、嘶カテラニ被申候者琉球之儀御国元一統御支配

露頼存候、以上、
(雍正元年癸卯力)

被仰渡、御請并段々差支之訳ヲ以年延被仰上候、然共

右之通、田場親方ヲ以御訟申上候条、諸事被致熟談、

先四五年被差延候テハ御支配之取締不罷成候、付テハ

和田次兵衛殿

此段會而御取持有之間敷候、兎角遅ク候而來秋之便ニ

ハ御檢使不被差渡候而不叶儀ニ候、然者古田島相シラ
べ、是迄仕明田モ太分有之由兼而相聞得候、慶長之時
ヨリハ人数相増候故、弥人高二応シ田島明増候儀案中
候得者、仕明竿入人数モ千余人不被差渡候而罷成間敷
積候、左様候而者琉球方別而大粧成御物入之筈候、寛
永年間モ御檢地ナシ、盛増之御願ニ而其通ニ相濟為申
事候間、此節モ弥私ヨリ盛増之願申上候而何様可有之
哉ト被申候、依之私答候者、先年盛増被仰付候儀、琉
球ヨリ為奉願儀會而無御座候、人高心シ地方少々明増
候儀者左様ニモ可有之候得共、琉球之儀、当分之出物
サヘ乍漸上納仕相濟来候処、此上出米相重候儀取覚得
不申候、チト稻不熟仕候得者運賃米者不及申、反米之
内ヲモ代銀ヲ以上納仕年モ御座候、当年モ運賃抔過半
代錢ニ而請取候由、船頭共申候断モ承申候、右通國中
殘米少ク、士ニモ無足之者ハ朝夕カラ芋食事イタシ、
尤、百姓共者不断イモニテ一円米ヲ不被下候、且又每
歲大風之災有之、及難儀、就中先キ丑年ハ度々大風仕
候付而悉芋カツラ吹枯、飯料差迫数千人飢死為仕事候、
畢竟貧国ニ而^(食力)物無之、殊隣国モ無之、右仕合御座候、

此様子ヲ以相考候得者先キモ御断申上候通、当分之出
物サヘ兎哉角ト相濟来候処、猶又盛増之願申上儀、會
而存当不申通致返答候、

但、郡奉行御差出候儀、大御支配御座候、隱密ニ能々
為被差遣由、且又旅宿ヨリ被罷帰、宜筋ニ首尾為被
申上由、其方ヨリ委細咄承申候、

一 今度御領國中一統大御支配被仰付候、依之琉球国之儀、
御檢地被仰付候旨申渡候処、近年百姓共飯料統兼及難
儀砌、檢使被差渡候儀差支候間、四五ヶ年ト差延被下
度旨、田場親方ヲ以御断被申出候、然共願之通年数被
延候儀者大御支配方差支候、檢使被差渡候得者百姓共
別而可致難儀事候ニ付、其筋ニモ難被仰付候故、御檢
使者被差延候、^(免力)慶長御支配以來及数十年增高毛有之積
ニ候間、本高百石ニ付三石六斗八升式合五勺宛盛増被
仰付候間、委細之訳者田場親方申合候条可被得其意候、
以上、^(脱力)

享保八年癸卯十月三日

種子島^(久基)彈正

北郷^(作左衛門久彌)虫付

伊集院^(久矩)藏人

島津^(久兼) 全

攝政

三司官

一六三三

在番奉行直次渡箱格護書

条々

一 琉球行之船頭・水主共、多人數之儀候間、万事相慎、無作法之儀無之様可被申付候、滞留中船宿之外脇宿へ罷有候儀、堅令停止之候事、

一 船頭・水手共、酒女之戒ヲ令忘却遊女所へ宿イタシ、猥ニ酒宴遊興イタシ、万端我儘ヲ働、地下人ニ強儀ヲ申掛、剩琉球士方男女ニ於途中無礼ヲイタシ、法外之儀ヲモ為仕者跡々為有之由其間得候、言語道断不届候、向後右体之者於有之者籠舎申付置、鹿兒島へ可被申越候、応科之輕重ニ急度曲事可被仰付候事、

一 従前々琉球上下之船ニ女致往來儀御禁止ニ候間、弥以可相守之、且又船頭・水主船中自分着用之外、刀・脇差・弓・鉄砲并玉葉・具足・鎗・長刀惣而兵具持下儀

堅可為停止候事、

一 船頭・水主、衣類如御定可為木綿布、尤、上帶・下帶等ニ至迄木綿布之外堅令停止事、

一 船頭・水手、御法度ヲ相背候節者寺領ニ而申分ケイタスノ由候得共、向後者各之輕重(各々)ヲ相糺、相応之過料又ハ籠舎可被申付候事、

一 博奕打事、前々ヨリ御禁止之儀ニ候、若相背族於有之者、船頭者致付状鹿兒島へ可被差登、水手ハ百日籠舎申付、其上為科料銀壹枚可被申付之、勿論水主博奕打候ハ、其船之船頭同類ニ而無之候共、同断之過料銀可被申付候事、

一 諸船頭・水主、那覇之外ニ罷出候節者在番所ヨリ手形ヲ出、其日中ニ右之手形可相納之、且又振売之儀者御禁止之儀ニ候處、首里迄モ差越致振売候者跡々為有之由不届ニ候間、向後右体之者於有之者其咎可被申付候事、

一 船頭・水手、万売物カケニ入付儀并借物之方ニ地下人ヲ下人分ニ召成儀堅令停止候、尤、押買押売同断之事、一 船頭・水手、於琉球女房ヲ遣所帶相立候儀、前々ヨリ

御禁止之儀ニ候間、弥以向後堅禁止可被申付候、且又地下人致祝言候付而船頭・水手共ヨリ、或水ヲ懸或祝物ヲ遣致酒宴儀堅令停止候事、

一 船頭・水手、琉球へ居付候儀、従前々御禁止之儀候処、妻子ヲ持多年罷有候者モ有之由不可然候間、右式之者

入念相改帳面ニ委細相記、鹿兒島へ可被差越候事、

一 仕上七米船頭方へ未請取以前ニ運賃米相渡候儀令禁止候、水主飯米無之由断申出候ハ、其船之応人数可被相渡事、

付、私荷物積乗セ候ハ、其品々書出之送状ヲ請取、

鹿兒島御役所へ差出、下知次第自分荷物可請取之事、

一 諸船那霸致出船間切相替、其湊ニ緩々滞船仕候儀令禁止候、且又於道之島致日和待之由ニ而数日令滞留致仕繰候由其間得候、自今以後右体之儀於有之者於鹿兒島御僉議之上、越度ニ相極候ハ、向後琉球下差留、其上曲事可申付候事、

一 在番之奉行并付役替合之節、荷物乗セ下シ乗船之水手、其外爰元ヨリ之下り船之水手ニ可被申付之地下人ヲ召仕候儀令停止事、

一 大清ヨリ琉球へ買渡候糸・巻物、於琉球密々致商売候哉、抜荷物有之由其間得候、縦地下人ヨリ船頭・水手共へ唐買物之品々密々相払度之由申者有之候共、曾而買取間敷候、若此旨致違背之輩於有之者急度可被申出候、稠敷其咎可被仰付事、

右条々、堅固相守候様、船頭・水手共へ可被申渡之、船頭・水手御法様ヲ疎ニ存、御掟ヲ令忘却、惣而驕ケ間敷儀而已有之由候、毎月朔日在番所へ召出之、此条目之趣慥ニ可被申聞之、若相背者於有之者可被遂披露候、為見懲ニ候間、御僉議之上其科可被仰付候、尤、

此条書在番代合之節、慥ニ可被継渡之者也、

元禄十三年庚辰二月三日

肝付主殿(久兼) 印

種子島藏人(久時) 印

島津中務(久勝) 印

琉球
在番奉行

一六三四

那霸市街水利

覚

一 落平水^{オチン}琉球方差立候用水所之船々者船手方板印相立可參候、其節者前後無構先番ニ水トラセ可申事、

付、大和船并地下人共ニ最初ヨリ水取掛居候者其船

ヲ限水取仕廻、板印相立候船へ可相讓候、

一 船頭・水主^{オチン}落平水取方之儀、地下人水取掛居候節者取

仕舞候迄相待、夫ヨリ船何艘罷居候共前後無構先番ニ

水取可申事、

一 於水取場地下人小船等ニ乗組罷在候節モ無用捨橋船ヲ

乗懸、又者自由ケ間敷儀共申懸候者モ跡々為有之由候、

向後右体法外之儀、曾而致間敷候、若理不尽之致方相

聞得候者吃下可及沙汰候事、

一 落平水取場、大和船ヨリ最初一凹取拵置、于今修甫等

モ仕来候様相心得候者有之由候、其内修甫迄ヲ相調候

儀者為有之由候得共、右用水之儀者専仮屋用并諸人用

事ニ而、琉球方ヨリ取仕立為被置場所候条、以後右式

之心得違有之間敷事、

付、此已後水取場及破損候共、無免許大和人ヨリ修

甫致間敷候、此旨琉球方定式ニ相見得候事、

右者、落平水取方前後之儀ニ付、此節及口論致喧嘩候

処ヨリ、以後何様有之可然哉之旨琉球方相談ニヲヨビ、

此節ヨリ右之通相定候条、具得其意、向後大形有之間

敷候、尤、那覇・久米村并地下之船々へ者琉球方ヨリ

被申渡置咎候条、大和諸船頭共致得心、水主之者共水

取ニ差越候節、時々右之趣申聞可差遣候、此旨至後年

不致忘却堅固相守違背有間敷者也、

延享五年戊辰六月

一六三五(の1)

琉球詰見聞役方格護書

琉球在番奉行

御船奉行

近年琉球登リ船遲滞候処、順風取後及難船等御物御不

益者勿論、琉球方并諸人至而及難義候間、以来左之通

申付候、

一 琉球下リ船々、是迄者船仕廻等之申立ヲ以日延願出来

候得共、以来者取揚間敷候、乍然江戸・大坂等之御用

船相勤、間後レニ相成候モ有之候ハ、吟味之上差免候

儀モ可有之候、其外日延願者一切取揚間敷候、

一 琉球下り諸船、御当地出帆・琉球着之訳在番奉行方へ
碇先帳調置、詰横目立会之上嚴重相記置可差越候、

一 琉球下り船之儀者琉着四月廿日限定置、其外段々申渡
置越有之候処、色々致申分、致延着限廻ニ相成候モ有
(趣力)

之候得共、何ゾ心付等之証文船者遅下リニテモ証文通
之積荷者相渡、無証文之船者証文通ヨリ致早着候テモ
積入方不申渡候処ヨリ、都而諸船後立ニ相成由候、依
之四月二十日限ニ致着候船ニ者証文通之積荷相渡、廿
日相過候ハ、証文船ニテモ無構、春下リ・秋下リ夫々
碇先順ヲ以積荷可申付候、左候而、其趣碇先帳ニ相記
置、年々在番ヨリ可差越候、尤、積入申渡候ハ、出船
迄之間船頭ヨリ日和書為差出、琉球方役々見届致次書
可被差越候、左候テ、積仕廻候ハ、早速出帆可申渡候、
自然乍此上相滞儀モ候ハ、山川着船之上委敷可相糺事
候間、役々越度可相成、船頭方不埒之儀モ有之候ハ、
年数内ニテモ琉球下リ可差留、心掛宜船者褒美之船稼
可申付候間、船々遅速相記置、年々在番ヨリ可申越候、
一 積免之儀、船々致着候テモ直ニ不相渡、相滞候ニ付船
頭共ヨリ色々訴訟申出、詰役々へ音物等遣候由相聞得、

別而如何之至候、自然此上右様ニテ相滞儀モ候ハ、糺
方ヲモ可申付候条、船々下着次第則積免相渡、積仕廻
候ハ、早速出帆申渡、何月何日積免相渡、何日出帆之
訳在番ヨリ每船其届可申越候、

一 先島下り船之儀者是迄有來通之仕向可取計、

一 琉球方積穀寄方埒明兼候処ヨリ滞相成候儀モ有之由候、
依之積船之儀者船賦証文相渡次第、御船奉行ヨリ写ヲ
以在番方へ可差越、左候テ、琉球ニオイテ年々積登リ
候米高之見合ヲ以応反帆致船賦置、着船次第積免相渡、
諸船頭交易モ可差免、若諸船出帆時分迄モ着不致船モ
有之候ハ、殘荷之分者諸船汰積申付、秋下リ之船之
儀モ同前年々出来高ヲ以致船賦置、着船次第積免相渡、
為積入殘荷物有之候ハ、是又諸船汰積可申付候、
一 船足之儀ニ付而者吃卜定置候趣有之候処、諸船頭共自
分勝手筋ヲ以足廻積入、定通之船足積入、見分之役々
ヨリ船見証文其船々へ可相渡、着船之上御法違之船足
於有之者船見役々越度可相成候、
右之通取締申付条、琉役々へハ琉球館ヨリ申越候様申
渡、其外可承向々へモ可申渡候、

寛政元年巳酉五月

(二層奉行目)
主計

(一六三五の2)

右之通、酉五月八日山田弥九郎御取次ニテ被仰渡候間
被得其意、無間違首尾可有之候、以上

酉五月十日

御船奉行
安藤佐次兵衛 印

琉球在番奉行衆

右同横目

一六三六(の1)

漂流船取扱

天明元丑年七月廿五日船頭内之浦之仁左衛門船那覇川
致出帆候処、逢逆風西之方へ被吹流、打荷等イタシ、
少々風波静相成候上乍漸真壁間切冲迄折走ニテ乗来、
獵船ヨリ水主老入卸来、届申出刻、挽船手当申渡有之、
同廿九日七ツ時分那覇川へ挽入、難船打荷等イタシ候、
船へハ琉球方ヨリ番人付至規模ニテ其取計有之、八月
二日ヨリ琉役立会、荷役相初惣荷物并積入之米及改方
候処、俵数不足有之、其分者船頭ヨリ於御国許送状通
ニ差足上納之願申出、右願出^{書方}へ添書ヲ以琉球方へ問合

有之処、走戻り、船御物不足分者船具之外船頭自物着
替迄モ取揚、御物ニ差足、其上及不足候得者琉球方ヨ
リ差足、積入候筋被仰渡候由ニテ、右之御証文写取添、
琉物奉行ヨリ申出候得共、琉球へ走戻り候節、其通ニ
取計候様ト之御証文ニハ不相見得、殊ニ御用布積川早^{小早船}
船兩艘之内老艘者破船、浮荷ニ相成候、御用布汐濡相
成汐出シ等之手入有之候へトモ、御用立極合未相分、
御米モ老艘向ハ流失相成、御国許彼是御差支之筈候間、
老艘向成トモ早々為差登候方可然、在番奉行初詰役中
吟味ニテ、右仁左衛門船不足米者御国許ニテ御法様通
上納被仰、今様申上越出帆申渡候、見聞之成行、詰横
目白石幸左衛門難船差引御届書之趣意書拔置候事、
琉球国王幼稚ニ付、分而見聞之次第左条之通申付候、
一国王幼若付而者、撰政者勿論役々之不依高下、第一琉
球一統静謐之儀、専不心掛候而不叶筈候処、万一役目
之内自儘ヲ働、類ヲ集、無私精勤之者ヲ退ケ、先代ヨ
リ之仕向ヲ妨面々之勝手ヲ取り、百姓末々ニ至リ及迷
惑候振合之儀共者無之哉、勿論役目之内不致熟談ニ派
立候向之儀共有之候而者不可然事候条、右旁之儀共詰

中委敷氣ヲ付、見聞之趣可申越候、何ソ右様之子細無之候ハ、其趣是又同断可申越候、

一 渡海之役々ニ対候儀共、是又先代ニ相替、万端之儀共粗末之振合者無之哉、此儀モ何分可申越候、

右之通、着涯ヨリ一涯氣ヲ付罷在、随分手拔之儀共無之様、交ニ同役申談心掛可相勤候、尤、代リ合之節者、儲ニ同役へ可次渡置候、

正月

駿河

(一六三六の2)

右、享和三年癸亥正月三島長藏・山田増右衛門へ被仰付渡海之上、何ソ先代ニ相替儀無之、且又可申上程之儀見聞不仕段、夏便ヨリ御届申上候筋相見得候事、

一 大島之儀、病用暇ニテ琉球へ致渡海候者共、滞在中入目料トシテ芭蕉類過分持越、又者余島へ為稼方差越候筋ニテ琉球へ持渡リ、依事者大島屋喜内・西間切之間へ高鑑船致漂着、是又芭蕉類致交易候由相聞得候、屋喜内間切之儀者芭蕉位モ宜場所故、御用分申越儀候処、右故ニテモ候哉、御用分上納致不足候、畢竟島人共勝手筋ヲ存売出候処ヨリ右次第甚以不可然事候、依之向

後上納方不相濟内者琉球并余島へ売出候儀、其外商売方一切差留、上納方都テ相濟余計有之節者売出儀勝手次第申付候、右ニ付テハ島役々氣ヲ付、諸船出入役方等之儀緩々ノ儀無之様、屹ト取締可被申渡旨、大島代官・横目へ被仰渡候条、於琉球モ右之趣ヲ以取締有之候様可申越旨御差圖ニテ候、以上、

天明五年乙巳三月七日

大野掃部

琉球

在番奉行

横目

一六三七(の1)

宮古・八重山二島運賃定例

琉球之内宮古・八重山行之運賃、部下之趣如何様可有御座哉、三司官衆ヨリ各方迄覚書ニテ被得御意候条、黒葛^(忠以)原吉左衛門殿ヲ以得御意候、右運賃部下リ之儀、琉球方自米漕船候、然共従前々為差定運賃之儀ニモ候間、本琉球ヨリ御当地迄、米積登候運賃之割ヲ以部下リニ可被申付候旨被仰渡候条、部下リ米御当地へ納儀ニテ無御座候間、右之通可被仰出候、以上、

延宝八年申六月十四日 新納喜右衛門 印

康熙三十八年己巳正月廿五日

御物奉行

(一六三七の2)

一 櫃壺ツ 高壹尺七寸式分四寸式分ヒ壺尺五寸

積間五斗九升三合

一 樽壺ツ 高式尺サシ渡壺尺九寸

同五斗

一 焼酎百盃

同五斗

一 菜種子油百盃

同五斗

一 上布式拾疋

同式斗五升

一 下布式拾疋

同式斗五升

一 綿子三拾把

同式斗五升

一 鬱金百斤

同三斗五升

一 黒繼繩百房四九

同壺石

一 棕栢切付肌付壺通 包莖共

同三升五合

一 提重壺ツ 家共

同寸尺次第

一 割為細目莖壺束

同式斗

但、アラメ莖并備後莖、

一 牛皮壺枚 斤目十斤

同三升九合壺勺

一名護砥壺丁 同三升

一 黒砂糖百斤 同四斗

一 サンサトウ百斤 同四斗

一 水砂糖百斤 同四斗

一 砂糖積冬瓜 壺斤壺壺二入 同式升

眞壁親方

有馬次兵衛殿

(一六三七の3)

去年(延宝七己未)ヨリ米高直ニ有之ニ付、任先規琉球運賃米諸方同前ニ壺升五合下里去冬申渡候、右壺升五合ノ部下リ米者別ニ払方之見当有之儀ニ候間、高所へ送状相付、船頭運賃同前ニ從船々以差荷可被積登候、尤、砂糖・鬱金積入候船々、米同前二代銀・代米之間ヲ以部下リ候分上納可有之候条、此旨琉球へ可被申越候、以上、

延宝八年申五月十六日 御物座印

黒葛原吉左衛門

(一六三七の4)

手形

米老升五合先搔

右運賃米之内、部下り分船々ヨリ以差荷可積登セ由候、砂糖・鬱金積合船モ同前上納可仕候由、御物座ヨリ被仰付候間、銘々送状相認可被差出候也、

康熙十九年庚申三月廿日 福地親雲上

西原親雲上

野国親雲上

平安座親雲上

具志親雲上

安次嶺親雲上

仕上世座

役人中

一六三八(の1)

往復船積間定例

使者乗船屋形間、此中ハ此方ニ不構使者ヨリ内証ニテ為相濟儀ニ候、其二付屋形間如何程ト未相究区々ニテ難仕儀共有之候間、伊東次郎右衛門殿へ得御意、諸船頭引合屋形間之例此節ヨリ如斯相定候間、向後右之例可被用者

也、

寛文十三年癸丑五月十六日 三司官

御物奉行

(一六三八の2)

右之通屋形間被仰定候間、堅固ニ可被相守候、勿論役替之御無失念可被次渡者也、

丑五月十八日

御物奉行

仕上世座

役人中

一六三九

改元布告

今度年号延享ト被相改候旨、二月二十九日於江戸被仰渡候段申来候間、奉得其意、二月二十九日ヨリ諸書付等ヲ延享ト可相改候、此旨支配中へ被申渡、琉球へ可被申越儀ハ例之通可被申渡者也、

三月二十一日延享元年

御家老座印

御勝手方

右之通被仰渡候間、御問合申上候、以上、

大田喜左衛門

木村孫次郎殿鹿兒島ニ在ル琉球館開設

一六四〇

一六四一

御家譜編集書類云々

幕府琉人ノ書ヲ求ム

御家譜編集御用相成候、御返翰之内跡方無之儀、御記録方へ程能被申談、写差出相濟、且是迄唐物方御用聞之者致支配候牛馬皮館内計ヒ願、且去年進上物登不足之内、琉産之品当夏迄御延之願、且宮古島・八重山島定式下り大和船新壺積入、凶作ニテ積壺無之候ハ、空間運賃不相渡様被仰付度願、且宮古島重ミ下大和船、以來空間運賃不相渡様被仰付度願、且公義御用之蒸干鬱金、以來於当地唐物方へ差出候首尾合、并売上鬱金欠斤相立候節、船頭弁へ被仰付度卜ノ願等引請被相勤、夫々願^(空言)相立、其外為筋之儀共被致熟談候由、譜久村親方申越之趣令承達、誠ニ出精之程忝存候、冠船(冊封船ノ通唱)渡来モ既ニ来々年之事候処、当地館内共極難渋之折柄故、今以手当銀大半及不足心配之事候条、此涯猶以出精、万端宜相調候様被取計度頼存候、御別紙之通、

江戸為御用久米村人自作自筆之詩文、真草行ニ相調来夏可差上旨被仰付候間、此節相認申候、各衆モ於其元二右通三通ツ、相認、来夏可被差渡候、糸立ヨリ差上セ可申候字賦之議者両大通事・脇通事相談ニテ可被相認候、乍不申作為筆法等随分入念可被成候、以上、

康熙四十七年戊子十月日記寛永五年^(宝永五年也)

十月二十四日^{延享二年乎尚可考}高良通事親雲上

志多伯親雲上

志多伯親方

奥間通事親雲上

一六四二

新井白石詩文ヲ清国ニ遣ス

覚

四月十五日同上

東風平親方

新井勘解由殿詩文唐へ持渡、翰林学士之衆へ見セ席書申

請、外間親雲上持来首尾被申上候、右札銀金子貳百疋去

五月十日

武富親雲上

年詩学同前ニ被持渡候処、其付届等何分等不被申上候、

宜保親雲上

依之御差因候者右首尾方江戸迄モ御問合有之筈候間、詩

牧志親雲上

文翰林学士之衆へ見セ且又右御札銀モ進申候処、成程辱

被存候、其段外間ニテ相逢候様ニト返答仕候趣、外間意

趣ニテ漢文法ニ相調、早々被差出候様ニ可被申渡候、以

上、

康熙五十三年甲午四月日記(四之)日本正徳五甲午

湧川親雲上

四月

両長史

又四月十五日

長史

安次嶺親雲上

一六四三

遣清使属吏給与

康熙四十九年庚寅正月日記宝永七年

福建ヨリ北京迄五拾八宿、每宿ニ使者一人ニ付一日ニ銀

貳匁宛、大通事以下八卷人ニ付壹日ニ銀五分宛駄路銀ト

テ宿々ヨリ被下候、

右、北京上下唐ヨリ被下候路次銀如斯ニ御座候、以上、

一六四四

那覇港ヨリ福州迄海路上申

琉球那覇之津ヨリ本唐福州閩安鎮津口迄四百八拾里程有

之由伝承申候、里積之儀ハ三拾六丁ヲ壹里ニ積相計申候、

何ソ書留等ハ無之、口伝迄ニテ承之候、御尋ニ付テ如斯

御座候、以上、

雍正二年甲辰又四月日記享保九年

一六四五

渡唐金数定

渡唐金壹万三千四百兩ニ被相定候節、御老中大久保加(忠)

賀守様御宅へ(地)中將様(吉貴公)御出被成候様ニト被

仰遣候二付、島津中務殿・伊勢権兵衛被召列御出候処、渡唐金減少被仰付候、次二段々被仰渡候得共、進貢使船往来之人目多候二付、大分ニ減少訳積候テ及詮議、金千式百兩減少候テ、右金高二ハ被相定タル儀ニ候処、新金銀ニテモ古金銀ノ高同前ニ入用相調候筋ニテ、新金銀之位引入候テモ渡唐方ハ相調筋相聞得候得共、前後相障ノ儀有之候間、此節増金之願国司ヨリ可被仰出時節ニ候、

一 増金之積ハ古金壹万三千四百兩之積ニ新金ヲ以合候程之重金被差渡候儀、御免被成下度旨ニテ可然候、右願之儀ハ当夏中国司ヨリ使者鹿兒島迄被為差越候テ可然候、其以後江戸へ被相伺、御差図次第被仰上ニテ可有之候、以上、

二月

一六四六

覚

此節從 御勝手方御座唐買物用トシテ古銀百貫目被差下

候、於唐ニ何ソ支之儀者有之間敷候哉、存寄之程可申上旨奉得其意候、私共吟味仕候処、往古ヨリ渡唐船一艘ニ付銀高五拾貫目持渡由書付、奉行衆へ差出、今以其通仕来候、唐役人段々船へ乗、往還共荷物相改、銀子ヲ可取企ニテ様々違乱ヲ申掛候儀、此間度々御座候、若嚴密之改共被申付候ハ、可致様有間敷ト念遣奉存候、唐之儀、時々ノ奉行衆了簡次第ニ候得者何分ト究テ難申上候得共、銀高多買物相増候程何角之申掛、買物之障モ出来可申哉ト奉存候、此等之旨宜敷様ニ被仰上可被下候、以上、

康熙四拾四年乙酉十一月記(宝永二年カ)元禄十六年

十一月七日

長史

諸大夫

親方

一六四七

康熙三十四年乙亥二月日記元禄八乙亥

(光久) 中将様御逝去ニ付、首里・那覇・久米村・泊中申江座敷(口カ)

勢頭座敷并諸座大屋子筆者筑登座敷迄、御城并御奉行所明十日ヨリ明後日マテ御悔被申候様可被触渡旨、御差図

ニテ候、以上、

亥二月九日

田島親雲上

宇地原親雲上

皇主

御物城 ミモノクダス

両長史

志多伯親方・古謝親雲上・宮城長史白衣裳ニテ登城仕、

下 (庫裡カ) 理御悔帳ニ書付申候事、

一 康熙四十三年甲申（宝永元年）十一月十四日稻衣親雲

上ヨリ長史御用之由御座候付、許田親雲上罷出候得者、

中将様御死去ニ付、御役屋へ 上様御行幸被為遊候間、

其心得可仕由被仰付候間、諸士右之段触渡候事、

一六四八

家宣公薨去ニ付テ使者

公方家宣公、十月十五日

被為成葬御候付、御悔之御使者可被差越旨、此節御家老中ヨリ以書状申越候、右付書

翰之儀、去巳年（元禄十四辛巳）綱吉公葬御之節、御悔

之書留御老中様ヨリ之御返翰之趣ト国王様ヨリノ書翰之

趣不相応候、且亦去々年琉球使者於江戸拝領物之御礼之

書翰、当春上間親雲上方ヲ以被差越候節モ鹿兒島ニテ書

翰認直、江戸へ被差遣候、其案文上間親方へ渡置候間、

旁見合、来年被差上候御悔之書翰致吟味候、相認可被差

越候、

書翰之儀、吟味之上認可被差越事ニハ候得共、乍其上相

替儀モ可有之候間、御判紙余多被差越候様ニ可申越候、

書翰仕立様之儀モ以前ニ相替候、其段者先達テモ相認候

間、猶其通可有之、右御悔之書翰宛所之儀、左之通ニ候、

書簡忝通

井伊掃部頭様 (直致)

同 忝通

大屋相模守様 (土屋相模守致直之)

同 忝通御連名

秋元但馬守様 (備知)

大久保加賀守様 (忠増)

井上河内守様 (正忠)

阿部豊後守様 (正徳)

右之通得其意、委細琉球へ可申越候、以上、

康熙五十二年癸巳五月日記正徳三年

十一月八日

一六四九

国曆調整

雍正七年己酉三月享保十四年

御当国曆之儀、康熙九年庚戌年（寛文十年）ヨリ唐法ニ調方被仰付、曆役御扶持方米式石五斗、又ハ為御慶賞米五斗御引出物被下候処、中比御簡略ニ付テ御扶持方之内ヨリ五斗ハ減少被仰付、僅ニ石ノ御扶持方ニテ相動来候、然者曆調候儀、毎年三月ヨリ凡付歳末迄ニ相仕廻、忝人ニテノ勤、殊ニ此節ヨリ御用多罷成、万日撰等迄相重被仰付、旁以繁多之勤ニ御座候条、右御扶持方ニテ統兼候体見及申候、依之難申上御座候得共、向後ハ三石ノ御扶持方ニ被仰定度奉願候、此等之趣宜様御取成御披露頼上候、以上、

三月十九日

幸喜親雲上

饒波親雲上

名護親方

一六五〇

在番藩吏其他ニ対シ礼待心得達書

一御在番衆御家来・船頭・水主共へ常々応答律儀可仕事、
付、於中途若輩之者トモ聊爾仕儀於有之者問役人見届披露可仕事、

一御国之人ヨリ万売物賭ニ請取間敷事、

付、売買ノ諸色引替仕儀制外候事、

一取次役以下那覇罷下り候砌、泉崎橋口西門、右門ニテ

下馬可仕事、

付、下々之者首里・那覇・泊之間馬乘間敷事、

右之通、銘々ヨリ段々雖申渡置候、猶以堅固可相守候、

若違背之族於有之者急度其沙汰可申付者也、

康熙四十五年丙戌九月日記宝永三年

九月九日

識名親方

越来按司

一六五一

火薬倉取締

兵具御蔵御作事ニ付、塩硝并御道具今月二十日波之上拜殿（那覇市護国寺ヲ云フ）へ差越申候間、諸人出入、且又彼近辺火持參不仕候様ニ久米村中被仰付可被下候、以

上、

康熙四十七年戊子五月日記宝永五年

五月十八日

兵具當

儀保親雲上

一六五二

覚

恐多御座候得共申上候、塩焔(硝力)御藏之儀、前々ヨリ御仮屋
 内(在番奉行官宅)ニ御格護御座候処、万一出火共有之
 候ハ、一大事ト被思召上候儀、御尤至極ニ奉存候、然者
 此節若狭町村・久米村之堀ニ御移御格護被仰付由御座候、
 依之相考候得者康熙三十五丙子年(元禄九年)福州塩焔
 御藏ニ出火有之、近辺之野山、葦林寺ト申大伽藍并人家
(大抵方)
 大糖ニ吹散、其上風下之方ハ城之國石垣吹崩、外村迄モ
 焼損為申儀ニ御座候へハ、久米村・若狭町村之儀、僅ニ
 三町之内ニ有之、別テ久米村之儀ハ往古ヨリ唐往還之案
 書格護仕置候間、弥念遣至極ニ奉存候条、別所ニ御格護
 被仰付被下度千万願ニ奉存候、此等之趣宜様ニ御取成奉
 頼候、以上、

康熙六十一年壬寅諭議書享保七年

九月

池宮城親雲上

一六五三

琉球薬価

覚

ナラシトメ(琉言)一服之両目四匁考

一煎薬壹服

代錢五百文(寛永通宝一個ヲ五十文ト唱

フ、故ニ日本価ニ換算スレハ二十五文ニ

当ル、以下同シ)

但、右之通、壹服之定代被仰渡候得共、若薬味之内

病人方ヨリ出候品者其節納戸方御立直成ヲ以テ右薬

代ニ差引可致候、

一膏薬壹寸カク壹枚

代錢五百文(同上)

一粉薬・付薬代錢之儀者右セシ薬・膏薬代ニ準シ可請取

候、

但、此以前通例ニ用來候粉薬・付薬代錢者本文之通、

此外格別高直之薬ヲ以致調合置候粉薬・付薬代錢者

其薬味之代錢ニ応シ取納可有之候、

一葉代之儀、葉服用召留以後六ヶ月目ニ取納可有之候、
若右月限致相違候ハ、式割利付ヲ以月限相立、証文ヲ
以可致取納候、

一此以前用得置候葉代、于今不相払方ハ右定代ヲ以当月
ヨリ六ヶ月目ニ取納可有之候、若右月限致相違候ハ、
取納方右同斷、

右之通被仰出候間、支配中堅固可被申渡旨御差図ニテ
候、以上、

雍正七年己酉閏七月日記享保十四年

閏七月七日

保榮茂親雲上

安慶名親雲上

一六五四

渡琉者武器禁止

近来琉球人於御当地刀・脇差ヲ相求、磨拵等相調持渡者
有之由其聞得候、琉球国之儀者御領内之儀ニ候得共、向
後刀・脇差・弓・鉄砲其他兵具等琉球へ持渡儀ハ一切御
禁止之事ニ候間可得其意候、尤、於琉球致所持候刀・脇
差、御当地へ持渡拵等相調候儀御構無之候間、於琉球寸

尺并作相知候ハ、其段相糺、在番ノ奉行へ申出之証文ヲ
被持渡、琉球方取次川村少左衛門へ渡置候、帰帆之節少
左衛門ヨリ裏書ヲ取可持下候、異国へ刀・脇差其外兵具
等差渡儀者公儀御大禁之御事候故、琉球国之儀ハ渡唐口
之儀ニ付テ別テ被入御念御事候、若右之旨致違背於御当
地刀・脇差・兵具類相求、密々持渡候者有之於令露顯者
評定所へ申出、急度御沙汰可有之、此等ノ趣詰中之面々
へ堅可申聞候、尤、右之段者三司官中へモ可申越候、聊
緩疎有間敷候、以上、

康熙三十八年己卯九月日記元祿十二年

閏九月二十五日

新納美作(入珍)

一六五五

那霸護国寺幡銘

南泉院幡之字、古波藏親雲上致相談相調得申候事、
付、左二記之、

護国祐民大政臣威武英靈征夷大將軍宝幡、護国祐民大
臣威武英靈征夷大將軍東照大権現宝幡、

康熙五十一年壬辰三月日記正徳二年

三月十三日

一六五六

琉球人幕府へ応答心得訓示

覚

一大和（琉人鹿兒島ノ総唱）往還仕候哉之由御尋御座候

ハハ往還不仕由申上可相濟ト奉存候、

一 武具之類御尋御座候ハ、少々有之見候得共、何方ニテ
作り候哉然ト存不申由申上可相濟ト奉存候、

一金・銀・銅・鉄・（胡椒）糊枿・（蘇考）スワウ国中ヨリ出候哉之由御

尋御座候ハ、若輩ニテ存知不申由申上可相濟ト奉存候、

一 唐国ヨリ買渡候糸商売仕候哉之由御尋御座候ハ、商売
者不仕、衣裳作り候ト申上可相濟ト奉存候、

一 扇子・刻箱・紙・キセル何方ヨリ参候哉之由御尋御座
候ハハ七島ヨリ年貢仕由申上可相濟ト奉存候、

一 曆之御尋御座候ハ、福州布政司ヨリ被下受用仕ト申上
可相濟ト奉存候、

一 官人之祿御尋御座候ハ、存知不申、我々ハ一人ニテ一
年ニ米四拾カタメ被下由申上可相濟ト奉存候、

一 三十六姓（明人種）御尋御座候ハ、子孫相絶、蔡・梁・
鄭・林・金相残候由申上可相濟ト奉存候、

一 学校有之哉由御尋御座候ハ、有之由可申上候、師匠之
儀ハ御扶持被下被立置候ト申上可相濟ト奉存候、

一 孔子御祭之儀御尋御座候ハ、二八月初之丁ニ御祭仕候、
規式ハ礼生存候ト申上可相濟ト奉存候、

一 葬服・葬礼御尋御座候ハ、葬服三年仕候、葬礼ハ有之
候得共不相知候、茶毘之儀ハ十日内ニ仕候ト申上可相
濟ト奉存候、

一 琉球国如何程有之哉之由御尋御座候ハ、如何程有之候
哉不存由申上可相濟ト奉存候、

一 府県有之哉之由御尋御座候ハ、八府二三拾六県有之由
申上可相濟ト奉存候、

一 国中ヨリ出候上納御尋御座候ハ、不存由申上可相濟ト
奉存候、

一 百姓食物御尋御座候ハ、五穀有之食仕ト申上可相濟奉
存候、

一 書物板行有之哉之由御尋御座候ハ、板行有之候得共、
古ニ候テ唐之書物之様無之由可相濟ト奉存候、
（申上脱力）

一琉球女袴着可仕哉之由御尋御座候ハ、着仕候ト可申上候、

一里木之儀御尋御座候ハ、大平山ヨリ参候得共、余多無之由申上可相濟ト奉存候、

右北京秀才於彼御地ニ御尋モ御座候半、我々論議仕可申上ト被仰付候間、相談仕候条々乍恐如斯御座候、以上、

康熙二十五年丙寅十月貞享三年

諸大夫

都通事

一六五七(の1)

益ノ文字称呼ヲ停ム

写

今度御誕生之 御若子様へ益之助様ト御名被進候間可奉

承知候、尤、益之字ヲ名并名字ニ用候儀、向後無用可仕

候、助之字不及遠慮候、乍然松之助・跡之助類唱似寄候

名、且亦益之字ニテ無之候テモ、マスト唱候字ハ惣テ遠

慮可仕候、此旨支配中へ不洩様可被致通達候、以上、

雍正六年戊申十月日記享保六辛丑(十三戊申九)

八月九日

御勝手方

(一六五七の2)

右之通、此節被仰渡候間、御書付之筋堅固ニ相守様、各
噺中不洩様可被申渡者也、

十月

御物奉行申口

三司官

一六五八(の1)

幕府ニ対シ文字及ヒ称呼遠慮布達

覚

吉宗 重豊

右之文字名乗之字ニ用候儀、向後無用可仕旨、且又右之

文字ニテ無之候テモ、ヨシ又ハムネ・シケ・トヨト唱候

字迄惣テ遠慮可仕ト存候ハ、心次第相改可然候、此旨支

配中へ不洩様可被致通達候、以上、

雍正三年乙巳四月日記享保十年

正月

大藏

御勝手方

(一六五八の乙)

右之通、和田次兵衛殿御取次ニテ被仰渡候間、此段御問合申上候、以上、

二月八日

吉井勘右衛門

一六五九

齊宣ノ文字及ヒ称呼停止

太守様 御名 豊後守様ト御改被成候付、 豊之文字

名并名乗ニ用候儀、同唱迄モ可致遠慮候、

一御実名齊宣公ト奉称候間、宣之文字ハ遠慮候、

右之通、去々未正月(天明七丁未)被仰渡候段、此節

琉球館ヨリ申来候間、童名并唐名名乗ニ付居ル者ハ急

度可相改候、尤、名字ハ不及遠慮、此旨申渡候、以上、

酉二月二十六日寛政元己酉 三司官

一六六〇

寛政改元布告

大和(同上)年号、当二月三日寛政ト被相改候旨、当月

八日到来候間、同日ヨリ用候様可被申渡者也、

酉三月十五日寛政元己酉 三司官

一六六一(のイ)

唐紙模製ノ為換籍琉人

除証文

当年拾七歳

御小人 新垣仁右衛門

右者、琉球人新垣ニヤニテ御座候処、天明七年未八月十

五日篠崎藏^(仲泰)太左衛門御取次ヲ以代々御小人ニテ日本姿被

仰付候間、後年手札御改之節ヨリ此方帳面相除申候間、

御方帳面可被書載候、尤、御法度之宗旨ニテ無御座候間、

除証文如斯御座候、以上、

但、琉球手札之儀者御改以後ニテ琉球館へ相届不申候、

当年夏便ニ差越筈ニ御座候、相届次第差上可申候、

天明九年酉正月

琉球館聞役 矢野直之進

御小人頭衆

(一六六一の乙)

右之通被仰渡候段、今般琉球館ヨリ申越候間、右拘主并

身近キ親類へモ承知為仕、其首尾可被申出旨御差図ニテ

候、以上、

酉四月廿一日

山川親雲上

里主

御物城(成カ)

此新垣ナルモノ、父ハ清国福建ニ在リテ紙製ニ從事シ、其法ヲ得テ帰琉後、重豪公聞シ召シ、鹿兒島ニ召シ唐紙製造ヲ命セラレ、種々模製シタリト云フ、而シテ記スルカ如ク御納戸支配御小人ニ登用セラレ、子孫今ニ在リ、

一六六一

木綿実油食用禁令

御領國中灯油不足末々ニ至不自由之由相聞得候ニ付、此節木綿実ヲ以油灯方申付、追々売出管候、右油之儀者、食事ニ召仕候儀者禁物ニ候、紫根若交澄候得者赤色ニ相成由候ニ付、無紛タメ右之絞方申付候条、食物ニハ一切加ヘ申間敷候、就中幼稚之者共ヘ氣ヲ付可申候、右之通、向々ヘ不洩様早々可申渡候、

五月同上

安房

一六六三(の1)

御膳賜リ

大宜見王子御膳進上・御料理拝領・磯御茶屋へ被為召又者御暇御給候儀、段々御急キ御日割被仰渡候得共、今般御初入部ニ付テハ段々之御規式御座候間、当月廿二日御暇被下候、御日賦リ之段兼テ内々承知仕候ニ付、右通被仰付候テハ、表向者勿論、脇々御付届モ太分之上、役々以下モ多人數之事ニテ、夫々之付届又ハ町方引合等之儀、何分差急候テモ正月中相掛リ、二月ヨリ先帰帆之管候得者、二月中ハ関日ト申風並不定ニ有之、遠海乗渡候儀、跡々ヨリ致遠慮事ニテ於野津カラ三月帰帆ニ可相成候、然者琉球之儀船數少ク、当分罷登居候船々ニテ正使(副カ)別使乗船之手当ニテ、何レノ筋正月中帰帆不致候テハ船修甫旁ニ日數ヲ込候故、江戸立出帆之時節取後候儀モ難計、甚以無覺束候間、随分差急、正月中致帰帆候様ニハ其御地ヨリ被仰越ヲ以段々御内意申上候ニ付、兼テノ御日割相直リ御勤方早々相濟、去月廿八日御暇御給、去十八日諸御使者楫船兩艘ニ被成御乗船候、右通王子御勤早目被仰出候儀、専江戸立上着無遲滞様ニトノ御事候間、

五月中上着有之候様可被仰渡儀奉存候、去年・当年打続御使者乗船致越年候故、江戸立壹艘連モ致越年候テハ対天下御都合不宜、此儀至テ御念遣之段委細承知仕候間、此段御問合申上候、以上、

西十二月廿一日同上

田原春右衛門

益山金左衛門

永山親方

与那原親方様

(一六六三の2)

右之通申来候ニ付、何レモ五月中御上着不被成候テ不叶事候間、仕廻方折角被差急、聊遲滞之儀無之様取計可被致旨御差図ニテ候、以上、

戊正月十五日寛政二庚戌

小波津親雲上

一六六四

琉使上国期限達書

今般江戸御使者立、五月中上着無之候テ不叶段、琉球館ヨリ申越趣有之、折角被差急、聊遲滞之儀無之様ニトノ儀者先達テ被仰渡置候処、此節唐船帰帆遅ク仕廻方相滞、

別テ御心配之御事候間、弥日賦之通荷物積入、仕廻首尾申上ノ上、順風次第無滞出帆可被致候、若例年之様相心得、及延着候テハ甚御不都合相成事候条、極々差急キ一日モ早ク致上着、兼テ被仰渡候詮相立候様取計可被致候、乍不申在番親方ニモ段々之御用向有之、江戸御使者一所ニ出帆無之候テ不叶事候間、随分差急キ候様、是又可申渡旨御差図ニテ候、以上、

戊五月廿一日同上

小波津親雲上

松島親方

一六六五(の1)

齊宣公御結婚布告

太守様(齊宣公)

(義和)

へ佐竹右京大夫様御妹 幸姫様御縁組

御願通被仰渡候ニ付、御名之文字并唱遠慮可仕候、

十月同上

求馬

右膳

(一六六五の2)

右通被仰渡候段、琉球館ヨリ申来候間、童名付居候者ハ急度可相改候、尤、名字并名乗者遠慮ニ不及候、此旨支

配中可被申渡者也、

戊五月十五日同上

三司官

御物奉行

一六六七

冊封使乘船尺度

嘉慶三年戊午正月ヨリ同五月迄寛政九年丁巳

覚

一六六六(の1)

齊宣公中将御叙位

七尺六寸、

太守様(同上)、今般中将御官位被遊御昇進候付テハ中

将様御同名之御事候間、何様可奉称哉之旨奉得御指図候

処、当分之通 太守様ト可奉称旨、月番御用人伊集院伊

膳殿御取次ヲ以被仰渡候、為御納得此段御問合申上候、

以上、

八月十一日

大嶺親雲上

戌十一月廿八日同上

田原春右衛門

松島親方

一六六八

琉球在番奉行覚悟之条々

(一六六六の2)

右之通到来有之候間致通達候、以上、

亥四月三日同三年辛亥

山川親雲上

御書院

一琉球へ唐買物用之銀子、御当地ニテ為致吟味差渡候得

共、於琉球銀子相改候砌、悪銀有之候得者、其員數ハ

惣銀高致不足被差渡之由候、纔之儀ニ候得者、向後者

三司官へ申談、悪銀不足分者琉球方ヨリ差足、惣占高

ニ致都合候様ニ有之、其段御当地へ被申越候ハ、仮屋

方へ返銀可申付候条可有其心得候事、

一 渡唐銀改之時分、三司官老人、其外之諸役人并在番奉行付役人兩人相詰之由候処、前方右改及數日仕廻候儀

モ為有之由候、向後者可成程出精、何トゾ早々相仕舞候様二三司官へ被申談之跡ニ者、大和横目之琉球人不罷出之由候得共、兩人ツ、相詰候様可被申談候事、

一 渡唐銀積船、御当地ヨリ琉球へ何月何日致着、銀改之儀誰々出合、何日ヨリ何日迄ニ改相濟、唐船積入、那

霸致出船候日限、且亦日和無之琉球之内何方へモ令滯船候ハ、其段迄モ委細ニ相記可被申越候事、

一 帰唐船之節、琉球之内諸島へ船繫候ハ、其島へ幾日致滯留、那霸へ何日ニ致入津、諸買物之品々改相濟、大和船へ積入候次第、段々之日數迄相札、委細可申越候事、

一 御当地ヨリ琉球へ渡海之船頭・水主之内、渡唐之作事

五主、船頭・水主并才府役之下人等、部銀ヲ出シ買物代り銀子差渡、或女ニ致入魂、其女之一門共致渡唐ニ付銀子ヲ頼、或琉球之者ヲ買取、致入魂候女之親類之者下人ト名ヲ付為致渡唐、銀子差渡儀ナト有之由其間得候、不届至極之仕形ニ而候間、向後右体之儀共會而

不致様稠敷可被申付候、若不審成儀於有之者急度可被遂穿鑿候事、

一 琉球へ道之島ヨリ毎年払出候諸物、芭蕉芋入レヲ以相払候処、国司方并在番奉行付々之役人其外之者共、落

直成ニシテ買取、落札之者へハ纔ニ為相渡儀共跡々為有之由候、右体ニ候ハ、落札之者不勝手ニ而入札下直

ニ有之筈候条、向後落札并ニイタシ買取候儀、無用ニ可被申付候、尤、国司方用事之分者各別ニ候条可為如

先規候、乍然仮国司用事ニ而モ右之通ニ被申付、何ゾ差支事共有之候ハ、其段可被申越候、

一 於琉球国司方ヨリ相払候古ツク綱、在番奉行之付役人一手ニ買取候ニ付、諸船支ニ成候儀共跡々為有之由候、

何色ニ而モ国司方ヨリ被相払候時分、一手ニ不買取様付々之役人へ堅可被申渡置候事、

一 毎年御用ノ焼酎壺詰之節、在番奉行ノ付役人首里ニ差越、物奉行打合致捨者候処、馳走ケ間敷儀共跡々有之、數日手間入ルノ由不可然候間、已後共右体ノ儀無之様可被申渡候、付焼酎入壺当年過分ニ不出来合候付、諸調為致延引之由候、向後右之通ニテハ船ニ積入儀可致

遅々条、前以調置候様二三司官へ可被申談候事、

- 一 琉球下り先鳥迄ノ諸船罷登候節、以ノ外船足重積入儀有之由候、積足ノ儀ハ御定ノ焼印有之事ニテ候処、猥
- 二 積入候付少々風ニモ於洋中荷ヲ打、亦者走沈候事共前方為有之由候、畢竟改大方故ニテ候間、入念候様可被申渡候事、

右之趣、堅固ニ相守候様能々可被申付候、若緩之儀有之候ハ、其節ノ在番可為大方候間可被得其意候、尤、代合ノ時分者可被次渡置者也、

元禄六年酉九月廿六日 御国遣座

川上右京殿 (久意)

一六六九

渡唐船前覚悟之覚

- 一 毎年渡唐船、前以船拵其外諸道具入念調置、御当地ヨリ銀子差渡候ハ、早速相改之、荷作等仕廻候ハ、順風次第出船可申付候、若船具取拵之儀共致大形出船令延引時分後ニ罷成候得者海上念遣之事ニ候、於唐モ仕舞 (支カ) 兼婦帆之処有之候而者旁以下可然候間、向後無油斷様 (不カ)

可被申付儀肝要候事、

- 一 在番奉行之付衆兩人并三司官老人、里主・御物城・改奉行、渡唐船前以親見セニ罷出、刀・脇サシ・鎗・長刀之寸尺、銘付迄相改致封印、帳面ニ記置、船改相濟乘船之時分、右帳面ニ引合封印見届可乘付候事、

一 渡唐之人数惣様乗付、相改儀者多人数ニ而紛敷有之由候間、頭立候人迄ヲ船ニ召置、其外者陸へ下シ置、艙外ニ有之荷物立合可相改之、尤、惣銀高勘定極封シ印見届乗付、諸事改相濟候已後、右下置候人数帳面ニ引合面々相改乗付候、出船無之中者去年之通ニ船番・陸番ト申付之、尤、橋船ヲ引陸之通融無之様申付、若無抛用事於有之者唐船改役へ可得差凶事、

一 何船ニ而モ渡唐船近不寄付様ニ稠敷申付、在番奉行之付役人并大和横目無情怠昼夜見舞可申事、

一 渡唐船改相濟候以後、船へ見舞之者并音物ナト遣候儀有之由候、向後右体之儀會而可為無用事、

一 渡唐船、例年日和為見合慶良間島・久米島之間致船繫由候、左候得者於那覇何様堅固ニ申付候而モ島々ニ而緩々ニ有之候而者無詮事候間、向後大和横目老人・首

里横目忝人ツ、兩島へ前以差越置、其島々之在番申談
緩之儀無之様堅固ニ勤番可被申付事、

元禄六年酉九月二十六日

一六七〇(のし)

渡唐船帰帆之節覚悟覚

一 渡唐船帰帆之節、諸島へ潮繫候ハ、早速陸番并船番可
申付之、横目之儀跡々帰唐船ニ乗付為致警固之由候得
共、向後帰唐船ニ乗候儀者致無用、小舟ニ乗付帰唐船
近辺ニ罷在、陸ヨリ帰唐船へ通融堅差留、夜者篝火ヲ
焼セ可入念候、跡々者横目乗船へ篝火ヲモ為焼之由候
得共、横目船ニ焼セ候儀者無用ニ可被申付候、且亦帰
唐船ヨリ陸へ水薪等其外陸へ不叶用事於有之者横目乗
船へ申断可相達事、

一 帰唐船へ番船之外向船(何カ)ニテモ諸島ニテ為近付間敷候、

且亦依風引船出儀モ於有之者引船へ横目忝人乗付候様
ニ可申付候、尤、帰唐船着岸前以引船等之人数賦置、
無遅々候様ニ可申付候事、

一 帰唐船式艘之節、忝艘ツ、跡先ニ乗来候而先キ船忝艘

如那覇於致通船者警固船相付ニ及間敷候間、跡船ヲ待
居諸島ニ船繫候ハ、可致勤番事、

一 風波着ク、上荷陸へ不下候而不叶時節モ於有之者早速

小舟ヲ出、上荷ヲ可被取セ候、右下シ荷入置候所之家
番堅固申付、乍其上其島之在番為押可致勤番候、左候
而、順風次第荷物積入レ那覇出船可申付之、万一及破
損候ハ、荷物不捨様出精取上之、堅固ニ困置、那覇在
番并三司官方へ早速可申越候、少シ物ニ而モ脇々へ不
致紛失様可入念候、若緩セ之儀於有之者其所之在番可
為越度事、

一 帰唐船慶良間島へ船ヲ繫、夜中ニ小船漕出隠荷物ヲ積
移、唐船ヨリ先達而那覇湊近辺瀬長浦迄サシ遣、壻花
村へ荷物ヲ下置、密ニ為相払候儀共有之由其間得候、
依之向後首里横目三人・大和横目忝人帰唐船前以慶良

間島へ遣置、渡嘉敷間切・庄間味間切、(座カ)右両所在番へ

申談、唐船致着候ハ、当夏相勤候通ニ弥以堅固ニ勤番
可被申付候、久米島之儀モ首里横目忝人・大和横目忝
人遣置、諸事慶良間島可為同断事、

一 帰唐船那覇近辺ニ乗来候ハ、在番奉行之付役(人カ)へ兩人并

琉球方ヨリ被定置候人数、小舟ニ乗付中途へ漕出、帰唐船ニ不乗付外廻ヲ可致警固候、尤、引船例之通ニ無滞可申付候事、

一 通堂崎階前ニ唐船繫留候ハ、引船改様并渡唐之人数・

兵具改、且又艙ハンカイ等其外諸事当夏改之通ニ可申付候、官屋へ荷物惣様不下内者大和横目夜中見廻リ可入念事、

一 帰唐船荷物通堂エ下シ置、官屋へ相納次第如先規可被

申付、候事^(作力)五主并船頭・水主共手廻道具之内ニ糸・端物之類於有之者通堂ニ而取揚、官屋へ入置大和へ可被

差上候、且又荒物之内唐竹丸本^(木力)其外之器、糸・端物入付候儀モ可有之候間入念可相改事、

一 才府官舎而役人、荷物之内糸・端物者各外之由ニ而打渡来候得共、向後者衆並之支配ニ可申付事、

一 琉球諸士、唐買物之内自分用之外大和私ニ差上置候品々^(七力)

者官屋へ残置、致荷作之由候、且亦右自分用物者証文ヲ以被相渡筈ニ被申出置候得共、当年之儀者自分用荷主請取候品致脇売間敷通、荷主面々ヨリ書物取置相渡筋堅固ニ可有之旨被申談、其筋ニ為被申付之由候、向

後弥以其通有之可然事、

一 当年帰唐船ヨリ荷物下シ仕廻候已後、艙ハンカイ内外迄入念為被見届之由候、向後之儀モ荷下シ仕舞候ハ、弥以入念船中不殘可有見分事、

一 通堂并官屋改ニ打詰人^(致力)毎朝六時ヨリ改取付、暮六時迄

精出可勤之、唐ヨリ時分能致帰帆候而モ於琉球改方諸事ニモ遅々日数ヲ過、出船時分後ニ成候而者海上念遣

之事ニ候、若船中相滞、琉球・道之島之間致越年候ハ、

別而御勝手^(不勝手力)之事候間、荷物積船之内沓艘ニ而モ仕廻次第出船申付、随分無油断様ニ可入念事、

一 当夏之帰唐船、宮古島之内張水湊^(張水力)へ致潮繫候処、大和

船兩艘右之湊へ居候処、類船ニ而那覇へ致入津候ニ付、右兩艘之船頭・水主陸へ沓人モ不下様ニ地下士八人早

速船番被申付置、那覇役人并大和横目ニ而改被申渡候処、別条無之由候、以後右体之儀有之候ハ、弥以右之

通堅固ニ被申付可然事、

一 琉球之内大和船致渡海、島々之湊ニ而唐へ往還之唐船

ト同湊へ相繫候ハ、交ニ通融無之様稠敷可申付通、其島々在番へ可被申渡候、若相背族於有之者其者問究、

申出候ハ、可及沙汰候事、

一 渡唐船并帰唐船之節、改中終日打詰候ハ、在番并付々之役人へ馳走ケ間敷取持有之由候、於其儀者改之障二モ可成事候間、右体之儀不重立様二有之、一刻モ早ク改可相濟儀肝要之事、

右者、渡唐船往還之節申付様之儀、去夏三司官中ヨリ段々被申出、其筋ニ申渡置候、乍其上右之段々專可入念事ニ候間、去夏申渡候書付ニ引合、在番へモ委曲申談、聊無緩疎被申付候様三司官へ可被申渡之者也、

元禄六年酉九月廿六日

御国遣座印

新納近江殿

(入辰)

(一六七〇の乙)

右之通、此節於御当地新納近江方へ申渡置候、在番為心得写遣候、唐買物ニ候、三司官ヨリ可申談儀者致熟談、締方堅固ニ有之候様可被申合者也、

酉九月廿八日

御国遣座

川上右京殿

一六七一

在番奉行心得書

条々

琉球之儀、遠国ニ而御心遣被思召、為在番被差越之儀ニ候間、御城下之応御法式万端入念可被相勤儀可為肝要、遠海ニ而渡楫之時節モ有之儀ニ候得者御当地ヨリ時々之御仕置難奉御事ニ候間、奉行并付役人邪儀之働無之様可被心懸候、酒宴遊興等ニ而勤方忘却之人モ為有之由不可然候、縦先例ヨリトイフトモ不道理卜存候訳モ於有之者、付役中遂吟味正道可被相勤候、勿論琉球方仕置之善悪其外氣ヲ付致見分、御心得ニ可成儀者無油断委細可被申越候、奉行人并付役人至迄私欲ケ間敷儀堅可為停止、尤、不依何色国司藏方へ借物之儀御禁止ニ候条、弥堅固可被相守之事、

一 在番之奉行へ三司官其外役々用事申来候刻、取次ヲ以被承之由候、右通ニ而每物滞、又ハ交ニ旨趣不承達儀モ可有之候、向後ハ奉行可被致対談候、若又難致対談儀者時宜次第付役并与力ニ而成共可被承之、尤、三司官其外之役人御用付而見舞候節、終日不申談候而不叶

砌、輕料理遣候儀者可為心次第、酒宴之取持仕馳走ケ
間敷儀令停止候事、

一 奉行人懇志之琉球人ヲ不相応之官職等ニ取持候儀可為
無用、尤、琉球人ヨリ賄賂之音物一切受用有間敷候事、
一 付役之人勤方付而諸間切ヘ可差越刻、兼而日執之日限
無相違、人馬等之費無之樣可被相心得儀肝要候、尤、
所ヨリ之馳走會而受用有間敷候事、

一 在番之面々諸所ヘ差越、多人數ヲ催致狩候儀可為停止、
生類御アワレミニ付而者從 公義被仰渡趣モ有之候、
於琉球モ可有遠慮候、尤、猪鹿田島(荒カ)ヲ着候付而打候儀
者可為各別事、

一 在番奉行ヨリ国司申請之儀者先年御禁止ニ被 仰出置
候間、弥以可被相守其旨候、且又奉行人琉球ヘ到着之
節并年頭又ハ令帰帆ニ付而首里城内ヘ罷出候刻、任取
持長座仕、無礼之所行無之樣可被心懸候、相定候外国
司ヨリ被召寄候トモ、御断申達可然候、尤、城外ニ而
モ国司ヨリ馳走之催雖有之、断申達候様内々可被致覺
悟候、且又中城王子・佐敷王子ヘモ相定候付届之外猥
致見舞候儀可為停止候事、

一 琉球人宅ヘ奉行并付役人毎度差越、馳走ヲ請致酒宴方
端ミダリカマシキ儀可為停止、御用之外令参会儀無用
候、且又付役人首里ヘ不差越候而不叶用事有之ニラヒ
テハ、用事之分ケ奉行人具承届之可差免候、尤、用事
相仕廻候ハ、早速可令帰宿候、一宿之儀者勿論、夜更
候迄罷居候儀モ可為禁止、無抛用事ニ而モ首里ヘ毎度
サシ越候儀堅令制禁候、惣而琉球人ヘ心安致参会、不
依何色無心之所望別而可有遠慮候事、

一 先年ヨリ奉行人并付役之家来・下人共、於琉球女ヲ召
置子共致出生、致商売候付而者帰帆之節琉球ヘ残置、
數年居付之体ニ而罷居者モ有之由、又者病氣之由ニ而
残置候者モ有之由旁以不可然事候間、入念相改、右之
者共妻子者取放、不殘可被相帰候、若大方之儀モ於有
之者可及沙汰事、

一 於琉球奉行并付役、女ヲ召連方々遊山ニ為罷越儀モ有
之ヨシ、奉公人ニ不成合無作法之所行ニ候、向後之儀
堅固可被相慎候、又者地下之女ヲ近付ケ、其縁引ニ而
勤方ニ付而最負偏頗之儀モ可有之候間、右体之儀無之
様相慎尤モニ候事、

一奉行并付役之家来・下主、^(人力)無作法之儀無之樣堅可被申

付候、就中酒女之戒可為肝要、第一耽利欲ニ諸物入札之節、家来共入札之人数ニ相加里、シメ買イタシ町人^(同之)目前ニ商売仕、諸事所之妨ニ成候由、畢竟主人之申付

緩故不屈之仕形ニ候、向後右体之儀氣ヲ付稠敷可被申付候、且又右家来共琉球人ヨリ諸物ヲ請取、鹿兒島ニ而相払代銀可差下由致契約品々持上リ、代銀之首尾相滞琉球人致迷惑候儀モ為有之由候、此儀モ速ニ申付大方故右式ニ候間、万端入念稠敷可被申付之、付家来・下人共首里其外諸間切ニ振売ニサシ越候儀堅令停止候事、

一奉行并付役、家来分ニ御当地ヨリ商人ヲ召シ罷下、仕繰商売ナト為仕候付而不宜出入等モ有之、且又質物ヲ取置地下人ニ銀錢米等ヲ借シ付候人モ為有之由不可然候、向後右体之儀堅可為停止、為在番被差渡置候処、其身之勝手ヲ存、士ニ不似合商売為仕候儀者有之間敷事候得共、万一了簡違之人モ可有之候間可被入念候事、一奉行并付役人、被定置候水夫之外何色ニ而モ請問敷候、且又在番之面々代合相濟候節、何角ニコトヨセ乗船卷

艘、付役之乗船卷艘タルヘキ事、

一奉行并付役人、薪用ニ那覇刃之用木猥伐取候儀可為無用、御当地ヨリ被差下置候以權柄右之仕形無之樣、下人共慥ニ可被申付候事、

一穀物船出船之儀何角ト令遲滞、日和後ニ成破損船等モ有之由候間、米其外諸物急度積入、毎年六月廿九日限堅固出船可被申付候、若違背之儀於有之者至在番人可及沙汰候、但国司用物船ハ可為各別候、且又穀物船之儀、御船手吟味之上差下事ニ候得者船具等旁堅固可有之儀ニ候得共、於琉球モ船并道具等能々為見届穀物可為積之、若心遣ニ見及候船於有之者先余船ニ為積之、其船者随分船捲イタサセ、追而積荷可被申付事、

一穀物船那覇致出船間切打替候得者其湊ニ致滞留儀モ有之由候間、付役人ヲ相廻、日和次第早速出船可被申付候、且又船改ニ罷越候刻、船頭ヨリ馳走ヲ請候儀堅可為停止之事、

一船頭・水主共ヲ奉行并付役人私用ニ付而召仕、或課役ヲ懸船頭・水主造作ヲ請候事可為停止候、且又運賃并諸物積乗セ候儀ニ付而奉行・付役人ニ賄賂之進物イタ

シ、船頭・水主共勝手ニ罷成候様取持候人モ可有之候間、右体之進物何色ニ而モ受用有間敷事、

一 御当地ヨリ罷下候水主共、船中之用ニ刀・脇差召乗ヲ於琉球封之印ニ而在番所へ差置、帰帆之節相渡候筈ニ候処、近年者其身へ為致所持候儀モ有之由不可然儀候間、前々之通在番所へ取上ケ召置、帰帆之節可被相返之事、

一 船頭・水主共致氣任候ハ、科之輕重ニヨリ這籠過銀相応可被申付候御法様之儀ニ候間有赦有間敷候、惣而船頭・水手共へ申付様漸ク緩ニ罷成、琉球人ニイタリ聊(爾之為体役有之由カ)人登□為体モ有之由其間得候、右体之仕置等專可被入念候事、

一 運賃船積荷、碇先次第ニ可被申付之、或在番之乗船或琉球人乗船又者国司奉行人等之荷物ヲ乗来候ナド、申立候ヲ取持候而碇先ニ召成、荷物積セ候儀堅可為停止、且又琉球人御当地へ渡海乗船之儀、三司官ヨリ望次第可被申付候事、

右条々堅固可被相守之、前々ヨリ段々被 仰渡置候御掟、当時之御仕置ニ不相応之儀モ有之、又者漸々緩ニ

成立候モ有之由候間、相シラベ令増減、一紙ニ相認之可申渡之旨被 仰出候付、代々之奉行人勤方善悪之儀ヲモ可被令承知、此節相改申渡之間被得其意、入念可被相勤候、尤、付役人へモ右之旨趣慥ニ可被申渡之、向後在番代合之節、此条書堅固可被次渡之候、右之外異国方之儀ニ付而者元禄九年子九月委細条書ヲ以申渡置候間、弥以可被相守其旨者也、

元禄十三年庚辰二月三日 肝付主殿(久兼)

種子島藏人(久時)

鳥津中務(久應)

琉球 在番奉行

一六七二 (卷之十一) 五五五号文書に同じ、本文略

一六七三 (卷之十一) 五五六号文書に同じ、本文略

一六七四 (卷之十一) 五五七号文書に同じ、本文略

一六七五 (卷之十一) 五五八号文書に同じ、本文略

一六七六

琉球石高二課スル出来其他物品代米

一 高巻石二付 出米巻升七合ツ、

右、琉球并宮古島・八重山島現高八万五千九百四拾五

石三斗五升八合八勺六才相掛、

一 竜眼肉拾斤壺巻入 同四升

一 拮餅^(種餅カ)巻斤壺巻二入 同式升

一 スワウ五拾斤 同三升

一 唐物入手籠カイ巻ツ 同七斗五升

一 布屋巻通棒柱繩カケ共 同五斗

一 白糸百斤 同巻石八斗三升

一 大毛セン巻枚 同五升

一 小毛セン巻枚 同三升

一 中毛セン巻枚 同四升

一 白唐紙巻束五帖物 同五升

一 黄唐紙巻束式拾帖物 同式斗五升

一 ワラ唐紙巻束六拾帖物 同式斗五升

一 棉紙巻束七帖物 同四斗

一 クリワタ五拾斤 同五斗

一 明ハン拾斤小壺巻二入 同四斗

一 葉種百斤 同巻石

一 唐タンコ巻荷 同巻斗

一 同手洗巻ツ 同五升

一 棉羊巻疋 同巻石五斗

一 蘇鉄大カフ植付巻本 同五斗

一 大螺貝五ツ^(法螺貝カ) 同五升

一 八重山島大蘇鉄巻本 同式拾石

当年ヨリ上納可申付由被仰出候間取納可被仕候、尤、

役替之砌可次渡者也、

康熙二十二年天和三年癸亥五月卅日

一六七七

琉球国及ヒ諸島大御支配延期願

今度御領国中一統大御支配(田畠丈量)被仰付候付、琉

球国之儀モ御檢使被仰付候旨申渡候処、撰政・三司官ヨ

リ田場親方被差上セ、冠船渡来前ヨリ至今段々出物申付

置、其上此両三年風昇^(早カ)之災殃相続、作毛不熟二付飯料統

兼百姓及難儀砌候故、今度御檢使被差渡候儀不相調吟味

ニテ念遣奉存候、依之奉願候者先キ四五年程被召延被下

度候、左様ニ被仰付候ハ、随分百姓飯料之働申付置、御

檢使被差渡候節、支無之様ニ仕度旨申出候得共、願之通

米百斛二付

外三部八合

御差延候テハ大御支配之支ニモ罷成事候、御檢地ニ付テハ、多人數被差渡候得者難相調儀候、左候得者困窮之百姓共別而痛成筈候、其上当冬ハ大清ヘ慶賀之使被差渡物

如右此節相定候、諸雜物者米可応積足候処、向後米直成依高下運賃増減可有之候、此旨琉球方ヘ可被仰渡候、以上、

入モ有之由候ヘハ、旁以可被差支儀候故被差免候、慶長御檢使以來及数十年候故新開地有之、仮損地致差引候テ

万治三年庚子十月四日

鎌田源左衛門(政者)

モ增高有之積ニ候、依之寛永御支配之盛増半分、本高百

新納右衛門殿(久世)

石ニ付三石六斗八升式合五勺之盛増ニテ、都合高九万四

如右今度被仰付候間、従来年其引合可有者也、

千式百三拾石七斗九勺四才被仰付候間、右之旨被奉承知、

子十月五日

摩文仁

右高賦之通明辰年(享保九甲辰)ヨリ出物引合、右之様

平安座

ニ撰政・三司官ヘ可被申達候、以上、

兼城

卯十月三日享保八癸卯

種子島彈正(久世)

御物奉行

右者、田場親方被仰出被仰渡候御書付、為念如此御座候、

(一六七八の3)

以上、

如右被仰下候間、従来年其引合可有者也、

仕上世座

順治十七年庚子十一月五日(万治三庚子)

御物奉行

一六七八(の1)

琉球貢納運賃定例

仕上世座シノゴセザ

御役人中

本琉球運

脱字乎(實脱カ)

一六七九

琉球出米定令

高卷石二付

出米壹升七合

右、琉球并宮古・八重山高現高八万五千九百四拾五石三斗五升八合八勺六才相掛、当年ヨリ上納可申付由被仰出候間取納可被仕候、尤、役替之砌可被次渡者也、

康熙二十二年天和三年癸亥五月廿日

一六八〇

琉球往来運賃部下リ達書沿革

覚

運賃米三部八合

内、三部船頭取分

八合八部下リ、此内三合ハ此中ヨリ部下リ也、

右之通被仰渡候間、琉球へ可被申越候、以上、

壬午十一月廿日元禄十五年 高所

野元市右衛門殿

一六八一(の1)

琉球之内宮古・八重山行之船運賃部下リ之趣、如何様可有御座候哉、三司官衆ヨリ各方迄覚書ニテ被得御意候条、黒葛原喜左衛門殿ヲ以得御意候、右運賃部下之儀、琉球方自米漕船ニ候、然共従前々為差定運賃之儀ニ候間、本琉球ヨリ御当地迄米積登候運賃之割ヲ以、部下リニ可被申付之旨被仰渡候、各部下リ米御当地へ納儀ニテ無御座候間、右之通可被仰遣候、以上、

延宝八年申六月十四日

新納喜右衛門 印

有馬次兵衛殿

眞壁親方

(一六八一の2)

去年ヨリ米高直ニ有之候付、任先規琉球運賃米毛諸方同前卷升五合下リ、去冬申渡候右卷升五合之部下リ米者別ニ払方之見当有之儀ニ候間、高所へ送状相付、船頭者運賃同前ニ從船々以差荷可被積登候、尤、砂糖・鬱金積合候船者米同前ニ代銀・代米之間ヲ以部下リ口分上納可有之候条、此旨琉球へ可被申越候、以上、

延宝八年申正月十六日

黒葛原喜左衛門

一六八二

手形

米老升五合先搔

右運賃米之内部下り分、船々以差荷可積登セ由候、砂糖・

鬱金積合船モ同前上納可仕由、御物座ヨリ被仰付候間、

銘々送状相認可被差出者也、

康熙十九年庚申三月廿日延宝八庚申

福地親雲上

西原親雲上

野国親雲上

稻嶺親方

仕上世座

役人中

一六八三(の1)

覚

運賃米老合五勺

但、此節ヨリ部下り也、

外ニ老合五勺ハ此中ヨリ之部下り也、

本琉球

右之通、此節ヨリ運賃部下り被仰付候間、部下り米之儀

者此中ヨリ之部下り米之コトク御物方別書ニ相記被召置

筈之条、右之趣本琉球へ可被申渡候、右部下り米被召上

セ候儀モ此中之通可被申渡候、以上、

亥九月朔日

御物座御印

鎌田太郎右衛門

有馬新右衛門殿

(一六八三の2)

右之通ニ被仰渡候間、此旨本琉球へ可被申越候、以上、

亥九月朔日

有馬新右衛門

久志親方

岩崎李兵衛殿

(一六八三の3)

右之通被仰下候間、部下り之分ハ如此中送状別紙可被相

調者也、

康熙二十二年癸亥十月十二日天和三癸亥

一六八四

覚

部下り米ハ国衆之船差荷ニテ上納之御規ニ候、然処此中

同日

御物奉行

先鳥之部下り米、大和船ニ無差荷地船ヨリ間引合ニ積渡

仕上世座

不可然候、依之去年八重山島者在番ヨリ其段申付、久志

役人中

之伝兵衛積荷式百三拾六石之部下り米六石六斗壹升七合

一六八六

差荷ニテ積渡候、右之御規故、此節宮古島在番方へ其旨

琉球砂糖運賃定例

可申遣候間、右鳥行之船頭方へ可被申渡置者也、

覚

一六八五(の1)

砂糖百斤
内、七拾八斤四合
式拾壹斤六合

覚

外ニ式部七五、

部下り米之儀、船頭共積上候時分無運賃ニ此中積上候得

右之通ニ可被引合者也、

共、此節ヨリ右部下り米之内ニテ運賃出候様、御国元ヨ

甲子正月廿七日貞享元甲子 田場親雲上

リ為被仰下之由、御奉行三原次郎左衛門殿ヨリ被仰出候

条可被致其引合者也、

一六八七(の1)

康熙三十年元禄四年
辛未 辛未十一月七日 三司官座印

御物奉行

五升

(一六八五の2)

右之通被仰出候間、其引合可被仕候、尤、役替之砌可被

一拾五反帆屋形間四拾三石五斗
一拾四反帆屋形間四拾石

次渡者也、

右三艘之屋形間例如斯御座候、以上、

丑五月十四日

江洲親雲上

役人中

八木親雲上

具志親雲上

一六八八(の1)

安次嶺親雲上

琉球ヨリ積上リ馬其外積間定

平安山親雲上

一御馬一疋

積間米拾石

玉城親方

一御馬貳疋

同四拾石

(一六八七の2)

一御馬三疋

積間米六拾石

使者乗船屋形間、此中ハ此方ニ不構使者ヨリ内証ニ而為相濟儀ニ候、其二付屋形間如何程ト未相究、区ニ難仕儀共有之候間、伊集院次郎右衛門様へ得御意、諸船頭引合屋形間之例此節ヨリ如斯相定候間、向後右之例可被用者也、

一同四疋
一同五疋

同百石
同百四拾石

右、御馬之積間銘々書付、右通ニ向後被仰付候間可有其心得事也、

寛文十三年癸丑五月十六日 三司官

亥九月四日

御船手印

御物奉行

(一六八七の3)

右之通被仰出置候由、琉球方ヨリ御引合有之候間、其引合可被仕候、替合之刻可被次渡者也、

右之通、屋形間被仰出候間、堅固ニ可被相守候、勿論役替之砌無失念可被次渡者也、

康熙二拾八年元禄二年己巳正月廿五日 御物奉行

丑五月十八日

御物奉行

(一六八八の3)

仕上世座

一櫃壱ツ高壱尺七寸式分長式尺四寸式分(幅九)壱尺七寸

積間五斗九升三合

一樽壺ツ高式尺差渡壺尺九寸

同五斗

一砂糖漬冬瓜壺斤壺入
一竜眼肉拾斤壺壺入

同式升
同四升

一焼酎百盃

同五斗

一拮餅壺斤壺壺入
(搦餅カ)

同式升

一葉種子油百盃

同五斗

一スワウ五拾斤

同三升

一上布式拾疋

同式斗五升

一唐物入手籠カイ壺ツ

同七斗五升

一下布式拾疋

同式斗五升

一布屋壺通棒柱繩カケ共

同五斗

一綿子三拾把

同式斗五升

一白糸百斤

同一石五斗三升

一鬱金百斤

同三斗五升

一大毛セン壺枚

同五升

一黒總百房四丸

同壺石

一中毛セン壺枚

同四升

一棕栢切付肌付壺通莖共

同三升五合

一小毛セン壺枚

同三升

一提重壺ツ家共

同寸尺次第

一白唐紙壺束五帖物

同五斗

一割為細目莖壺束

同式斗

一黄唐紙壺束式拾帖物

同式斗五升

但、アラメ莖并備後莖同断、

同三升九合壺勺

一ワラ唐紙壺束六帖物

同式斗五升

一牛皮壺枚斤目拾斤

同三升

一棉紙壺束七帖物

同四斗

一名護砥壺丁

同四斗

一クリワタ五拾斤

同五斗

一黒砂糖百斤

同四斗

一明ハン拾斤小壺壺ツ入

同四斗

一サン砂糖百斤

同四斗

一葉種百斤

同壺石

一白砂糖百斤

同四斗

一唐タンコ壺荷

同壺斗

一氷砂糖百斤

同四斗

一同手洗壺ツ

同五升

一 棉羊壹疋

同壹石五斗

一 華綸子中床縮緬

同八斗

一 蘇鉄大カフ植付壹鉢

同五斗

一 象之牙壹本

同四升三合

一 大螺貝五ツ(法螺貝カ)

同五斗

長九尺九寸、根サシ渡四寸、空式寸五合(分九)

一 八重山大蘇鉄壹本

同貳拾石

一 韃布百反

同貳斗五升

一 水牛貳疋

同六拾石

一 大床白縮緬百反

同八斗

一 荊川連壹束貳拾五帖物

同壹斗

一 絵垣サヤ・輕サヤ、尺長サ小床白縮緬晒永春濟百反

一 天門冬五斤壹壺二入

同三升

一 黒大繩百斤

同六斗

右、大和へ仕上世諸物積問引合之儀、去年被仰定置候

処、此節小橋川親雲上・川上築親雲上へ差引サセ、右

之通被仰定候間、其引合可被仕候、役代之砌可被次渡

者也、

辛未四月十五日 (元禄四辛未) 御物奉行

仕上世座

役人中

(一六八八の4)

覚

一 花サヤ百反

積問六斗

一 薬種入壹壺ツ

同壹斗壹升八合四勺

一 満控縮緬百疋

同壹石貳斗

高壹尺四寸三分、サシ渡壹尺壹寸

一 棕梠皮百斤

積問四斗

一 届間壹石運賃砂糖同間砂糖ニシテ式百五拾斤、運賃砂

糖五拾八斤九合式勺六才、百斤ニ付式拾三斤五合七勺

一角俣拾五斤

積問七升五合

一 丸藤三百本

同貳斗壹升九合

但、斤目四拾六斤半

一 戸丹式百五拾斤(紅丹カ)

同貳斗五升

一 風菊巻提 同 卷石 卷斗 八升 六合 八勺

大山里子親雲上

高四尺三寸、差渡式尺

(二六八八の五)

一 蘇鉄カフ植付巻本 同 三斗 式升 四合

覚

高式尺四寸、サシ渡卷尺四寸

一米 卷石 二付 運賃米 三斗 八升 先
内、三斗五升船頭へ渡、

一 銀子拾貫目入箱巻 同 卷斗 六勺 六才

一 涼傘巻 同 卷斗 卷升 六合 六才

長卷丈三寸五分

但、届運賃仕分ケ候而船々ヨリサシ上セ、

一 旗竿巻本 同 七合

長七尺五寸、木口卷寸六分

一 キンタリ茶磨巻丁 積間式斗五升
一 荔枝五斤小壺巻二入 同 式升

一 座楽櫃持棒巻 同 卷斗

長卷丈八寸、木口三寸

一 同 卷東 同 七升
一 同 卷東 同 五升

一 戸丹百斤 同 卷斗

一 櫛蠟百斤 同 四斗

一 京銭千貫文 同 五石

荷数百丸但、大和目、

一 拾六反帆筒間屋形間 同 四拾六石 式斗 五升

一 虫糸百斤 同 五斗

長七尺三寸五分、広九尺六寸

右間引例無之二付、此節諸船頭差引之上右通間引仕候

一 拾八反帆トウノ間 同 百五拾七石 五斗

間、此例被仰付可被下候、以上、

子五月廿九日(貞享元甲子) 今帰仁親雲上

大和(同上)へ御使者之時

但、賦銀上下拾五匁、楳船之船頭・路次衆人・御
中間八九匁、

一兄弟部 主從貳拾人、江戸御上洛之時
同斷、越年之時見次間三十石 乘間三百石

一按司部 主從拾三人、見
次間拾九石五斗 同百九拾五石

一三司官 主從拾三人、見
次間拾九石五斗 同百九拾五石

一親方部 主從拾人、見
次間拾五石 同百五拾石

一年頭御使者親方部 主從十人、見
次間十五石 同百五拾石

一同与力 見次間四石五斗 同式拾壹石

一申口御物奉行衆 主從八人、見
次間拾貳石 同五拾六石

一吟味御使者 主從七人、見
次間十五石五斗 兄弟部大親之時主從六人 同四拾九石

一兄弟部大親 主從六人、
見次間九石 同四拾貳石

一座衆主取 主從六人、
見次間九石 同四拾貳石

一江戸行路次衆下知并唄啞吹 主從三人、見
次間四石五斗 同式拾壹石

一御医者 主從三人、見
次間四石五斗 同式拾壹石

一御右筆 主從三人、見
次間四石五斗 乘間式拾壹石

一御馬宰領 主從三人、見
次間四石五斗 同式拾壹石

一佐敷御殿御与力頭 主從六人、
見次間九石 同四拾貳石

一唐物宰領才府 主從六人 同四拾貳石

一同大筆者 主從四人 同式拾八石

一役藏并筆者 主從四人、
見次間六石 同式拾八石

一按司付衆 主從六人、
見次間九石 同四拾貳石

一親雲上衆使者 主從四人 同式拾八石

一座敷以下与力并儀者役 主從三人、見
次間四石五斗 同式拾壹石

一樂童子 主從三人、見
次間四石五斗 同式拾壹石

一佐敷御殿奏者番御内 主部御会尺方御茶湯
理主部具

擻飾 細工内 庖丁、親雲上以上カチ細工壹身

一路次衆家来 同三石

一御馬中間筑 同式石

一琉飯屋手代唐御買物荷付 同五石

一楳船之船頭主從 同拾石

一同楳取乘間式石 水主壹人ニテ乘間壹石五斗

唐へ御使者之時

但、上下拾五匁賦也、

北原宰領八賦銀拾壹匁
貳分五リ

- 一 勢頭 主從拾人
- 一 大夫 主從拾人
- 一 北原大通事 主從六人
- 一 同大筆者 主從三人
- 一 勢頭与力 主從
- 一 北京宰領 主從
- 一 才府 主從五人
- 一 官舎 主從五人
- 一 大通事 主從五人
- 一 脇通事 主從五人
- 一 大筆者 主從三人
- 一 脇筆者 主從三人
- 一 總官 主從
- 一 船頭 主從

宮古島・八重山島へ御使者

但、親方部以下壹人ニ付賦銀七匁五分、

平等筑船頭壹人ニ付三匁五分五リ、

一 親方部 主從七人 乘間貳拾六石

一 申口御物奉行衆 主從六人 同貳拾貳石

一 親雲上以下与力役 主從 同六石

一 大和横目 主從四人 同八石

一 平等筑 壹身 同壹石五斗

一 楳船之船頭 主從 同五石

一 同楳取 乘間壹石水主乘間壹人ニ付七斗五升ツ、

一 在番 主從五人、見次間三石 同貳拾五石

一 筆者 主從三人、見次間貳石五斗 同拾五石

一 宮古島洋雲寺・八重山島桃林寺住持 主從三人

乘間拾五石

見次間貳石ツ、

右之通相定候間可被致其支配者也、

癸酉五月廿五日（元禄六癸酉）三司官

御物奉行

(一六八八の6)

手形

一米百石ニ付 外三部六合五匁 本琉球

一春粟百石ニ付 外右同 同所

一米百石二付 外三部三合五勺

大島

一運賃米三斗式升先

八重山島

一同百石二付 外右同

喜界島

内、六升七合三勺七才部下り、

一小麦百石二付 外五部三合五勺

同所

但、此中之部下り込ル、

一米百石二付 外三部七合五勺

徳之島

久米方・国頭方ヨリ楳船申請之時運賃、

一春粟百石二付 外右同

同所

一米老石起

運賃米八升起

一米百石二付 外三部七合五勺

永良部島

一雜石老石起

運賃雜石八升起

一春粟百石二付 外右同

同所

卯六月(延宝三乙卯)

一米百石二付 外三部八合五勺

与論島

如右之延宝七年未十月八日改之候間可有其心得候、以

上、

延宝七年己未十月十日

御物座在印

一錢五拾貳貫五百文

七反帆老艘

黒葛原吉左衛門

一同四拾五貫文

六反帆老艘

新納喜右衛門殿

右、硫黄積ニ島々へ御遣被成候処、慶良間船之船賃御

摸無御座候間、先島行慶良間八反帆老艘ツ、御摸六拾

貫文之程ニシテ可被下候、以上、

子五月八日(貞享元甲子)

船手

一六八九

宮古島・八重山島運賃定

一運賃米式斗六升先

宮古島

内、五升四合七勺四才部下り、

一六九一

但、此中之部下り込ル、

覚

砂糖百斤二付 運賃貳拾三斤五合七勺

癸未二月廿日

右、運賃米三部八之内此中三部部下リニテ候故、砂糖運賃貳拾七五相渡候得共、此節八部部下リ被仰渡候付、右

通相当申候間、其引合可被仕者也、

在番奉行乗船積間定メ

癸未二月廿日（元禄十六癸未）御物奉行

仕上世座

一六九二

覚

届巻石之運賃 右同貳百五拾斤ノ運賃

一米三斗五升先 一砂糖六拾八斤七合五勺

但、米巻斗ニ付砂糖拾九斤六合四勺貳才、

右、三部下リ砂糖運賃

一米三斗先 一砂糖五拾八斤九合貳勺六才

但、百斤ニ付貳拾三斤五合七勺、

右、大和船頭へ相渡候運賃米三部八之内此中者三部々

下リニテ候故、砂糖運賃百斤ニ付外貳部七五相渡候処、

此節ヨリ八部々下リニ被仰付候間、差引仕算用如斯相

当申候、以上、

一六九三

在番奉行乗船積間定メ

琉球在番之奉行并付衆之乗船八拾石之輕間、前々者給候処、右体之衆何茂応人数積間被下候ニ付貳重之由候テ被召留候由、先比雖被仰渡置候難海之故、乗能様ニ依被仰付此節ヨリ御定四寸之船足輕間之外、四寸之輕間相重八寸船足輕間被仰付候間、向後此旨可被相守候、自然八寸足ヨリ重ク足入候ハ、其員數之船足積荷公儀へ可被召上候、改之儀山川津口番衆・坊津番衆へ被仰渡置候、向後於其地者在番付衆へ被申付、相改相違候ハ、可為右同斷候、向後間々渡海之衆船足同斷ニ被仰付候、此等之趣御老中御差図ニテ候、以上、

右之通、上井五郎右衛門へ被仰渡候間、琉球へモ心得可被申渡候、以上、

申二月十二日

比志島主膳

新納喜右衛門殿

一六九四

御高奉行所御規帳

一 從大島每年芭蕉芋被差下、入札ニテ被相払候内、上中位半分ツ、落札直成ニシテ琉球方へ被申請度候由候間、以其心得可被相渡候、

一 先島へ渡海之船共、琉球方ヨリ用段之儀被申渡候刻、

每々致申分不勝手有之候間、先島下り船差引之儀、琉球方へ被仰付度旨被申出候、船賦之儀者船手ヨリ不申

付候而不叶事候、依之向後右相応之用段被申付候砌、

難渋申者於有之者琉球役人方ヨリ可申出候条、致詮儀

繰替可被申付候、尤、右之趣船手へモ申渡置候間、代

合之時分堅固可被次渡者也、

延宝四年辰九月九日

御物座印

阿多六兵衛殿

一六九五

難破船処分

一 琉球出物仕上七船、出船不仕内一之湊ニテ致破船候ハ

ハ琉球可為損候、一之湊ヲ出船イタシ候テ致破損候ハ

ハ摸合方損可罷成候、揚荷物送状^(空白)立之員數ニ合候ハ

ハ、半分ハ船頭可為荷物候処、届分不足候ハ、縦令

雖為送状外着替船道具之外ハ可為御物事、

一六九六

御藏方規模帳

一 仕上世船破損仕候時、出物方ニ送状有之荷物ハ御公義

御損ニ相立、出物引合ニ前々ヨリ有之候事、

一 打荷仕候船之積荷、琉球方損ニ相立候、殘荷物ハ不依

何色ニ改所証文次第屋藏へ相納筈従前々有之候処、

船頭・水主着替故実道具等見合ヲ以其主へ被下候事、

一 仕上七米其外諸物船頭納不足之物、其時分立直・高直

成二代銀可請取事、

一 右同荷物、不依何色^(潘カ)潘欠者先規ヨリ船頭承候間、向後

如其可申付候、雖為乘衆船頭可為同前事、

一 送状迦之物於有之者其時々相改、本状ニ可書載事、

付、包莖并乘衆船之屋形道具取払可入念事、

右、規模帳之写如此御座候、以上、

元禄拾六年癸未八月十五日 琉球方

慶良間島貢納船

一慶良間島船之儀者、大島百姓中田島之上納方并^虫用ヨリ、從跡々御免之例候間、大和(同上)并諸方へ御遣被成候砌、此中之様ニ船頭・加子賦ハン米被下、無運賃ニ被仰付、出立前修補并船具不足分ハ船手方へ被仰付、帰帆仕船具ハ致返納候様ニ被仰定、可然哉卜奉存候、

雜石壹倍ニテ納、

壹万四百貳拾九石七斗六升壹合四勺三才現

内、千五百拾貳石貳斗六升三合四勺三才

但、荒欠地出来、

七百九拾七石壹斗貳升三合五勺壹才

但、上布・下布代払、

雜石貳千七百八拾八石三升壹合三勺九才

上木納米五百八拾七石九斗八合八勺三才

内、貳拾六石三斗八升六合四勺壹才

芭蕉・唐芋・宝為敷田畜^(虫)ニ成候付

現^(空)ニテ差引、御損分出来、

五石五斗四升六勺九才現

右同田成候分代納、

六拾四石七斗三升三合八勺六才

右同島成分雜石ニテ代納、

四百九拾壹石貳斗四升七合八勺六才

諸^(空)代払、

右之内

大美御殿御知行

納老万四千六百六拾三石六斗七升四勺八才

内、米壹万千貳百八拾七石七斗三升貳勺六才

内、六拾石八斗四升五合三勺貳才

三升現田畜納老石ニ付貳升ツ、相掛候、

ハ、從公義^(空)此外口

^(虫)

^(空)

^(空)

^(空)

高千石

一物成四百三拾石内米三百七拾石
雜石六拾石

御太子御知行

高千五百石

一物成四百七拾九石九斗四升

内、米三百八拾九石九斗四升

雜石九拾石

高三百石

一物成九拾五石九斗八升八合

内、米七拾七石九斗八升八合

雜石拾八石

御(欠カ)

一米九千六百貳拾三石七斗六升五勺三才

一雜石貳千八百七拾壹石壹斗九合七勺七才

一高頭三万九千三百三拾七石八斗四升貳合八勺八才

給地高

内、田方壹万九千八拾石貳斗三升貳合八勺八才

納米八千八百貳拾三石八斗四升四合五勺

畠方貳百五拾七石六斗九合九勺

納雜石貳千七百七拾九石四斗五升九合八勺九才

米ニシテ千八拾九石七斗貳升九合九勺五才

ノ米九千九百拾三石五斗七升四合四勺五才

内、貳千七百七拾八石九斗貳升六合四勺九才

四ツ物成支配ニテ引合ハ高反米分、

此内旅料高相除、給地高拾石ニ付夫貳人ツ、相付、壹

人ニ付一ヶ月ニ五度ツ、遣、

一知行高壹万九千三百三拾六石六斗壹升五合六勺三才

外、壹万九千八百壹石貳斗貳升三合壹勺五才ハ、右

取立置候納米九千九百拾三石五斗七升四合四勺五才

ヨリ反米引候テ残分ニテ四ツ物成高二引直候得者引

入也、

一物成米七千七百三拾四石六斗四升七合八勺五才

右之内

一高六百四拾石

一高三百四拾貳石

一高四千五百石旅料

但、渡唐候事五主・水主御合力共、

一高壹万三千八百五拾四石六斗壹升九合六勺三才

役知

寺院役知

給地

但、切米共、

惣合高頭九万八千八百八拾三石九斗壹合式勺七才

高老石二付式斗八升四合壹才廻代

納式万五千六百六石九斗七升四合八勺七才

上木高籠ル荒欠地引除

現高八万八千三百六石九斗七升四合八勺七才

但、如御国元三斗五升代ニ廻候様ニ被仰渡、内檢被

仰付置候処、式斗八升式合五勺廻申候、此上重テハ

百姓疲罷成由、寛文元年御国元へ首尾被仰上候、

高老石二付式斗七升三合三勺八才

納式万四千五百五拾四石七斗四升四合四勺九才

以上、

正徳五年乙未五月廿七日

御物奉行

富盛親方

御物奉行方吟味

宮城親雲上

山田親雲上

湧川親雲上

李島親雲上

内間親雲上

(一六九七の二)

右、御当国御高八万九千八百八拾六石之内五万石御蔵入ニ

相定、残分者諸士ニ可致配分旨、慶長十六辛亥年從御

国元被仰渡置候処、御高之内相違之儀有之、右御書付

可差登之由、寛永五戊辰年依御下知金武王子被差上候

間、六千石六斗九升相減、同六己巳年御高八万三千八

拾五石三斗壹升被相定、家久公御判之御目録被成下

候、其以後御蔵諸士之御配分不被仰渡候、同十二乙亥

年御朱印高不足ニ付盛増上木高相加、都合九万八千八

拾三石九斗壹合式勺七才御定、御老中連名之目録被召

下候、然共御蔵給地之差分無之候ハ、御賦方諸士之量

數不相極候付今度御物奉行申渡、高所高給并古案等見

考、慶長十六年御書出返上雖有之、右御出物之筋御分

量相応故、其積ヲ以致支配差出候間、奉備上聞候、以

上、

未六月四日

浦添親方

伊舍量親方

豊見城王子

一六九八 (卷之十一 五五九号文書に同じ、本文略)

一六九九 (卷之十一 五六〇号文書に同じ、本文略)

一七〇〇(の1)

唐船拔荷之儀ニ付、別紙之通先年度々被 仰出有之候処、近年猥ニ相成、度々拔荷仕候者有之由、其上近比度々唐船漂流有之、右ニ付而者紛敷儀有之趣相聞得、畢竟申付不行届故之儀候、先年度々被 仰出候趣弥違失無之様自今共敷數被申付、拔荷仕候者於有之ハ相改召捕候様可被申付候、此已後拔荷仕候者外ニ而召捕、吟味之上先々相知候ニ於テハ其所之領主越度可相成候之条、被存其旨無油断可被申付候、以上、

八月

(一七〇〇の2)

一 拔物之儀付、先年度々被 仰渡候御書付写老冊

一 右同断ニ付、此節被 仰渡御書付老通

右之通致拔物候者於有之者其所之領主越度可相成旨、

今度從 公義被 仰渡候、拔物締方之儀ニ付而者兼而

稠數被 仰渡事候得共、若石体之儀共有之候而者被

仰付様不相届筋ニ而如何之事候、於琉球船改之儀疎ニ

無之筈候得共、万一琉球口ヨリ出候唐物、密々積上リ

候儀有之候而者不可然事候間、楫船并穀物積船出帆

之節、緩無之様(緩カ)緩方之儀ニ令吟味、来春仕出ヨリ一涯

入念可相改候、左候而、イツレノ筋ニ改申付筈候由、

吟味之趣春便首尾可申越候、

右之通琉球へ可申越旨、在番親方飯屋守へ可申渡候、

十月

(録田政昌 典膳)

(一七〇〇の3)

右写之通申渡候間吟味之趣承届、締方不相届儀有之候

ハ、存寄之趣相達、一涯入念曾而緩セノ儀無之様可被

致沙汰候、

右之通、琉球在番奉行へ可申越候、

十月

典膳

(一七〇〇の4)

右之通被 仰渡候間、緩セノ儀無之様可被申渡候、以

上、

宝曆六年丙子十月十三日

鳥津権左衛門(入聖)

琉球在番奉行

山岡斎宮殿

大和横目格護之仰渡寛

一横目役ニ付各神文之表毛頭違背仕間敷事、

一国中之人、不依尊卑御法度相背人於有之者少モ無用捨

実不実共ニ可申越事、

一奉行并付衆以下御道具之者ニ至迄、御法度相背之族付

所々妨ニ成候者見立聞立、少モ無用捨可申越之、

付、船頭・水主・町人等同断之事、

一奉行并付衆ヨリ船頭・水主・町人等ヲ近付致入魂人可

申出候、且又船頭・水主・町人等奉行・付衆ヲ招振廻

并致馳走候事、

付、船遊・野遊ニ酒肴致持参馳走仕候儀致見分可申

出之事、

一当国之町人杯奉行・付衆之家来分ニ而罷渡、奉行之威

ヲ仮り権柄ニ有之候故、所中之妨ニ成候由、致見聞可

申出之事、

一百姓渡世之様子為見分奉行并付衆在郷相廻候刻、何カ

ト課役申付却而百姓之勞ニ罷成儀於有之者致見聞可申

出之事、

一酒女之イマシメ第一ニ被仰渡置候処、密々相犯輩有之

候間其聞得候、別而心掛見立聞立可申出之、右之旨相

背ニ付不宜出合度々有之候、向後之儀入念致見聞、早

速可申出之事、

一諸船出船之刻致遅々日和後ニ成候、是以船頭・水主纒

故ニ候、右之通私ヲ以出船及遲滞者致見聞可申出之事、

一船頭・水主之外浦々之者共為商売罷渡、妨ニ成ニオヒ

テハ見聞之通可申出之事、

一渡唐之人於唐不宜所行之儀有之由風聞候ハ、実不実共

ニ可申出之、

付、出船及遲滞日和後ニ成候ハ、船頭并主取之人可

及僉儀候間、早速可申出之事、

一琉球中仕置之善惡風聞之通可申出之事、

一奉行之勤被相改、可然ト見及候儀者無遠慮可申出事、

一諸島へ番手ニ罷渡候人、私慾ヲ以島中之者及迷惑儀於

有之者可申出之事、

一右条々儘可相守之、実不実共申出儀ニ候間、勿論至各

穿鑿ニヲヨブ儀ニ而者無之候条、其心得ヲ以無用捨内

狀ニ委細相認、每便ニ可差越、尤、在番奉行へ相達可

然儀者其通ニ可仕、於若致緩疎者可為曲事者也、

貞享三年丙寅三月五日

新納近江(久原)

一七〇二(の1)

琉吏心得訓示

覺

一琉球之儀、遠島ニ而別而御氣遣ニ被思召為在番被差越之儀候間、万端被入念可為肝要、自前々在番之面々琉球へ詰居候儀ト計存、或遊山翫水或酒宴遊興迄ニ而職事忘却之由不可然候、勿論琉球仕置之善惡其外万事ニ氣ヲ付得ト致見聞、御心得ニ可成儀ハ每便委細可被申越候、在番覺悟之儀、每度為被仰渡儀候、就中明曆三年九月十一日条書之趣、堅固可被相守之事、

一右之条書七ヶ条目ニ唐船着岸時分、キリシタン宗之道具入念船中可相改旨相見得候へトモ、唐人之道具相改候儀者近年モ御禁止ニ候間可致其心得、船中之人教迄ヲ相改、唐人ヨリ書物可取置之、尤、南蛮人南蛮道具又者毒藥之儀、曾而船中へ不載來候旨書物之内ニ書加候ニ唐人へ可被申聞之、為見合御当国ニ漂着船之唐人

差出候書物写遣之候事、

一雖不新候切支丹宗門之儀可被入念、右宗門大清国へ者流布之事候へバ、万一密々海上差渡儀モ可有之候間、島々浦々入念候様可被申渡之、就中進貢船往來之節、飛乘之者無之様堅可被申達候事、

一在番奉行へ三司官其外用事申來候刻、取次ヲ以被承候由、右之通ニ而者每物滞リ、又者被申候旨趣不承達儀モ可有之、向後者奉行可致直談事、

一唐御買物之儀年々高直ニ成、諸物ハ品アシク候ニ付別而無心(元カ)存、至大里按司・三司官每々申渡儀共候、去ル亥年池城親方渡唐致差引、去年御当地へ參上、買物之儀委細被申出得其意候、依之向後唐行之儀、專池城被致差引様ニト被仰渡候間得其意、弥入念候様可被申談候、尤、右ニ付存寄之儀トモ於有之者無遠慮可被申越事、

一琉球ヨリ帰帆之船、折節時分後ニ成、先年船數過分ニ令破損笑止千万之儀共ニ候、畢竟在番大形故、船頭・水主共何角氣儘ヲ申致延引候由不届候、此儀別而入念不致遅々様ニ可被申付之、去年唐帰帆之琉船二艘一所

二乍致出帆、小唐船者八重山島辺ニ而水薪払底之由ニ而乗後琉球へ着津延引、御当地へ上国難成御用不相達、小唐船之船頭并主取不屈之至ニ候間得其意無油断可被申付之事、

一在番中付衆ニ至、諸事ニ付私慾ガマシキ儀堅可為停止、尤、不依何色国司蔵方へ借物之儀、自前々禁止ニ候、弥以堅固可相守之事、

一奉行ヨリ国司申請之儀、自前々為有来儀ニ而、殊之外急度立タル様子ニ而候由、近年於御当地モ御儉約ニ而右体之儀御禁止ニ被仰出候処、其旨ニモ致違背、国司ニモ御遠慮ニ可思召事候、殊別而所之造作ニ成候由、旁以不可然儀ニ候、其断申達、向後申請可被致無用事、一付衆之儀、国司へ参上可為無用旨、前々被仰渡候得共、其通ニ而者難成候哉、付衆迄罷出之由候、然処近年者登城之節、道具ヲ為持太刀目録持参之衆モ有之由其間得候、各存知之通於御当地モ太刀進上之儀者別而御吟味有之事候処、不似合儀ニ候、且又道具扨持セ候儀重量量方僭上之至ニ候、被召仕士之差別モ無之様子ニ而不可然候、向後右体之儀可為停止之事、

一在番之面々首里ニ参候刻、何之用事ニ而何某所へ参候旨奉行へ相断、差回数第指越用事可相達之、尤、一宿之儀者不及申、夜更候迄罷居候儀モ可為停止、差而用事モ無之処、見廻迄参候儀無用ニ可申付候事、

一從御国罷下候船頭・水主、奉行之家来ニ取入、国司之不勝手所々之障ニモ無構自由ガマシキ儀ヲイタスノヨシ、別而不屈之至ニ候、能々可被人念事、

一奉行并付衆之家来トモ入札之人数加リ、占メ買イタシ町人同前ニ商売仕、又者国司へ借物等申出諸事妨ニ成候由、畢竟主人申付様緩故ニ候、向後稱敷可被致禁止事、

一付衆并家来下々ニ至迄、無作法之儀無之様入念可有差引、就中酒女之戒堅固相守候様時々可被申渡之事、

一奉行并付衆、在番中不慮ニ家来之内相欠候ハ、此元ヨリ呼寄可召置之、若呼寄候儀難成時ニ候ハ、琉球人備置可召仕之、遠島之在番ニ候処、人数不足ニ而者御用達間敷候間可致其心得候事、

一御当地ヨリ罷下候衆、質物ヲ取置琉人へ物ヲ借候人跡々為有之由候、是以不可然候、若左様之人於有之者早速

可被申上之、為仕置被差渡候、奉行へ相付候人輕キ儀
二而モ商売ガマシキ儀、別而不成合儀候間、堅可為停
止之事、

モ御条書之写拝見仕候様ニ可被申達候、向後心得之為
二モ可罷成儀ニ可有之候条如斯御座候、恐惶謹言、
三月廿五日
新納近江久

一船改ニ罷越候刻、船頭ヨリ酒肴ヲ出馳走之儀、於何方
モ禁止之事情、就中遠国之儀候間、堅可為停止之事、
一在番之面々、船頭・加子・町人等之所へ振廻ニ差越候

稻嶺親方
池城親方

儀堅可為停止、并船遊・野遊等船頭・加子・町人酒肴
持来候トモ致受用間敷候事、

伊野波親方
金武親方

右之条々、堅固ニ相守之勤番尤ニ候、此等之旨新納近
江方へモ申渡候、若於緩疎者急度可及沙汰者也、

一七〇三

貞享五年辰二月

(種子島久時)
藏人 印
(新納久)
又左衛門 印

渡唐船糸物買入云々達書

(喜入久亮)
右衛門 印

覚

(島津忠守)
大学 印

一大清ヨリ琉球へ買渡候糸・巻物、於琉球密々商人共買

(島津久行)
図書 印

取候哉、抜荷過分ニ有之、万一他国へモ出之抜荷物之

海被仰付候、不限此儀何篇見聞之趣申出候様ニ申渡置

可及御沙汰哉ト御心遣之儀候ニ付而、此節横目兩人渡

三原次郎左衛門殿

候事、

(一七〇二の二)

追而致啓達候、今度三原次郎左衛門方へ被 仰渡候御
条書之写差越申候ニ付、弥被奉得其意、大和横目中へ

一近年者在番付衆家采分ニ商人召列、何角仕繰商売等モ
仕之由、御当地ヨリ罷下候水主共申付大形ニ有之、氣

随意之儀共モ候之由、此外在番之以権柄我儘之儀有之、諸事被申付船々仕出シナトニ勤之、情怠故滞候儀モ有之候様相聞得候付、可入念旨此節在番へ以条書申渡候事、

一在番付衆諸所へ為懸差越、狩之催促仕之由候、狩殺生之儀付而者、從 公義被 仰出趣モ有之候得者於琉球可有其遠慮事候、百姓共耕耘之妨ニモ罷成候条、猪・鹿田島アラシ候ニ付狩仕候儀者各別、為遊興殺生イタシ候儀令禁止之旨、在番へ申渡候事、
右之趣被承置、琉球へモ可被申越者也、

十月十八日

一七〇四

定

一運賃船送状之外私荷物持渡候ハ、以差出別ニ送状ヲ取、鹿兒島役所へ出シ、以下知品物可取之事、
一従前々琉球上下之船ニ女致往来儀禁制之間、弥可相守候ニ付、刀・脇差・弓・鉄砲并玉薬・具足・トビナシ之類持下ル儀可為停止事、

一船頭・水主、カシ物之方ニ地下人ヲ内之者ニ召成儀堅令停止候事、

一船頭・水主、於島中ニ万買物カケニ入付儀禁止之事、

一船頭・水主之モノ、致驕或押買押売仕儀、曲事深重之間堅可申付事、

一船頭・水主於島中女房道所帶立候儀、前々ヨリ御禁制之処、頃日相背モノ有之由不可然候、向後稱敷可致沙汰之間堅可申付事、

一地下人就為致祝儀、船頭・水主或水カケ或祝物ヲ遣致酒宴儀令停止事、

一船頭・水主、衣類御定之ゴトク可為木綿布候、尤、上帶・下帶マデ木綿布之外堅令停止事、

一船頭・水主、法度相背致寺領由候、向後者奉行ヨリ糺(各力)各之輕重或科物或籠舎可申付候事、

一船頭・水主、博奕ウツ事堅可為禁止、若相背族、船頭者致付状鹿兒島へ可為差上候、水主者籠舎申付、其上為科料銀子一枚、勿論其船頭へモ同断之過料可申付事、
一在番衆受替之節、荷物ノセヲロシハ乗船ノ水主其外下リ船之水主タルベシ、地下人召仕間敷事、

一 運賃船仕上七米モ不請取前運賃取候儀(可カ)令禁止、尤、

水主飯米於無之者其船之応人数可相渡之事、

一 琉球ヨリ上国之人、不依何色数寄道具持上候ハ、琉球奉行見届、於無御用者可致沽却事、

一 諸船荷物積入日和待シ間、何方之湊ニ於テモ船頭・水

主猥ニ陸地へ下儀可為停止、勿論遊女之類通融一切禁止之事、

右条目之旨堅固可相守候、若違背之族者可及沙汰之条、

無緩様可申渡候、勿論奉行代合之節者儘可被繼渡者也、

明曆三年丁酉九月十一日

(鎌田政有)

源左衛門

(町田久則)

勘解由

(新納久詮)

右衛門

(伊勢貞昭)

兵部

(鎌田政昭)

筑後

(島津久頼)

筑前

(島津久通)

図書

一七〇五

諸船頭覚悟之条々

一 被 仰渡御条目之趣、謹而可相守之事、

御法度之宗旨、琉球往来能々可相改之事、

一 他国人并住所不相定者、船中ニ忝人モ為乗來間敷事、

一 積荷物之内御法度之物上下共ニ積入間敷候、尤、小荷

物之内迄モ相改候、為内々横目付置候間可有其心得事、

一 惣而御法度之物密々致商売候儀、其船中之者存候而内

証ニ而申出者於有之者、一簾(廉カ)御褒美有之様ニ鹿兒島へ

可申上候事、

一 諸水主那覇之外へ可參節者如定手札申請、同日日入前

ニ自身銘々可相納之、ワラシ札・ヲトシ札料可申付

之事、

付、泊辺迄者無札ニ而參者有之由、是以不届候、向

後者手札可申請候、諸船頭者船中致主取者之儀候間、

乱行仕出合有之間敷候間、右之手札令免許候事、

一 諸船頭五人組有之候間、水主ニ至迄無作法ニ無之様可

申付、与中緩之儀候而出合於有之者其科可申付候、左

候而、右之一組ハ永々琉球下リ可召止事、

一 喧嘩口論不依何篇無理ヲ仕掛ル人有之候共、其場致堪

忍、披露仕ニ於テハ急度僉儀可申付候、私ニ事ヲヤブ

リ候ハ、其科可申付候、

一出合可有之刻者不依付組、他組差寄致僉儀、非法ナキ様ニ可相濟候、若其趣不致承引者於有之者其組ヨリ可有披露事、

一諸船頭・水主之者致氣任之由候、自今以後可相嗜候、并酒女可戒之事、

一所中へ火事可有之時分者諸船頭水主召列、御番所之様可打続、直ニ火元へ參間敷事、

一為仕登船上国之時分、道之島ニ而仕練ナトイタシ、仕舞致遅々故順風ニモ乗後致滞候由、後日之為申分二者何方之湊ヨリ其風ニ而者出船難成ナト、申之由、前々ヨリ其間得候、自今以後左様之儀於有之者御沙汰之上曲事可申付候、尤、順風惡敷難叶仕合ニ而何方之湊ニモ滞留イタシ候ハ、其所在番衆并役人ヨリ証文取候而鹿兒島御船手へ可差出之事、

一送状申請候而順風有之候処ニ、船中無仕舞モノ共有之由候而爰元湊へ一刻モ滞留仕間敷候、若違背之者アラバ至船頭曲事可申付事、

一大和下リ并先島上之入津之時分者不及申、当地ヨリ渡

唐船帰帆之節、又者当地之船諸所ヨリ穀物積米候船入津之刻モ、此地へ居候船々ヨリ挽船無遅々可出之事、

付、入津之諸船頭、浪風立候而入津難成被及見候ハ、引船ヲ出、早速引入候様ニ可心懸候、浦々諸島々自引船ニ而見合致遅々破損候ハ、致沙汰曲事可申付候事、

一右引船出候刻、類船於有之者先船ヨリ次第二賦付、無親疎可相付候、親類之船タリト言トモ、先船入津無之内ニ跡船ニ引船多可相付儀可為停止、若此旨相背致最負跡船ニ引船多ク相付候ハ、可致沙汰事、

一国司様者不及申、御兄弟衆或三司官衆或大身之衆、於途中船頭・水主參合候ハ、イカニモ慇懃ニツクハヒ可相通候、疎略之体仕間敷事、

一船頭・水主之者、地下人ト出合之刻者不及申、傍輩中寄合之砌タリトイフトモ、惣而武芸之沙汰仕間敷事、一蘇鉄并蘭商売之儀、向後御分國中モ御法度被仰付候間、蘇鉄商売差登候儀堅御禁止候、船頭・水主自分用又者頼之人有之候共持登間敷候事、

一下島之船、御船手送状之通面付無相違当島ヨリモ送状

相付差登筭候間、猥ニ脇之船ニ水主不乗替様ニ可格護候、若又他船ヨリ傭乘渡儀候者其段可申出候、其節可致免許候事、

一大風之節、諸船水主三ヶ一差分候而早速奉行所へ可差出候、從警所船可及難儀方ニ見合ヲ以加勢可申付事、右之条々、雖不新候自今以後堅固可相守之、若違背之族於有之者横目付置候条、船頭者不及申組中迄可為越度者也、

明曆三年丁酉九月

奉行所

鹿児島県史料編さん関係者

資料調査 編集員	高 原 千 鶴 梶ヶ山 梨 沙 中 野 尚 子	学芸専門員 崎 山 健 文	調査史料室 長 徳 永 和 喜	副館長 坪 水 満	館 長 高 山 大 作	鹿児島県歴史資料センター黎明館	堂 満 幸 子	宮 下 満 郎	三 木 靖	委 員 原 口 泉	九州大学名誉教授	鹿児島大学名誉教授	国立歴史 民俗博物館元館長	史料編纂所 所 長	東京大学 史料編纂所 所 長	加 藤 友 康
	黒 樺 山 美 和							塩 満 郁 夫	日 限 正 守	晋 藤 哲 哉	安 藤 保 夫	五 味 克 夫	宮 地 正 人			

鹿児島県史料

薩摩藩法令史料集六

平成22年2月23日 発行

非売品

編 集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発 行 鹿 児 島 県

印刷所 株式会社 ぎょうせい